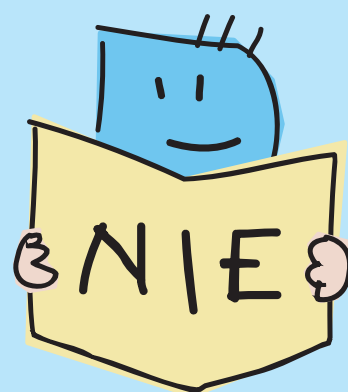


2024 年度

教育に新聞を



Newspaper in Education

NIE 実践報告書

北海道NIE推進協議会編

2024NIE 実践指定校

実践報告書

「生きる力」を育むために



- 主体的・対話的で深い学び
- 体験的な活動
- 言語能力の育成
- 地域・家庭との連携

北海道N I E推進協議会編

2024年度「北海道NIE実践報告書」の発刊に寄せて

北海道NIE推進協議会

会長 菊池 安吉

(日本NIE学会 会員)

NIE実践報告書「第28集」を刊行することになりました。

今年度の実践校32校の先生方が、全道各地において地域や学校の立地条件、児童・生徒・学生の実態などを考慮し、創意工夫したNIEの実践の成果と課題がまとめられています。

報告書には、2020年、小学校から順次実施された学習指導要領の改訂を踏まえて、「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適な学びと協働的な学び」の実現に向けたNIEの取組が多数掲載されています。現行学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」を理念に掲げ、「何を学ぶか」だけではなく、「何ができるようになるか」を明確にし、「どのように学ぶか」の重要性を提示しています。また、GIGAスクール構想により1人1台端末が配備され、精力的な授業改善が行われてきました。しかし、一方では、学ぶ意義を十分に見いだせず、主体的に学びに向かうことができていない子供の増加や、不登校や外国人児童生徒への支援が不十分な現状、習得した知識を現実の事象と関連づけて理解することが弱いなど、課題として顕在化してきたこともあります。学校で身につけるべき力を「実社会でも通用する力」とし、学力観も転換期を迎えていますが、学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ばです。

今回の実践報告の中には、日本新聞協会が実施したNIE学習効果調査の結果と同様に、児童生徒の「聞く力・話す力」「読む力」「書く力」「理解力・考えを深める力」「主体性」で伸びたと評価する声が上がっています。一方、全校を巻き込んでの実践や実践頻度を増やすことが今後の課題とする報告もあります。これまで複数の実践校が学校司書や図書事務、司書教諭との連携・協力の大切さに触れています。しかし、北海道に多い小規模校では、司書教諭もおらず、図書館担当も学級や教科を担当しており、日常的に図書館を軸としたNIE実践に取り組むのが難しい実態も見え隠れします。全校上げての継続的な取組が学力向上に結びつき、学校全体で実践することの効果と有用性は言うまでもありません。さらに、小・中学校のつながりや家庭・地域との連携を意識して取り組んだり、児童生徒会の委員会活動と連動したりすることも大切です。特別支援学級や特別支援学校・高等支援学校での実践も増え、その有効性も徐々に見えてきました。

2024年夏に開催されたNIE全国大会京都大会のスローガンは、「探究と対話を深めるNIE デジタル・多様性社会の学びに生かす」。公開授業や実践発表では、複数紙の読み比べで批判的に読み解くことの重要性やデジタル新聞づくりを通して発信する情報に責任を持つことの大切さ等が話題となりました。新聞の発行部数は、十年前と比較するとおよそ4割減です。今後は、紙媒体とデジタルの活用をどのように進めるか、対話型生成AI（人工知能）をどのように活用していくか、偽情報の拡散を見抜く力をどうやって身につけるか、課題はたくさんありますが、実践の成果と課題を全道で共有しながら一歩ずつ前に進めていきたいと考えます。速報性があり、記事の鮮度は高いが玉石混淆のネット記事のみに振り回されることなく、メディアリテラシーを身につけさせ、批判的な思考を育て、新聞の持つ信頼性や一覧性のよさ、新聞の魅力を再確認したいと思います。新聞を開いたときの思いがけない記事との出会いは、フィルターバブルのネット記事検索では遭遇できません。NIEの裾野を広げ、「NIEの種蒔き」に継続的に取り組んでいきます。

最後に「実践報告書」の発刊に当たったNIE事務局をはじめ、NIE実践校の先生方、新聞関係者の皆さんに大変お世話になりましたことを報告しお礼申し上げます。

目 次

巻頭言	2024年度「北海道NIE実践報告書」の発刊に寄せて	2
	北海道NIE推進協議会 会長 菊池 安吉（日本NIE学会会員）	

日本新聞協会認定・NIE 実践指定校

小 学 校

●「新聞に触れて、読み取る力、書く力を高める実践」	6
えりも町立庶野小学校（新規校）	池原 慶志郎
●「主体的に学び、互いに考えを伝えあう児童の育成」	10
浦幌町立上浦幌中央小学校（新規校）	丸矢 進
●「新聞記事を活用した特別の教科 道徳の実践」	14
札幌市立百合が原小学校（継続校2年目）	北川 悠佑
●「MNI教育の実践」	18
田中学園立命館慶祥小学校（継続校2年目）	福原 拓紀
●「新聞を野付の身近に」	22
別海町立野付小学校（継続校2年目）	宮向 伸子
●「新聞に親しみ、授業で活用できるように」	26
札幌市立藤野小学校（継続校2年目）	立野 弘高
●「地域とつながり、豊かな心を育てるNIEタイム」	30
札幌市立緑丘小学校（継続校3年目）	高橋 周
●「新聞を活用した『分かる・できる・楽しい』学習の展開」	34
～本校児童の課題を踏まえた実践から～	
札幌市立明園小学校（継続校3年目）	檜 克博
●「学校図書館を中心とした新聞の活用」	38
旭川市立永山小学校（継続校3年目）	牧野 広太、中島 環
●「NIEと共に歩む」	42
岩見沢市立中央小学校（継続校6年目）	富樫 いずみ

中 学 校

- 「情報文を読み、自分の意見を持つ」 46
札幌市立宮の森中学校（新規校） 松尾 暁子
- 「情報発信とフェイクニュースを意識したNIE」 50
～北海道と新潟の中学生による新聞づくりを通じた交流授業～
函館市立南茅部中学校（新規校） 武岡 良
- 「新聞の活用と対話・協働学習」 54
北広島市立西部中学校（新規校） 野田 朝日那
- 「社会認識を高める新聞活用」 58
北海道教育大学附属旭川中学校（新規校） 吉田 雅風
- 「新聞に触れさせる工夫・読ませる工夫」 62
札幌市立屯田北中学校（継続校2年目） 福井 剛史
- 「生徒が主語になる新聞活用を目指して」 66
旭川市立永山中学校（継続校2年目） 鏡 拓也
- 「意見文作成における情報の関係性」 70
―「具体」と「抽象」を起点とした、“知識”の獲得―
札幌市立真栄中学校（継続校3年目） 遠藤 翔太
- 「めざす資質・能力の育成に向けた持続可能な活動」 74
別海町立上西春別中学校（継続校3年目） 猫宮 和也
- 「『まとめ新聞』『新聞スクラップ』の制作」 80
芽室町立芽室西中学校（継続校3年目） 掛水 成幸
- 「日常の学びを『社会生活に結びつける』NIEの実践」 84
浦幌町立上浦幌中学校（継続校4年目） 中村 宏喜
- 「新聞を読んで読解力、思考力、表現力を高める」 88
小樽市立北陵中学校（継続校8年目） 窪田 達大

義務教育学校

- 「世の中と子どもたちをつなぐ社会科学習」 92
～社会科学習のイメージ化のための新聞活用～
安平町立早来学園（新規校） 片岡 鉄也

新聞に触れて、読み取る力、書く力を高める実践

えりも町立庶野小学校 教諭 池原 慶志郎

1. はじめに

本校は全校児童28名で1・2年、3・4年、5・6年の完全複式校である。少人数であり、地域の方々との交流や校内では縦割り活動など、より多くの人（大人も子どもも）と触れ合う工夫を行っている。日高管内でも南端に位置し、海と山に囲まれた自然豊かで昆布などの漁業中心地域である。

かつては広葉樹が茂る豊かな原生林があったが、明治から昭和にかけて燃料確保のための伐採や、牛・馬・羊の放牧などによって森が急速に失われ、更にはえりも特有の強風に晒されて砂漠化していった過去がある。すると山からはミネラルが無くなり、土砂で水が濁り、海産物資源が枯渇していった。海と山の関係性を痛烈に感じた当時の漁師たちは緑化事業をスタートさせ、並々ならぬ努力によって半世紀かけて森と海を生き返らせた。70年経った現在でも、えりも町内の小・中・高校ではそれぞれの段階で緑化事業に関わると共に、地域学習を深めてきている。

今年度、本校の重点目標を『主体的に学び合い、自分の考えを表現できる児童の育成～ICT機器を活用した対話的な学びの工夫～』とし、『R80』の手法も取り入れながら日々の授業改善に取り組んできている。

本校の実践指定校としては今年度からであるが、本報告書は、昨年度から取り組んでいるNIEの実践についてまとめたものである。

2. 児童の様子

上級生が下級生の良い手本となっており、伝統的に受け継がれてきている。児童会として書記局、保体、文化、放送の各委員会が、学校生活がより楽しいものになるように様々なレクやイベントを活発に行っている。その中でも図書委員会では読み聞かせやクイズイベントを通して読書の楽しさを伝えている。その結果、図書館での貸し出し数は、低中学年児童が特に多く、町図書館からバスで新刊などが巡回する『移動図書』も楽しみにしている児童が多い。一方、高学年では昨年から校内に設置した新聞コーナーで新聞に目を通す児童がおり、各学年での取組でも新聞に慣れ親しむ工夫が行われている。

3. 実践の内容

①全校児童が閲覧可能な場所への設置



子どもたちは20分間のフリータイムや昼休みに体育館へよく行く。その際に全校児童がよく通



る場所が職員室前であり、目に付きやすい場所として新聞コーナーを設置した。図書館へ設置することも考えたが、家庭での購読数も少ない現在、より身近に目に付く場所への設置を優先させた。児童は登校後に目を向けていた。

②児童に読んでほしい記事の設定



新聞をただ設置しただけでは、児童は読まない。知らない文字が多く、新聞は難しいというイメージがある。よって読む気は皆無と言ってもよい。少しでも目を向けてもらうためにも、地元に関わるものや小中学生に関わる記事などを中心に管理職の先生方に赤線で囲んでいただき、「タイトルだけでも見てください」と伝えている。

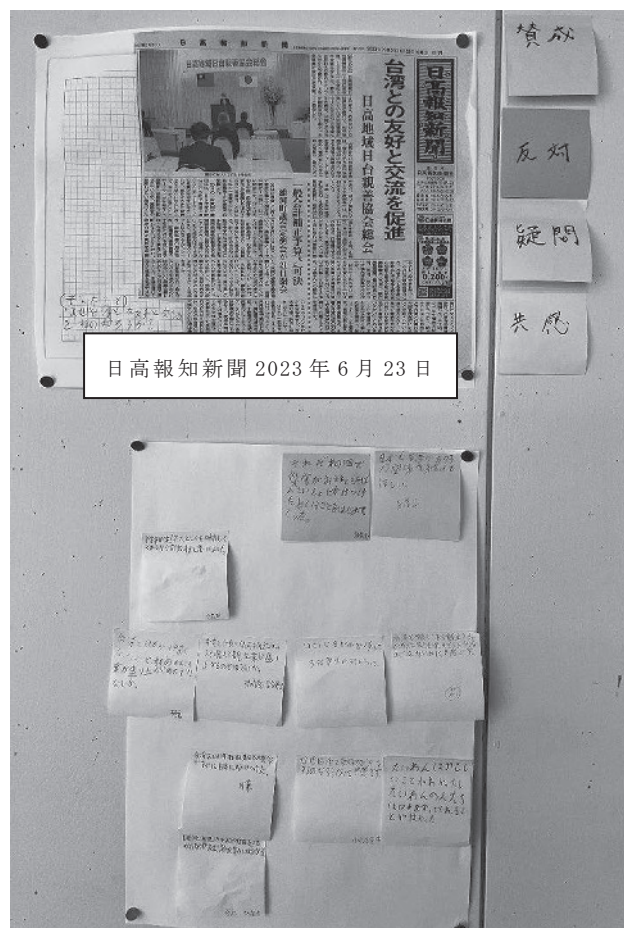
③本校に関わる記事の掲示



本校の活動について掲載された記事を切り抜き、事務生さんに飾りをしてもらって壁に掲示している。子どもたちは自分の顔など

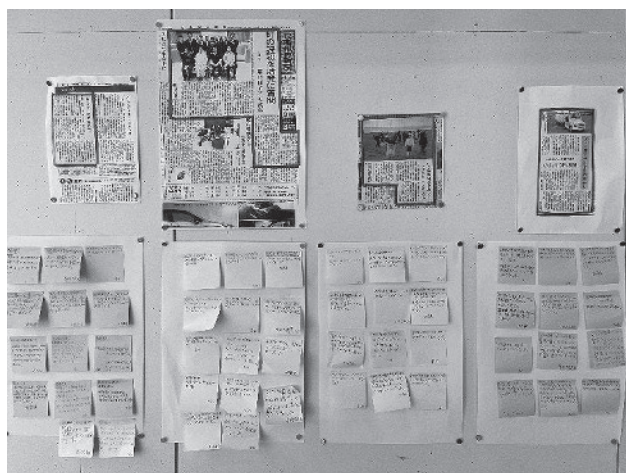
が写されている記事を、興味をもつてのぞいていた。また、教師や友人との共通話題となり、会話がすすんでいた。

④朝学習の時間における継続的な取組



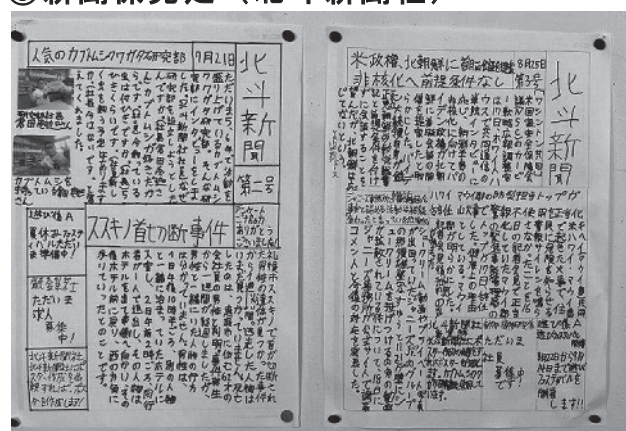
5年生国語の単元「新聞を読もう」「情報ノート」の学習から、5・6年学級の児童が行っている取組。新聞から選んだ記事についての感想や考えを書き、その感想や考えに対して他の児童からも意見を付箋に書く活動を行っている。付箋の色によって賛成・反対・疑問・共感と、内容がわかりやすくなった。それらの付箋を、新聞を設置している場所の壁面に掲示し、様々な考えを全校児童が見られるようにした。昨年からは、朝学習活動の一環として取り組んできている。

取組当初は2行3行位の文章量であったが継続して行ってきたことで明らかに文章



量が増え、理由を加えて書くようになった。

⑤新聞係発足（北斗新聞社）



昨年度からの取組で、5・6年学級内での子どもたちによる自主的な係活動が発足。2名でスタートし、当初は世の中のことを学級に知らせていたが、次第に学級や校内のことを記事として扱うようになった。今年度は3

今年最後の北斗新聞発行

この度、北斗新聞社は今年最後の北斗新聞を発行しました。6月に北斗新聞社として設立した北斗新聞社ですが、お客様にご愛顧いただき1号から11号まで発行することができました。来年も北斗新聞を発行する予定なので、よろしく願います。来年も北斗新聞社、そして3学期から放送する北斗放送局をよろしく願います。それではみなさん、良いお年を！

北斗新聞

第11号
2023年
12月22日(金)発行

【編集】

5・6年生

北斗新聞社



今までの
北斗新聞
(第9号、
10号)

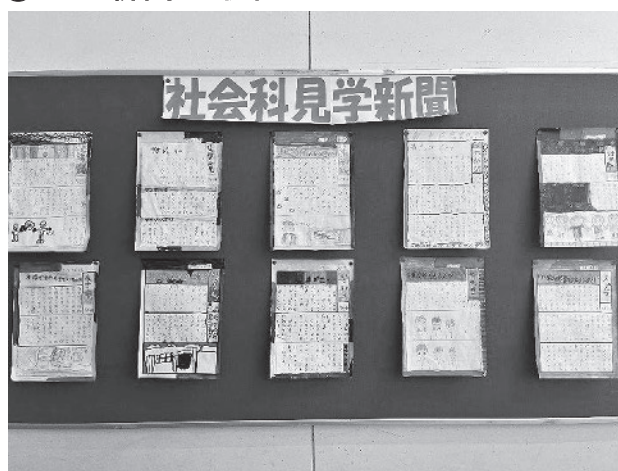
名で記事を書いており、学級のお楽しみ会など、校内の身近な内容を中心に制作している。発刊当初は手書きで行っていたが、先生方や友だちからのアドバイスを参考に、

現在では端末を使いこなし、写真を差し込むなど、記事が読者により伝わるよう、工夫する姿が見られる。見やすさや内容のわかりやすさを周囲から誉められるなど、やりがいにもなっているようである。

余談ではあるが、昨年、本校の一日防災学校にNHKさんをお招きして行ったのだが、終了後に校長室で担当の方々と話していると、北斗新聞社の児童2名が来室し、「ジャーナリストの先輩として、自分たちの新聞を評価してほしい」と伝えてきた。突然の来訪にも関わらず、貴重なアドバイスや「今のうちからこういったことに目を向けて記事を書くことは本当に素晴らしい」といただき、本人たちは満足そうであった。



⑥ミニ新聞の取組



写真は3・4年生の社会科見学のもの。見学地の特徴や感想を、実際に質問などをして

得た情報を文章化し、ミニ新聞として紹介。挿絵を工夫して入れたり、限られた文量にまとめ上げたりと、国語科としての学習も兼ねて行っている。

⑦校長講話での記事紹介



始業式や終業式での校長先生の挨拶において、少しでも社会に目を向けてもらうことを目的に、時事的な内容や心に残る広告などをもとに講話をしていただいている。子どもたちに関係の深い記事を紹介していただき、その後、各教室においても更に話題にして深化を図っている。

4. 成果と課題

(1) 成果

授業以外でも日常的に文章を読む活動、書く活動に親しむ機会を多くもつことができたことで、子どもたちの資質・能力は大きく高まったと実感している。

また、国語科や社会科の授業を中心に取り入れてきたことで、情報活用力や読解力、要約力、語彙力、表現力などの文章力が明らかに身に付いており、他教科においてもそれらの力が発揮されてきていると感じている。

(2) 課題

購読者数が激減し、新聞を置いている家庭はほとんどない。大人が読まなくなっている状況で、子どもたちが読む（目にする）場面も激減している。せめて学校内で新聞に親しむ環境をつくることで、前述したような資質・能力の高まりの一助としたい。

NIEの絶大な効果は明白だが、子どもたちにとっては敬遠されがちである。当たり前のことだが、教師が音読するなどのスモールステップや読みたくなる仕掛けなど、取組の工夫は欠かせない。

5. おわりに

『新聞を読む子と学力の相関関係』については、効果的と取り上げられてから久しい。新聞は無くても授業はできるが、活用することで学びに厚みをつけ、子どもたちの思考力にアクセントをつけ、より深い学びに繋げていけるものとする。そして、社会に対して自分の意見を持つようになるなど、自分事として学ぶ手段としても新聞は大きな力になると考える。また、その効果は文章力・読解力などの向上だけではなく、脳の活性化や社会動向の把握など多くの利点があり、仕事や勉強、日常生活など様々な場面で役立つことが期待されている。購読者数が減っている現状は寂しい限りであるが、本校の子どもたちには明らかに力がついてきた。今後も意図的に継続的に発達段階を踏まえながら、新聞の活用を図っていきたい。

主体的に学び、互いに考えを伝えあう児童の育成

浦幌町立上浦幌中央小学校 教諭 丸 矢 進

1. はじめに

本校は、十勝管内と釧路管内の境界となる浦幌町の北端に位置し、西と北東に小高い丘陵を連ね、その間の狭い平地に位置している。主幹産業は畑作、酪農で大規模経営の農家が多く、保護者の9割が農業関係者である。

昭和61年、上浦幌地区に分散していた5校が統合して開校したが、児童数の減少が進み、令和8年度より、隣接する中学校と共に、義務教育学校として新たなスタートを切る予定である。

本町より30km以上離れているため、生活圏は隣接する本別町である。過疎化が進んでいるため、朝刊が夕方に配送されるなど、かつては情報入手の難しい地域であったが、インターネット、スマートフォンの普及とともに、情報の入手は容易になっている。



2. 児童の様子

本校では、学びの連続性・必要感・関連性を自覚しながら学ぶ意欲を高めるために、興味・関心に沿った子ども中心の授業づくりを

推進している。

また、学力検査の分析等から、学力向上が大きな課題となっている。問題を正しく認識できない、問題文の解釈に時間を要するなど、情報を時間内に的確に処理できないことが原因と思われる。そうしたことから、

○意欲的に学び続ける児童の育成

○道筋を自ら立て、課題解決できる力の育成に重点を置き、指導改善を図っている。

特に授業では、児童が必要な情報を集めたり、整理したりして課題解決への道筋を立て、互いの考えを伝え合いながら学びを深める力の育成を目指している。

加えて、語彙力の定着・読解力の育成も課題であるため、新聞を活用した学習活動を展開している。

3. 実践の内容

① 新聞コーナーの活用

本校では、これまで地元紙である十勝毎日新聞、朝日小学生新聞、北海道小学生新聞の3紙を購読している。

児童玄関前に新聞コーナーを設置し、児童が自由に読めるようにしている。



家庭で新聞などを読む習慣のない児童も、コーナーを通るときに記事の内容を確認し、朝の時間や休み時間、放課後など、自分の読みたいタイミングで新聞を読んでいる。

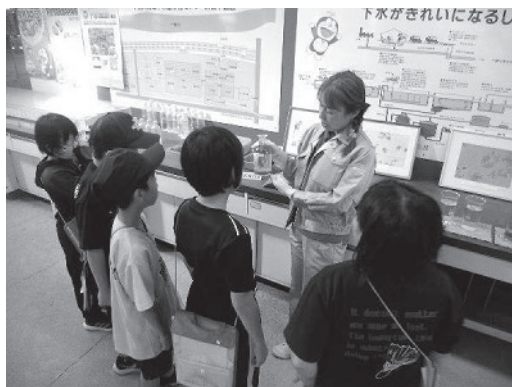


② 体験活動と連続した新聞づくり

本校では、新聞づくりを通した教育活動に力を入れており、全校児童が発達段階に合わせた新聞づくりに取り組んでいる。

低学年は、生活科や校外学習で体験した内容を絵や文章でまとめる活動として、国語や生活の時間に、はがきサイズのミニ新聞づくりに取り組んでいる。

中学年は、学級の様子を伝える学級新聞や学習のまとめとしての学習新聞、社会見学で学んだ内容を整理し、協力してかべ新聞づくりに取り組んでいる。



取材活動

高学年は、総合的な学習の時間で調べた「ふるさと学習」のまとめとしてかべ新聞づくりに取り組んでいる。児童が上浦幌にフォーカスしたテーマを設定し、取材した内容をまとめ、修学旅行でPR活動を行い、その成果を新聞で紹介している。



毎年、十勝管内のかべ新聞コンクールで入賞するなど、本校の伝統となっている。

③ クロヌリハイクを作ろう

2023年に松山市で行われた、第28回NIE全国大会で紹介された、「クロヌリハイク」を3・4年生で学習した。

クロヌリハイクとは、黒田マキ氏が創案した、新聞記事を黒く塗りつぶし、選んだ言葉で俳句を浮かび上がらせたアート作品です。

作成の手順は①季語を探す ②五七五に仕立てる ③黒く塗る の3つのステップです。

今回は、初めての取り組みのため2時間扱いとした。

1時間目に「クロヌリハイクの作り方」を学習した。全国大会でも紹介された愛媛新聞のHPを活用しながら、全員で同じ記事を使って学習を行った。

国語で学んだ、俳句づくりの基本①季語を入れる ②五七五でつくる の2点をしっかりと確認しながら活動を進めた。

記事を塗りつぶす場面では、例文で使用されている「スイセン」の言葉に興味を持ち、タブレットで調べながら、花の形を表現するなど、思い思いのデザインに表現することができた。

2時間目は「クロヌリハイクを作ろう」とし、記事を選び俳句作りを行った。

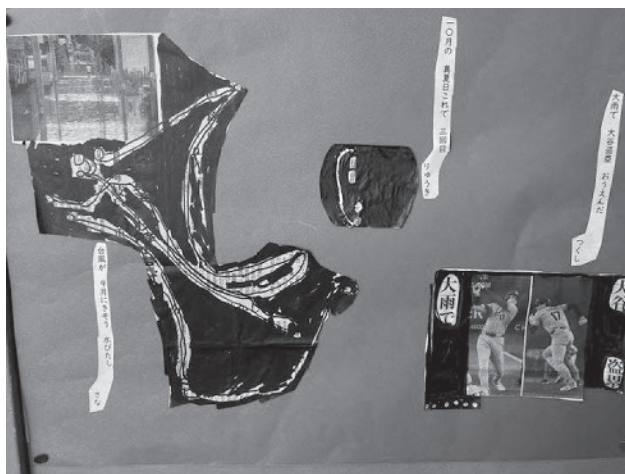
新聞をストックしている部屋から興味を持った新聞を選び、前時で学んだ手順で学習を進めた。

まず、記事の中から季語を探して鉛筆で印をつけた。見つからない時はタブレットで調べながら季語を選ぶことができた。



次に、季語の周辺から使えそうな単語をつなげて五七五の俳句を作った。うまくまとまらない時は、記事をまたいだり一文字ずつの言葉をつないだりと、工夫しながら作成することができた。

最後に、俳句で使う文字の周辺を黒く塗りつぶした。俳句の内容に合わせて、デザインするなど、練習時よりもさらに集中して取り組むことができた。



完成後は、作品を紹介し、学習の振り返りを行って授業が終了した。

4. 成果と課題

(1) 成果

1年目ということで、まずは、できることから進めるようにした。

- ① 発達段階を意識した新聞づくり活動を整理することができた
- ② クロヌリハイクなど、指導の工夫で、児童の興味・関心を高め、学習内容の定着が図れた。
- ③ 実践を職員間で交流し、授業参観を行いながら、授業改善を図れた。

(2) 課題

- ① 新聞づくりや新聞活用の授業を行うための時数確保が難しい。
- ② 情報を読み取り、的確に処理する力を育てる実践を、系統的に行っていく。

5. おわりに

本校では、これまで新聞づくりを中心とした実践が進められてきた。今後はその伝統をさらに進化させるために、読解力と表現力を高める実践を進めていくことが次年度の重点と考えている。

また、令和8年度から義務教育学校へ移行することから、同じ実践指定校でもある中学校と連携し、教育課程における新聞活用の位置づけを協議していきたい。



クロヌリハイク

【単元の目標・指導計画】 2 時間

- ・ 易しい文語調の俳句を音読したり暗唱したりするなどし、学習の見通しをもって言葉の響きやリズムに親しもうとしている。
- ・ 感じたことや想像したことを書く活動。

【本時の目標・本時の展開】

目標 言葉の響きやリズムを感じながら俳句を作ろう

「俳句のルールを確認しよう」

- ・ 季語
- ・ 五七五

「記事を読んで季語を見つけよう」

- ・ 記事の中から季語を見つけて印をつける。
- ※写真や見出しをヒントにする
- ※歳時記やタブレットで確認する

「俳句を作ろう」

- ・ 選んだ記事の周りから単語を選ぶ
- ※記事をまたいでも OK
- ※文字をつないで単語を作っても OK

「俳句以外を塗りつぶそう」

- ※自由に塗る アイデア・工夫 OK

「発表しよう」

- ・ 俳句を紹介する
- ・ 友達の作品の良いところを評価（コメント）する

「ふりかえろう」

- ・ 本時の学習を振り返る
- ※俳句作り、文語調の表現、リズム 季語などのキーワードを入れてまとめる。

新聞記事を活用した特別の教科 道徳の実践

札幌市立百合が原小学校 教諭 北川 悠佑

1. はじめに

本校は、札幌市北区に位置する自然豊かな百合が原公園に近い中規模の学校である。今年度はどの子どもも楽しく学び合い、挨拶と笑顔あふれる学校を目指すために、「主体的に学び合う あったか百合が原」を学校教育重点目標に掲げ、教育活動を進めている。



2. 児童（生徒）の様子

元気で明るい児童が多く、授業中の発言も多い。道徳の学習では、課題と自分の経験を結び付けながら、自分なりの考えを書くことができ、意欲的である。一方で、学校生活では少し幼い面があり、周りのことをあまり考えず、自分中心に行動する様子が多少見受けられる。

新聞に関しては、家庭で読む機会はほとんどなく、5年生の国語「新聞を読もう」で初めて新聞を読んだ児童も多かった。5年生では、「どうしなまな bell」を活用し、新聞を作ったり、読んだりする活動を通して、新聞に触れる機会を増やしてきた。

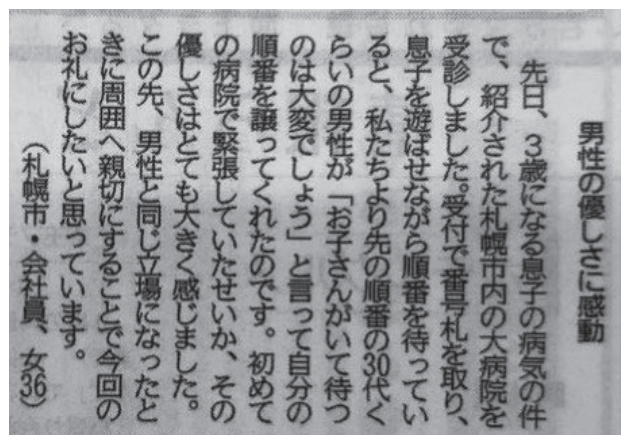


今回の実践では、新聞の投書欄を使い、親切について書かれた記事に触れてもらう。立場によって人の考えが変わること。そして、周りのことを考える大切さに気づき、これからの生活にも役立てようとする心を育みたい。

3. 実践の内容

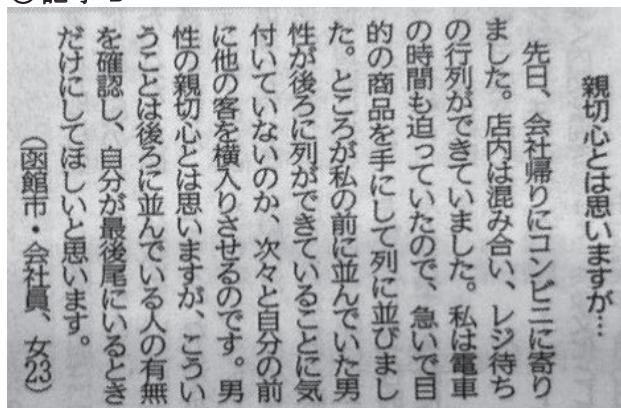
二つの記事を読み比べ、「本当の親切」について考える道徳の実践を行った。

◎記事 A



北海道新聞 2020年9月16日

◎記事 B



北海道新聞 2020年11月30日

道徳『本当の親切とは』

令和6年度12月17日(火)2校時

5年1組 28名

指導者 北川 悠佑

【本時の目標】

- ・親切に関する二つの記事を読み比べる活動を通して、「本当の親切」には相手に対して優しくすることだけではなく、周りの人への配慮も必要であることに気づき、誰に対しても思いやりの心を持つ道徳的価値を育てる。(実践意欲と態度)

【本時の展開】

子どもの学習活動	教師の関わり
○前回考えた、親切の定義を振り返る。	【子どもが自ら関わりたくなる教材化】 ○記事の一つずつ提示し、人物を確認することで記事の様子をイメージしやすいようにする。
人に優しくすること。困っている人を助けること。協力してあげること。	○新聞記事の一部をマスキングすることで B の女性の気持ちを想像できるようにする。
○親切に関する記事を読み、感じたことを話し合う。	○子どもたちが考えやすいように課題の言葉を A に限定したものとする。(自然に B と比較できるようにする。)
A 男性の優しさに感動 先日、3歳になる息子の病気の件で、紹介された札幌市内の大病院を受診しました。受付で番号札を受け、息子を遊ばせながら順番を待っていると、私たちより先の順番の30代くらいの男性が「お子さんかいて待つのは大変でしょう」と言っていて自分の順番を譲ってくれたのです。初めての病院で緊張していたせいか、その優しさはとても大きく感じました。この先、男性と同じ立場になったときに周囲へ親切にすることを今回のお礼にしたいと思っています。 (札幌市・会社員、女36) B 親切心とは思いますが… 先日、会社帰りにコンビニに寄りました。店内は混み合い、レジ待ちの行列ができていました。私は車の時間も迫っていたので、急いで目的の商品を手にとって列に並びました。ところが私の前に並んでいた男性が後ろに列ができていくことに気が付いていないのか、次々と自分の前に他の客を横入りさせるのです。男性の親切心とは思いますが、こういうことは後ろに並んでいる人の有無を無視し、自分が最後尾にいるときだけにしてほしいと思います。 (函館市・会社員、女40)	○まとめの前にふりかえりを書くことで人によって「本当の親切」の認識が違ふこと、共通している部分があることに気付くことができるようにする。
男性が順番を譲っていて優しい。この男性も順番は譲っているけど。後ろのことも考えるべき。	【学びをつなげる教師の関わり】 ○前時に親切の定義を捉えておくことで本時を通して、考えに変化があったかを実感しやすくする。
親切！ どうして A の男性は親切なの？ A 3歳の子どもの病気で大変だから。 困っているお母さんを助けたから。 周りの人も納得している！ 「本当の親切」とは？ 周りの人が嫌な気持ち！ 周りの人は順番が変わらないから。 周りの人も親切だと感じるはずだから。 後ろの人の順番がどんどん遅くなってしまっているから。 周りの人のことを考えられていないから。 ○ふりかえり(本当の親切とは何かを考える)	○自分の考えに自信が持てるようにペアで話し合ってから全体交流をするようにする。
親切にする相手だけではなく、周りの人も良い気持ちになる親切だから！	

【本時の評価】

2つの記事を比べたり、友達の考えを聞いたりして、周りの人への配慮が必要なことに気付くことができるか。(ワークシート・発言)

「本当の親切」について、記事を基に深く考えられるようにしたい。そのため、1時間目にこれまで培った生活経験やエピソードを交流し合い、「親切」についてのイメージを確認し合った。2時間目は、前時の「親切」の定義について共有した後、新聞記事を活用した学習をスタートした。



< 1 時間目の板書 >

4. 成果と課題

(1) 成果

①新聞記事の提示の仕方について

他の学級でも授業を行い、2つの記事を同時に提示する方法、Aの記事について考えた後にBの記事を提示する方法の2パターンを行った。

前者の方法では、Bの記事を読み、「男性が後ろを確認するべきだった」と核心に迫る考えがすぐに出た。しかしながら、Aの記事の状況や、優しさに着目する子が少なく、深まりの浅い学習になってしまった。

後者の方法では、前時に行った「親切」の定義と比べながら、Aの記事の状況や優しさをしっかりと捉えて考えることができた。そのあとにBの記事について考えることでAとBの記事を比較しやすくなり、「どうして、同じ親切なのにAだけが親切に感じるのか。」と子どもたちからの疑問や意欲を引き出すことができた。学習目標や比較対象にもよるが、深く記事について考えたいときは一つずつ提示していき、スモールステップでまとめていくことが、その後の深まりや学習のしやすさに繋がっていくことが分かった。

また、青枠をマスキングすることで登場人物の気持ちを想像したいという意欲を持つことができた。

親切心とは思いやりが、告げ、合点のうちに二つに切りました。店內は混み合い、レジ待ちの行列ができていました。私は電車の時間まで待たないで、急いで目的の商品を手にとり列に並びました。ところが私の前に並んでいた男性が後ろに列ができていくことに気が付いていないのか、次々と自分の前に他の客を繰り入らせています。男性の親切心は感じますが、この状況では後ろに並んでいる人への配慮を確認し、自分が最後尾にいることだけにしてほしいと思います。

②人物相関図について

児童と確認しながら、人物相関図を黒板に表した。記事を読んだだけでは分かりづらく、筆者の立場の違いや登場人物の置かれている状況、誰に対してどんな気持ちなのかを視覚的に認識できるようにした。児童のワークシートには「立場によって気持ちが変わる。」ということや「二つの親切は違う!」という記述が多く書かれており、新聞記事を扱う際には人物相関図を使うと、より記事に深く入り込め、考えやすくなることが分かった。



< 本時の板書 >

Bは、後ろに列ができていくことに気付いていないから親切じゃない?
Aは、女性の後ろに人がいたのかどうかが、周りをみていない。A=周りをみていない。A=周りをみていない。
他の人が並んでないから→Bは他の人が並んでいる。まわりをみれているから→Bはまわりをみれていない。
Aは、男小生が自分の順番をゆずってくれたから親切だと思っけ。Bの男小生は、うしろに並んでいるのに他の客が黄入りとせまから、うしろにいた女小生がごまかして黄入りさせてくれた客からは、親切だと思っけ。うしろの人からしたら親切じゃないと思います。



③周りのことを考える必要性について

児童の振り返りから、前時で学習した「親切」の定義と今回学習した「本当の親切」は少し異なることに気付くことができたと考えられる。また、ほとんどの子が周りの人が不快にならないこと、その場にいる全員が嬉しい気持ちになることが大切なことに気付くことができた。

本当の親切とは、周りを見て、ちゃんと考えて行動する
 ということが分かりました。昨日に考えたことは、
 全然ちがった!!!

どんな人でも不快に思わないうやさしさだと思いました。
 また、親切には色々な視線があることが分かりました。

まわりの人のことを思ってやすうた方がいいと思いました。
 親切はやさしくしたいじゃなくてまわりのことをかんがえて
 どうすることも大切なんだなどと思いました。

他の人や自分にもいいことがあってみんながウーンウーンになる感じ。
 い〜親切の加減がわからなくておもしろいかなって考えていたけれど
 といけないうずかしいけど

他の人のことも考えられていて、全員がうれしい親切が本当の親切
 だと思う。
 ・周りを見て、たれのめいわくにもならないような親切を考えれば
 良いと思う。

親切とは、人のためをわかっていてそのやさしさ
 だと思う。しる人に親切した場合は、まわりをよく見て、人のため
 わくにならない、正確に人としてからする事をすすめる。

親切とは、された人はもちろん、した人も見てる人も、みんな
 がうれしい事だと思っています。



(2) 課題

・課題の言葉選びについて

今回の授業では、「どうしてAは親切に見えるの？」という課題で学習を進めていったが、他の学級で授業を行った際は「Bの男性はどうしたらよかった？」という課題で授業を行った。

「Bの男性はどうしたらよかった？」という課題で行うとBの記事を中心に考えることになる。Bの男性が周りのことを考える必要があったのはもちろん、店員や周りの客も自分のことだけではなく、周りのことを考えて行動すべきだったということに気付くことができた。

一方、「どうしてAは親切に見えるの？」という課題で行った場合は、Bと比較しながらAの男性の状況や順番待ちの仕組み、親切にされた人の立場などを中心に考え、「本当の親切」についてより迫る授業ができたと感じた。

このように課題の言葉によって、児童の考えやすさや思考の流れが変わってくるということ、辿り着きたい目標によって課題の言葉を変える必要があることを実感した。他にも「AとBの親切は何が違う？」などの課題も考えられる。新聞記事を使った授業を行う場合、過去の指導案などは参考にしづらいため、ベストな課題の言葉を考えなくてはならないのが難しかった。

5. おわりに

新聞記事を活用した道徳の授業は児童の意欲を十分に引き出すことができる。文章から場面や人物の気持ちを想像したり、自分自身の経験も結び付けたりしやすい教材だと感じた。しかし、教師自身が記事を探し、授業を考えるのはあまり現実的ではないかもしれない。道徳の価値項目に合わせながら記事を自分で選び、授業を考えるのは大変である。教師自身が日々新聞を読み、授業に使える記事や子どもたちに伝えたい記事を探そうとする姿勢が大切である。また、無理のない範囲で新聞記事を活用した学習ができるように、道徳で使える新聞記事集などがあると、教育現場にNIEが広まっていくと感じた。

MN I 教育の実践

田中学園立命館慶祥小学校 教諭 福原 拓紀

1. はじめに

本校は札幌市の豊平区にある児童数 278 名開校 3 年目の私立小学校である。校地内に緑あふれる森を有する、豊かな自然環境が大きな魅力の学校でもある。また、こりつつ認定こども園と同一校地内にあり、交流活動も行われている。児童は、札幌市全域はもとより、千歳市等市外からも通学している。そのため多くの子が自宅から学校までの送り迎えをする「Door to Door」や、バスなどの公共交通機関を利用して通学している。

また本校は、北海道新聞社と連携し、MN I 教育を推進している。MN I (Master of News & Information) 教育は ICT の先を行く、より深く広い、温もりのある学びを目指し、インターネットだけではなく人、紙もメディアとし、進んで社会参加する子どもを育てることを目的とした教科横断的な学習である。この中で子どもたちは、自らを表現するためにメディアを使う。インターネットなどの情報技術はもちろん、関わる人も、書籍や新聞などの紙も、知識を深め人と交わる時間を豊かにし、社会に向けて自らを表現するための大切なメディアとして学びに活用している。

2. 児童（生徒）の様子

本校は Microsoft Showcase School に認定され、ICT を活用した教育活動に力を入れている。また、北海道新聞の「まな bell」にある「新聞を作る」を活用し、4・5 年生児童は宿泊学習の学びを新聞形式でまとめた。そしてそれらの作品を「第 1 回まな bell でつくろう！新聞コンクール」に応募し、学校賞を受賞した。

また、どの学年も週に 1 回、北海道新聞が選定した記事を活用したワークシートに取り組んだり、6 年生児童は朝学習の時間に新聞を読んだりするなどの時間を設け、新聞に慣れ親しむ様子が見られる。

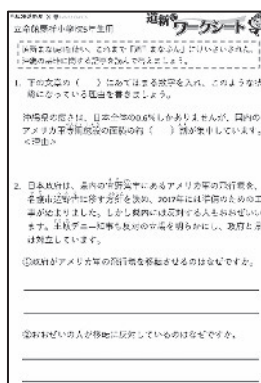
3. 実践の内容

① 週に 1 回 ワークシート

北海道新聞が選定した記事を中心に、ワークシートに取り組んでいる。文を読み取る力はもちろん、ワークシートに対応する適切な記事を検索し、より正しい情報を選択する力を養うために行われてきた。記事を検索する際には「まな bell」の新聞記事データベースを活用した。

上記データベースを活用する際は、大量にある記事の中から、条件に合うものを検索し、それを基にワークシートに取り組むというのは、時間がかかる。しかし、週 1 回というペースで実践を繰り返していく中で速度と精度がともに高まる様子が見られた。

また、様々なジャンルの記事に触れることで、子どもたちの視野が広がることと同時に、世の中には答えが 1 つではなく、その中から最善を選択していく大切さを学ぶことができたように感じている。



※実践で使用したワークシートとまな bell 新聞記事データベースの記事 (2022/06/18 (土) 北海道新聞朝刊全道(小学生新聞))。データベースのものは振り仮名付きの記事もあり、漢字が苦手な児童でも読み進めやすい。

② 国語科としての実践（5年生）

5年生国語科の教科書（光村図書）、「きいてきいてきいてみよう」では、インタビュー活動を行うために、「きくことについて考えよう」というテーマで単元の導入を行い、学習を進めた。

本校ではMNI教育として、紙媒体もメディアの大切な仲間であると指導を行っている。そこで、絵本の『だるまちゃんとお父さん』（福音館書店・加古里子作/絵）を基に北海道新聞と指導の資料を作成し、「きくこと」で大切なことは何かを考える時間を設けた。



※指導用資料（Microsoft PowerPoint）の一部。北海道新聞菊地様の御尽力により、この活動を行うことができた。だるまちゃんとお父さんの会話を基に、話手のみならず聞き手にも上手に相手からの情報を聞き出す必要性について感じさせる。

スライドを活用することで相手についてある程度情報を得てから質問を考えると、具体的な質問が答えやすいこと、想定と違う展開になった時の対応方法などを学ぶことができた。

このほかにも6年生社会科では「まな vi」の映像を活用して選挙における投票先を選ぶ重要性を学んだり、4年生のアイヌ文化についての学習でも、新聞記事データベースからアイヌ民族が差別にあった歴史について学習を行ったりするなど、本校では比較的「まな bell」を活用した学習活動を行っている。

4. 成果と課題

（1）成果

①の実践について

実践の内容でもあるように、子どもたちが適切な情報を選び、活用していく力が高まったと感じている。現在は様々な情報を手軽に得られることができるようになった一方で、それらの信ぴょう性に不安があるものも多い。また、情報量は膨大であり、内容が子どもたちの実態に合っていないものも見られる。今回は北海道新聞のデータベースを使用しているので、信ぴょう性に不安はないものの、たくさんの記事の中から自分にとって必要な情報を検索し、活用するために「どんなキーワードを入れたらいいかな」などと考えながら活動することで、他の教科で調べ学習などを行う際にも、慎重に情報を選ぼうとする姿がより見られるようになったと感じている。

また、定期的にこの活動を行うことによって、様々なジャンルの記事に触れることができた。子どもたちの視野が広がることにつながった。例えば5年社会科では製鉄所が置かれている場所を学習する。そこに、このワークシートの活動を通して戦争について考える際、「太平洋戦争の時に室蘭が攻撃されたのは、製鉄所があるからなんだね。」と、学びと自分たちの身近な物事とをつなげて考えられる子が増えた。さらに、様々な立場の人の考え方に触れることによって、「オーバーツーリズムは確かに良くないことなのだけれど、観光客が増えることの効果はこんなことがある。」と、多面的にものをみる力も高まり、「では自分だったらどうするか。」という、最善を考える大切さにつなげることもできた。

これらの力は新聞に親しんでこそ得られるものであり、この活動の大きな成果だと感じている。

今後もワークシートのみならず、新聞に親しむ時間を確保することによって、幅広く物事に触れ、自分の考えをもつ子が増えるような実践を行っていきたい。

②の実践について

教科書でも、話し合い活動の基本について動画を視聴し、確認することができる。加えて今回は絵本を活用した導入を行うことで、児童は活動を行う際に、質問者の立場になった時には、具体的に、かつ関連付けて質問をする必要があり、回答者の立場になった時に

は問われたことに対して、丁寧に回答する必要があるということを、楽しみながら感じる事ができた。

また、新聞社の方から資料をいただくことで、たくさんの分野の方とかかわる仕事をされている人から、実際に社会で必要とされている「話すこと・聞くこと」の力について学ぶことができた。特に、話し合いの単位では話し手に注目が集まりがちだが、「聞き上手は話し上手」という言葉もあるように、聞き手に注目することでそれらの力を伸ばしていけるような流れで構成されていた資料は、我々の指導にも大変役に立った。

単元の後半で行ったインタビュー活動でも、単元冒頭で学んだ「具体的に・関連付けて」を意識しながら聞いている子が多く、5年生であってもクラスメイトの知らない一面を引き出すことができている、学校外の方とコラボレーションして指導することが大変効果的であったと考える。

② Information 日常的な活動を軸とした学び → 年間76 時間
6 年制を軸として「知る」「使う」「自分や人のために役立てる」の力を向上・強化・拡大させる
③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
知る (伝える技術の習得)	メディアの存在を知る	正確に伝えるためにメディアを使って調べようを知る	正確に伝えるためにメディアを使って調べようを知る	正確に伝えるためにメディアを使って調べようを知る	インターネットのメリット、デメリットを知る	得意
使う (情報素養の向上)	メディアの基本的な機能を知る	正確に伝えるためにメディアを使って調べようを知る	正確に伝えるためにメディアを使って調べようを知る	正確に伝えるためにメディアを使って調べようを知る	正確に伝えるためにメディアを使って調べようを知る	得意
自分や人のために役立てる (対象者の立場)	身近なメディアを使い、自分の考え(意見)を伝える	メディアでの発信を軸として人に興味を持ち、発言する	自分や人のために役立てるためにメディアを使って調べようを知る	メディアを使って調べようを知る	メディアを使って調べようを知る	得意

※各学年が系統立ててメディアを活用していくための資料（一部）

（２）課題

①の実践について

情報を選ぶ力が付く一方、時間的な制約もあったように感じられる。国語の時間を活用して行ったが、当初は記事の検索、文の読み取り、わかったことを書く、という一連の流れに時間がかかった。国語科として本来進めていくべき学習内容と並立しながらこの活動を行うには、指導計画をしっかりと立てたり、帯活動として取り組む時間を別に設けたりする必要があると考える。

ただし、前述の通り児童の力はしっかりと伸びることが感じられるので、週に1回ではなくても、新聞記事に親しみ、様々な物事をつなげる時間は確保すべきと考える。

②の実践について

本校のMNIでは様々なメディアに触れることを目的として、今回は絵本を活用する活動を行い、成果を挙げることができた。しかし、児童にとって情報を得るツールの中心は依然としてインターネットである。1人1台の情報端末を手にしているからこそではあるが、本や新聞、図鑑などのメディアのよさを十分に認識し、場合によってそれらを使い分けることができるように、引き続き様々な教科で様々なメディアを取り上げ、活用し、それらの良さに触れさせていきたい。

5. おわりに

本校は、ICTの先を行くより深く広い、温もりのある学びを目指しMNI教育を推進してきた。この中で子どもたちは、多様な考え方を学んだり、情報を選んで使ったりする力も身に付けてきた。

本校職員からもMNI教育を通じて子どもたちが「教科書のみの情報ではなく、時事問題など、生きた情報が子どもたちの目に触れることによって、興味関心の幅が広がったようだ（5年担任）。」や、「北海道新聞とのコラボレーションによって、新聞はもちろん、様々なメディアに触れることで、幅広い情報に触れる機会が増えるだけではなく、それらを生かしてディベートする力も高まった（6年担任）。」と話し、成果を学校全体で感じることができている。

MNI教育の理念を生かし、6年間を通じてこの力を身に付けることで本校の教育理念である「世界に挑戦する12歳」に少しでも近づくと考えている。

本稿ではその一端を紹介した。今後も全スタッフでMNI教育の更なる研究を進め、その成果を発信していきたいと考えている。

第五学年 学習指導案（本時案）

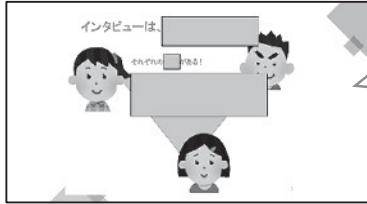
単元名 きいてきいてきいてみよう（1／6 時間目）

学級 5 年 2 組
授業者 福原 拓紀
実施時期 5 月上旬

本時の目標

話しを「きく」時に大切なことについて、絵本や話し合いを通じて考えることができる。

【思考判断表現】

主な学習内容	指導上の留意点
○スライドを提示しインタビューをする時に関係する「きく」ということに注目することを伝える  インタビューは、 それ以外の、 きく、 きかせる、 「きくこと」について考えよう ○プロ野球選手がヒーローインタビューを受けている様子を動画視聴する ただ好きなことを聞いたり話したりしているのかな？ 選手は聞かれたことに しっかり答えている 前の質問とつなげて次 の質問をしているよ 選手の ことを 調べ ている？ ○「だるまちゃんとてんぐちゃん」を読み聞かせ、内容を把握する。 ○登場人物のやり取りがうまくいかなかった原因についてグループで話し合い、学級全体で意見を交流する。 だるまちゃんとてんぐちゃんの思い違いをなくすには… 細かな情報を聞かないから、選ぶことができなかったんだね。  「だるま、聞いてほしいけど、あなたが お話を聞かないから、選ぶことが できなかったんだね。」 だるま、聞いてほしいけど、あなたが お話を聞かないから、選ぶことが できなかったんだね。」  どうすればいい？ 細かく情報は聞いたけど、肝心の「はな」がなんの「はな」なのかを確認しなかったから間違えてしまったんだね。 ○話題をインタビューに戻し、自分たちの活動の目標をもつ  知りたいことを「きく」 相手が聞きたいことに「答える」 どうしたら、うまくできるかな？ 自分の聞きたいことをただ聞くだけでなく、相手の気持ちを考えたり、前の話題とつなげながら聞けば、インタビューがうまくいくかもしれない！ ○ふりかえりをする。	序盤のスライド。聞くことにも種類がありそうだと予感させる。インタビューに必要な話し手、聞き手、記録者の立場については、単元の中で随時紹介していく。 ○ここでは明確に正解や不正解を示さず、児童が考えたことや発見したことを自由に話して交流し、予想に留める。 ○机間指導を行い、思い違いが起きないように細かく情報を聞いたり、問い直したりすることが大切だという話をしているグループを称賛し、学級全体に広めていく。 【評価】 ふりかえりの内容から、児童が「きく」時の大切さについて記述できているかを見取る。（ノート・ロイロノート）

新聞を野付の身近に

別海町立野付小学校 図書事務 宮向 伸子

1. はじめに

本校は、人口よりも牛の数が多い別海町の海側に位置しており、漁業と酪農が盛んな地域である。児童数は70名と小規模校で、地域には幼稚園、中学校がある。自然豊かな地域にあり、1人1人の個性が尊重され、伸び伸びと活動する児童が多い。読書やNIEを推進する学びの土台づくりと、地域の教育資源を生かして学びを深めるふるさとキャリア教育「野付学」を軸にして、幼小中一貫「野付型教育」の充実をCS(学校運営協議会委員)と共に進めている。

2. 児童の様子

本校児童は、友達に自分の考えを伝えたり、友達の考えを参考にしたりする学び合いの力が伸びてきている。その反面、長文の記述式問題の正答率が低い傾向にあり、問題を捉え解決する思考を言語化する力に課題が見える。

新聞に触れる際、児童が主体的に読みたい記事を選び、その知識を活用できるような力を育ませていきたい。例えば総合的な学習の時間での、資料活用やまとめの場面で新聞記事の内容を活用して学習してきた。他の教科でも新聞記事に何度も触れていくことによって、どんなことがどんな言葉で書かれているか読む経験を積むことができた。この経験が、自分で文章を書くときに磨かれた言葉の選び方ができたり、文章のつながりがスムーズにできたりすることにつながり、思考力・

判断力が高まることを期待する。

3. 実践の内容

(1) 別海町新聞の日

別海町では、毎月最終週の月曜日に全学校の全児童に『北海道新聞』と『まなぶん』が配布される。配布されるその日を『別海町新聞の日』と呼び、各学校ワークシートを活用する等して新聞を活用した取り組みを行っている。本校の目標設定として、低学年では新聞に慣れるために興味をもつことに重点を置いている。興味をもった記事を切って貼ることで、新聞に親しみをもつことが出来ている。中学年では様々な記事をじっくりと読み、感想を書くことに重点を置いている。自分の感じたこと、思ったことを表現する力の育成につながっている。高学年では、関心をもった記事を読み深めることに重点を置き、要約から感想までをセットで行う。記事の中の大切な言葉や文を読みとり、考えを表現しまとめる力を育んでいる。家庭での新聞離れが進んでいる時代だが、手に取れるところに新聞があることで児童は新聞を身近に感じることが出来ている。



（２）朝新聞

本校では、水曜日以外の朝１０分間に朝読書や読み聞かせを取り入れている。２年前から、『まなぶん』が届く週の月曜日の朝に、朝新聞を取り入れることにした。今までの『まなぶん』は配布するだけだったため、家に帰って読んでいる児童は少なかった。朝の１０分間に読む時間を確保したことで、児童全員が目を通し、感想や考えを共有できる時間もできた。『まなぶん』は小学生向けであるため、ルビが振ってあり読みやすく、新聞を読むことに苦手意識のある児童も楽しんで読むことが出来ている。



（３）たてわり班新聞ふせん交流

令和４年度から年に数回、５時間目と６時間目の間に２０分間のたて割り班活動『ぐんぐんタイム』を取り入れている。６～７人で１班になり、国語・算数の基礎定着をはかる取り組みである。



ここで「新聞ふせん交流」を行ってみた。班で一つの記事を選び、その記事について感じたこと、思ったことをふせんに書いて交流をする。低学年は上の学年と行うことで同学年とは違う視点があることに気がついた。高学年は別海町新聞の日で培ってきた力をアウトプットする良い機会となった。

（４）各教科での活用

① ２年生生活科『きせつをかんじよう』

新聞から季節を感じる写真を切り取り、時系列に並べる。身近なものでいうと、野付で有名な打瀬船の記事を見て、自分たちの知っている北海シマエビ漁の時期について話すことができた。他にも月の記事を見て、「この間見た！大きくて丸かった！」と表現することができた。児童からは「新聞を見ると季節がよく分かる。」「同じ北海道でも季節のスピードが違う。」との声があがった。季節の変化について自分たちの感じ方と照らし合わせて考えることができた。



② ４年生理科『ものの温度と体積』

本校には、理科専科が配置されているため、３～６年生の授業は理科専科が行う。まなぶん「ワクドキ実験室」から、４年生に『ものの温度と体積』の授業を行った。児童は、新聞に書かれていることを自分達もできたという喜び、自分たちの実践と記事がぴったり繋がったという実感をもつことができた。今度は家でもやってみたいと、新聞を読む意欲づくりにも発展した。



③ 6年生国語科『12歳の主張』

それぞれが自由な主張課題を設定し、課題に沿った情報を集めることにした。課題に沿った情報を集めるときに、本や新聞紙だと調べるには多大な時間がかかる。ネットを使うとなると正しい情報なのか判別が難しい場合がある。そこで『まなbell』を活用してみることになった。キーワードと時期を打ち込むだけで数々の新聞記事が出てきた。そこから児童たちは、記事をしぼるために『もう1つのキーワードを付け足してみよう』、『時期をせばめてみよう』など、どのように調べると自分の欲しい記事を見つけることができるのか、調べる技術が向上した。新聞の情報の正確性・信頼性を知り、思考力、判断力にもつながっていった。



4. 成果と課題

(1) 教職員

授業を行うとき、新聞は最新のニュースを伝えることに重点を置いているため、授業のテーマやカリキュラムに合わない場合や必要な情報へのアクセスがデジタルツールに比べて難しい場合がある。特に、国語や社会、英語以外の教科での活用が難しい。だが、昨年度課題であった各教科での活用が、今年度は生活科や理科など幅広い活用をすることができた。高学年に偏らず、全学年で活用することができたのも大きな成果である。さらには、新聞コンクールや新聞グランプリなどに応募する児童も増えてきている。実際に新聞グランプリは4年前の応募が3名に対して、今年度の応募は20名である。さらに新聞コンクールは、昨年度4、5年生のみの応募に対して、今年度は2～6年生が取り組むことが出来た。教職員の意識の向上が出来たのも、実践指定校として新聞が身近にあること、電子化が進む現代において配達してくれる新聞店があるからこそである。感謝を忘れずに今後も新聞活用について推進していきたい。



（２）各学年

① 1、2年生

好きな野球のチームの記事を探すなど、お気に入りの記事を選んで新聞を読むという意欲的な姿が表れた。課題としては、新聞に載っている漢字に送り仮名があったとしても、言語の意味の壁があり長文を読むことが難しい。

② 3年生

新聞を自ら進んで読むことができるようになり、そこから自分の言葉で感想も書いて伝えることが出来るようになった。課題としては、読み深める力は向上しているが、低学年同様に好きな記事で止まってしまっている。色んな記事に目を向けて、色んな世界を知る喜びを感じさせることである。

③ 4年生

新聞から自分とは違う考えや体験を知ることができている。そこから自分の考えを深めることができている。課題としては、難しい言葉に出会ったときに読むのをやめてしまう場合があるので、国語の授業でも辞書を引くことを意識付けている。

④ 5年生

別海町独自の新聞ワークシートがあるが、学年の実態に合わせてワークシートを選ぶことが出来る。5年生は長文理解を深めることができるようにするため、それに見合ったワークシートを選んだ。そうすると要点を整理して内容を読み取る力をつけることができた。課題としては、読む記事の偏りである。

⑤ 6年生

新聞に対する意識が向上したおかげで、新聞で見た熟語が授業や普段の生活にも表現されることが増えた。要旨の捉え方を身に付けてきている児童も出てきたのは大きい成果である。課題としては、新聞の良さを日常生活に活かすことである。中学生になってよ

り広い視野で物事を見たり知識を深めたりできるように指導を続けている。

多くの学年で幅広い記事に触れて欲しいという課題が見受けられる。活字離れが広がる現代で、漢字や言葉の難しさに対する壁を大いに感じた。新聞活用を続けることでクリアにつなげることが次の課題となった。嬉しいことにすべての学年に共通しているのは、自ら興味を持って新聞を手にし、理解を深めているということである。主体性が生まれたことが本校の大きな成果である。興味がなければ子どもたちは新聞を手にししない。環境を整えることでその壁を取り除けることが明らかになった。

５．おわりに

本校では、紹介した以外に中学生とのまわし読み新聞や、図書室前の新聞コーナーなど、新聞を身近に感じるよう環境を整えてきた。地域学習に取り組むことで、地域の新聞に学校や児童が掲載していただけることも多い。その記事を掲示して身近に感じる工夫もしてきた。野付という地域だからこそできることを最大限に生かしていきたい。



現代は偽・誤情報に注意して接する必要がある。情報を正しく読みとり、判別する力を小学生のうちから育てていくことが重要である。NIEの活動には、子どもの成長に不可欠なことが多く備わっている。だからこそ、今後も新聞活動の推進を続けていきたい。

新聞に親しみ、授業で活用できるように

札幌市立藤野小学校 教諭 立野 弘高

1 はじめに

本校は北海道札幌市南区に位置する、全校児童 242 名の中規模校である。「学び・心・仲間がつながる あたたかくて・たのしい学校」を重点目標に教育活動を進めている。また、今年度は「自ら問いをもち、友達とかかわり学び続ける子ども」を研究テーマとして、子ども主体の授業に向けた校内研究を全教職員で進めている。NIE 実践指定校としての取組は 2 年目となる。



2 本校児童の実態

本年度も含め近年、本校の学力面で課題の一つとなっていることに「子どもの読書への意欲」がある。学校図書館が整備され、保護者による本の読み聞かせなども行われているものの、なかなか読書習慣の醸成につながっていないという実態がある。これには読書のみに関わらず、活字に対する苦手意識をもっている子が多いということが原因として

考えられる。昨年度に引き続き、NIE 教育実践指定校として実践を進めるに当たり、新聞を子どもの身近なところに置き、いつでも読むことができる状態にすることで、新聞を通して活字に親しみ、読書習慣の醸成に繋げていけるようにした。

3 実践の内容

① 子どもの手に取れるところに新聞を

本校では火・木の朝学習の時間に、10 分間の読書の時間が設定されている。図書館で借りた本の他に自分で持参した本や、学級文庫の本を読む時間となっている。今年度も昨年度に引き続き、学級文庫に新聞コーナーを設置し、いつでも児童が手に取れるようにした。



また、より多くの子の目に新聞が触れるように、学校図書館の司書の協力で、時期に合わせた新聞記事の紹介や、図書館にある本を紹介している記事の掲示などをしていただいた。これにより、様々な学年の子が新聞に

目を通すようになり、新聞から興味をもった本を探し読書につなげたり、また読書から関連した記事を読んだりという子どもたちの様子が見られた。



朝日小学生新聞 2024年11月1日

② 授業で新聞を活用する

3年生の国語「修飾語を使って書こう」(光村図書)の学習の中で、一通り修飾語の意味や使い方について学習した後に新聞を活用できないかと考えた。

～子どもの活動の流れ～

- ①新聞記事を読み、写真を選ぶ。
- ②「誰が(主語)何をしている(述語)」ところなのかを考える。
- ③タブレット端末で写真を撮影し、主語・述語のみの文をつけて共有する。
- ④友達の写真と文を見て、修飾語で詳しくした文を考え、コメントする。
- ⑤自分の写真についてのコメントを参考にしながら、自分なりに修飾語を使って文を詳しく書いて提出する。

授業の導入場面で新聞記事の写真のみを提示し、「誰が(主語)何をしている(述語)かな?」と問いかけた。すると子どもたちからは、「野球選手が喜んでいる。」「大谷選手が喜んでいる。」「ドジャースが勝った。」などいろいろ出てきた。そこで、ここでは「野球選手が喜んでいる。」を例に、修飾語を使って詳しくするという活動を行った。子どもたちからは「青い服の」、「全員で」、「試合に勝って」、「野球で」といった言葉を付け加えて詳しくする様子が見られた。そこで、この写真が、新聞に載せられたものであり、「大谷選手のドジャースが4勝1敗でヤンキースに勝ち、



世界一になった。」と記事の内容を紹介した。ここで、子どもたちからは、「他にも写真があるのか見てみたい。」「もっと他の言葉を使って詳しくしてみたい。」という声が上がったことから、子どもたちにも新聞を配り、その中から写真を見つけてどのような修飾語で詳しくできるかという活動を行った。



今回は、新聞記事を切り取る手間や友達との共有のしやすさを考え、新聞記事をタブレット端末で撮影し、友達と共有するという形で行った。

導入の写真による活動が盛り上がったこともあり、新聞を配ると興味深い写真はないか、どんな記事があるのかなど、すぐに新聞に目を通す子どもたちの姿が見られた。今回は、子どもたちにとって扱いやすい子ども新聞を中心に配り、写真を見ながら何をしているところなのかと記事にも目を通す子どもの姿が見られた。



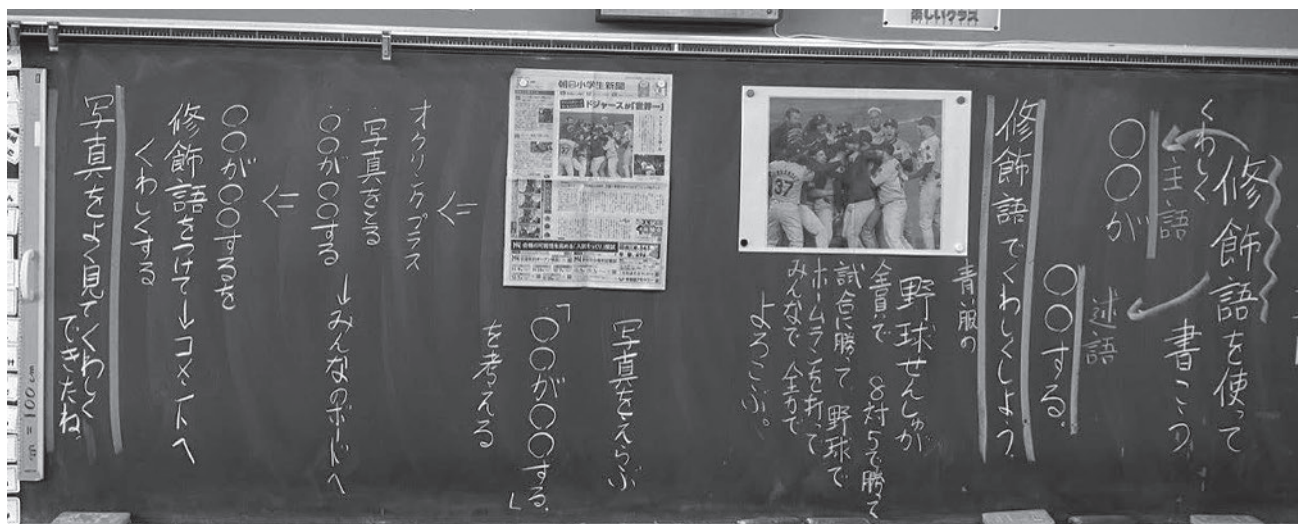
新聞から写真を選んだ後、タブレット端末で写真を撮影し、「〇〇が〇〇する。」といった、主語と述語のみの柱の文章を書いたものをタブレット端末を活用して共有した。

共有された新聞写真と文をもとに、修飾語を使って詳しくした文章をコメント欄に記入していった。子どもたちは写真に写ったものの数や色、様子などに着目して、主語、述語それぞれに係る修飾語を考えていた。同じ写真であっても、見る人によって様々な文が生まれていた。



最後に、友達の書いた文章を参考にしながら、自分なりに修飾語を使って詳しくした文章を書いて提出した。この時、どんな文章にしようかともう一度、写真や新聞記事に目を通し、内容を確認しようとする姿も見られた。





4. 成果と課題

(1) 成果

① 新聞を身近なものに

今年度は、学級だけではなく学校図書館にも新聞を設置することで多くの子どもの目に触れ、新聞がより身近なものになった。また、学校司書の協力もあり、記事の内容を紹介した掲示や、新聞で取り扱われている本の紹介を通して、より新聞に興味をもって目を通すことができていた。また、児童にとって読みやすい子ども新聞を設置したことも効果的であった。低・中学年において子ども新聞は文章量が適切で、図や写真で分かりやすく書かれているため、手に取りやすかった。

② 授業での新聞の活用

今回の国語の実践では、新聞の写真を活用した。タブレット端末を活用すれば、自分が欲しい写真を瞬時に入手することができるが、実際に新聞から写真を探すというアナログな活動は、自分にとって必要ではない様々な写真に触れる機会でもあり、情報を取捨選択する力が付き、たいへん効果的であった。また、写真をきっかけにして記事を読んだり、他にも記事がないかと探したり、あまり普段は読書をしない児童でも意欲的に取り組む

姿が見られ、本ではなく新聞を活用することのよさがここにもあると感じた。

(2) 課題

① 新聞をより広げられるように

新聞を手に取りやすい環境は整備されたが新聞を読むことは、なかなか広がっていない現状が見られる。子どもによる記事の紹介などの活動を取り入れると、より多くの子が新聞に目を通し、新聞が子どもにとって身近なものになると考える。

② 教師が新聞を授業で活用するために

そもそも、我々教師が新聞にじっくりと目を通す時間が限られているため、授業になかなか活用されない、活用されても限定的であるといった実態がある。教師にとっても活用しやすくなるように、日常から新聞に目を通し、実践を広める工夫を考えていきたい。

5 おわりに

新聞は子どもだけでなく、教師にとっても馴染みが薄くなっている。今回、新聞と読書の繋がりも感じられた。様々な教科で新聞を活用することが、子どもの豊かな読書にも繋がると考え、今後も実践を考えていきたい。

地域とつながり、豊かな心を育てる NIE タイム

札幌市立緑丘小学校 教諭 高橋 周

1. はじめに

本校は、32 学級 児童数約 850 名、札幌市中央区に位置する大規模校である。学校教育目標「強い子 やさしい子 考える子 きまりよい子」の実現に向け、学校研究の主題を「学びに自分の意志をもつ子」、その重点を今年度から「つなぐ学び」と設定した。子どもが既習や生活経験を生かしながら、他者と関わることを通して学びを深め、よりよく生きる意志を高める姿を目指して研究を進めている。

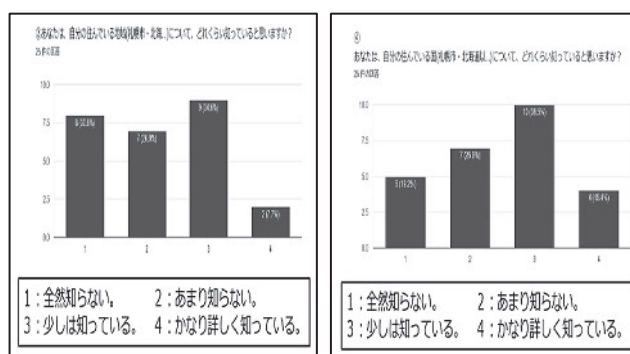
今回の実践は、私が現在担任する 4 年生の、2 学期から開始したものである。1 学期では、社会科で札幌市や北海道について概略的に学んできた。2 学期からは、総合的な学習の時間で地域社会の福祉について学んでいる。福祉においては、「相手の気持ちを自分事として想像する態度」が肝要である。自分たちの周りにはどのような人々がいて、どんなことを考えているのか、微視的に知ることを通して、温かく他者を思いやる、豊かな心を育んでいくことをねらいとした。

2. 実践の内容

2-1 児童の実態

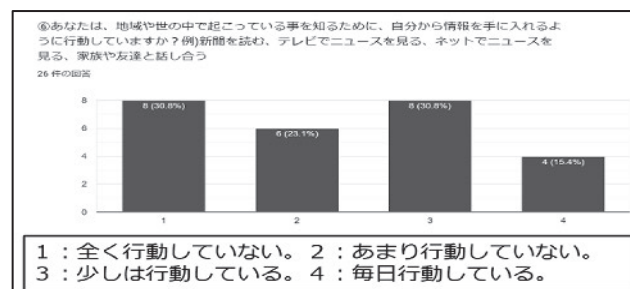
次の資料 1 は、NIE タイム（内容は次項に詳述）実施前の、児童を対象としたアンケート結果の一部である。それぞれ、左は、「自分の住んでいる地域（札幌市・北海道）のことや、そこで日々起きていることについて、どれくらい知っていると思うか。」、右は、「自分の住んでいる国（札幌市・北海道以外）の

ことや、そこで日々起きていることについて、どれくらい知っていると思うか。」についての回答となっている。札幌市・北海道について知っている人（3：少しは知っている、4：かなり詳しく知っている）の割合は 42.3%であり、札幌市や北海道以外についての同様の回答割合 53.9%よりも低くなっていることから、自分により身近な地域への関心が薄いことが分かる。



資料 1 地域や国への関心の程度について (2024.8.30)

また、資料 2 は、「地域や世の中で起こっていることを知るために、自分から情報を手に入れるように行動しているか。」という設問の回答結果である。情報収集の媒体の区別なく、自分から情報を求めて行動している人としていない人とが二極化していることが分かる。



資料 2 主体的な情報収集について (2024.8.30)

2-2 「NIE タイム」について

先の結果を受け、2 学期から「NIE タイム」の取組を始めた。これは、週に一回 5 分間、教師が選んだ新聞記事に対して児童が感想を書くという、非常にシンプルなものである。取組の目標は、以下のように設定した。

- ① 主に自分たちの住む地域や北海道に関する記事を取り上げることにより、地域社会への理解を深め、興味・関心を高められるようにする。
- ② 主に人物についての記事を取り扱うことにより、物事に対する多様な見方を獲得できるようにする。
- ③ 考える視点を伝えることにより、単なる感想や情報収集に留まらず、得た知識を自分がどのように生かしていきたいかを考えられるようにする。

①の達成のため、札幌市や北海道に関する内容が多く掲載されている、北海道新聞の記事を中心に扱うことにした。②の達成のため、児童の実態も鑑み、小学生や中学生、高校生など自分たちとより年齢が近い子どもが書いた投書や取組を紹介する記事を主に選定した。③の達成のため、以下の資料 3 のような視点を設けて児童の感想の記述を分析すると共に、より高い段階への到達に向けて、感想の紹介を通した視点の伝達、教師の価値付け及び個別の声掛けを行った。

段階	内容
10	印象に残った部分を要約し、多面的・多角的な視点から感想を書く。※「Universe」視点の感想
9	印象に残った部分を要約し、多面的・多角的な視点から感想を書く。※「Society」視点の感想
8	印象に残った部分を要約し、多面的・多角的な視点から感想を書く。※「We」視点の感想
7	印象に残った部分を要約し、多面的・多角的な視点から感想を書く。※「I」視点の感想
6	印象に残った部分を要約し、自分の経験や考えを踏まえて感想を書く。※「I」の感想
5	印象に残った部分を要約し、自分なりの分析を加えて感想を書く。
4	印象に残った部分を要約し、感想を一言(「すごい」、「なるほど、」等)で書く。
3	印象に残った部分をそのまま書き写し、感想を一言(「すごい」、「なるほど、」等)で書く。
2	印象に残った部分をそのまま書き写す。/ 感想を一言(「すごい」、「なるほど、」等)のみ。
1	印象に残った所に線を引く。

ワークシートの内容分析の視点 (6～10は、ウェルビーイング・コンピテンシーの段階)

資料 3 ワークシートの内容分析の視点

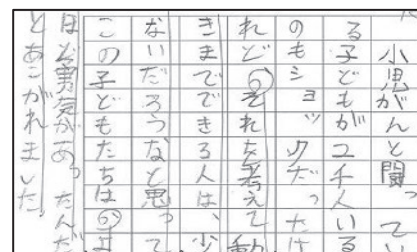
※日本電信電話株式会社(NTT)、金沢工業大学(KIT)「ウェルビーイング・コンピテンシーホワイトペーパー NTT-KIT2024 年版」を基に筆者が作成。

2-3 児童のワークシート分析

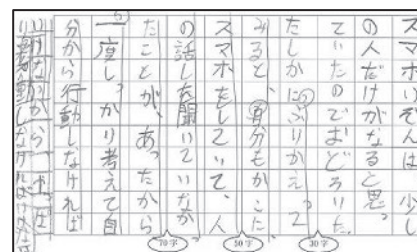
2 学期終了時点までに、計 15 回の NIE タイムを実施した。以下、児童がワークシートに書いた感想を 2 名分抽出し、前述の視点に基づいて分析を試みる。

【児童 A の場合】

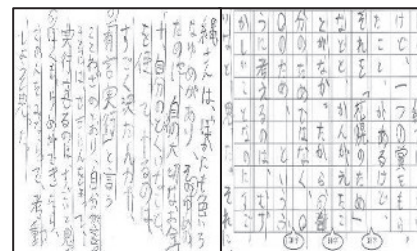
この児童は、取組 2 回目において、記事で紹介されている人物の行動に対し、「あこがれました。」と述べるに留まっており、第三者的な立場で内容を捉えている(段階 5) ことが分かる。



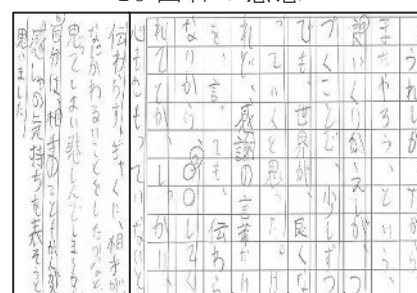
<2 回目の感想>



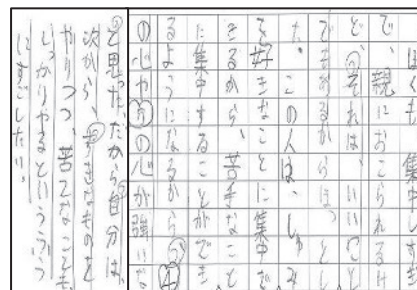
<7 回目の感想>



<10 回目の感想>



<12 回目の感想>



<14 回目の感想>

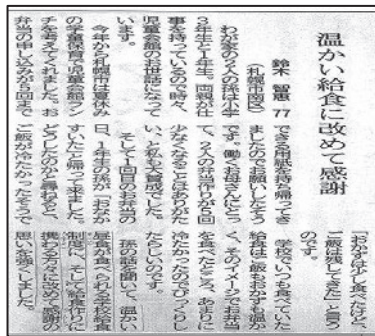
資料 4 児童 A の感想の変遷

7 回目では、「ふりかえってみると、自分も」という記述が見られるようになり、自分事として内容を捉えている(段階 6)。10 回目では、記事を受けて自分が考えたことを、「それに、」以下で広げており、多様な見方で内容を捉えている(段階 7) ことが分かる。12 回目では、「少しずつでも世界が、良くなって

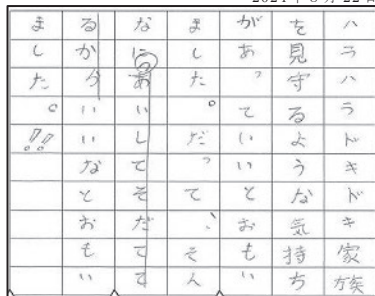
いく」と述べ、望ましい行動ができたとき、どのような影響が周囲に広がるかについてまで言及している(段階9)。14回目では、「(記事中の人物は)4の心や5の心が強い」と、複数の道徳科の内容項目とのつながりを発見しながら分析している(段階7)。

【児童Bの場合】

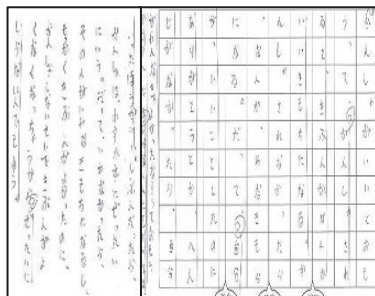
児童Bは、1回目、感想を書くことができず、記事中の印象に残った部分に線を引いていた(段階1)。3回目では、記事の内容を書き写し、一言で「いいな。」と感想を書いている(段階3)。取組を続けて12回目では、記述量が大幅に増え、「自分だったら、」以下において、自分がこれからどうしていきたいのか、決意を述べている(段階6)。



<1回目の感想> 北海道新聞 2024年8月22日



<3回目の感想>



<12回目の感想>

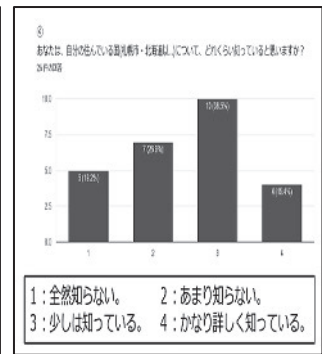
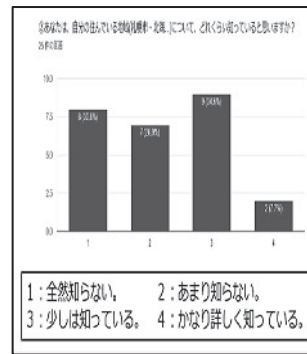
資料5 児童Bの感想の変遷

3. 成果と課題

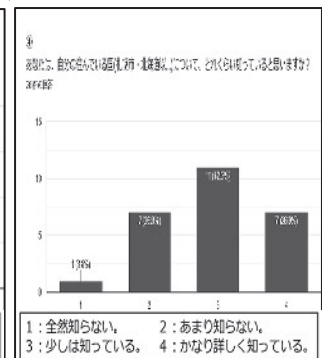
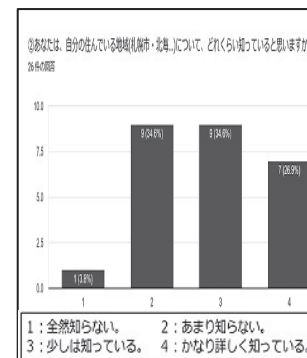
3-1 成果

2学期終了時に再度、児童に対してアンケートを実施した。その結果が資料6及び7である。どちらの設問も、8月に実施したアンケートと同じである。資料6を見ると、「1：全然知らない」と答えた人数は大幅に減少し

「4：かなり詳しく知っている」が増加した。

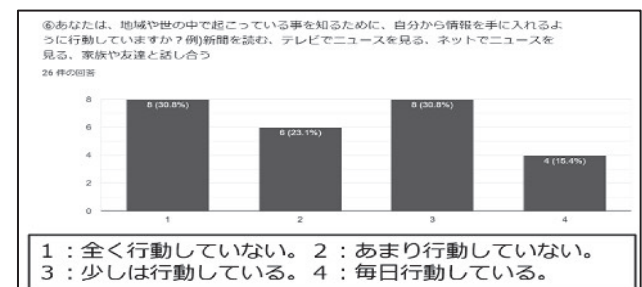


(8月)※再掲

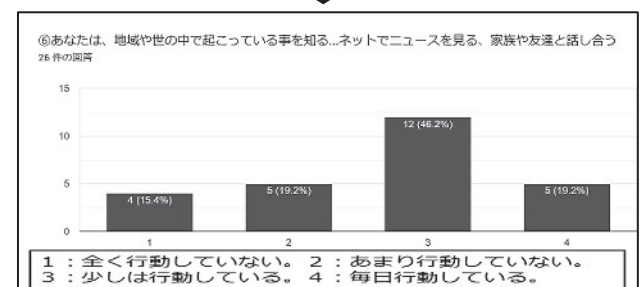


(12月)

資料6 地域や国への関心の程度について (2024.12.24)及び8月との比較



(8月)※再掲



(12月)

資料7 主体的な情報収集について (2024.12.24)及び8月との比較

また、資料7からは、情報収集のために主

体的に行動している人数としていない人数との偏りが一定程度解消しており、行動している人(3:少しは行動している、4:毎日行動している)の人数が増加したことが分かる。

加えて、「どんな時に、自分の住んでいる地域(札幌市・北海道)とのつながりを感じるか。」という設問に対する記述の比較(資料8)においても、内容が具体化したり、これまで“あれども見えず”“だった事象についての気づきが促されたりしていることが見て取れる。

なし	地域の人たちに毎朝横断歩道で信号の見守りをしてもらっている
わからない	はい
テレビ塔を見たとき	かんじる
自然に触れてるとき	博物館にいるとき
ゴミ収集車を見たとき	無し
ない。	緑丘小学校に来たとき
北海道産のものを食べたとき	動物園の時
北海道産の食べ物を食べたとき。	ない
ない	北海道・三陸沖後地震注意情報が流れたとき

(8月)※一部抜粋

よくおたよりをくぼっているときに地域のマスコットキャラクターがでてくるおたよりを見つけたとき。
・いいことをしたとき(ゴミ拾い)・歴史や文化を知ったとき
僕が、北海道とのつながりを感じられているときは、主にニュースを見てきたことで、ニュースは、北海道のニュースを見るときに、また、北海道のことについてしれたなどと思える。2つ目は、学校のチラシです。ただのチラシではなく、北海道のことや、札幌市のことについて書いているチラシです。そのチラシが届いているということは、北海道や、札幌市が訴えかけているということなのではないかと感じられています。3つ目は、自然や、雪などを見ることです。なぜかという、北海道の雪の量を見ることによって「ここは、北海道何だ〜」と思うからです。
レモネードの新聞を読んでみて行ってみた
札幌にどんな店やどんな物があるかはわかるけど旅行にいったときは、何がどんなところにあるかとかどんな店があるかわからない時に『札幌に住んでいるからわかるんだ。』とおもった時につながりを感じました。
NIEタイムで感想を書いている時
北海道のニュースとかで人気なことをアナウンサーのひとがいてそれが北海道とのつながりを感じました。新聞とかでも
高齢者の方への思いやりや助け合いをしているとき

(12月)※一部抜粋

資料8 地域とのつながりを感じる場面についての回答比較

さらに、「NIEタイムに取り組むことによって、よかったこと・これまでの自分と変わったこと・できるようになったことは何か。」という設問に対しては、以下の資料9のような回答が得られた。特筆すべきは、「今までより、もっと人に寄り添えるようになった。」、「人

の気持ちを想像したりするのが得意になった。」、「一番は思いやりの心が成長できた。」等、新聞を活用した学習が、単なる情報収集や作文力の向上に留まらず、物事に対する多様な見方の獲得を促し、豊かな心を育むことに寄与していたと児童が実感できたことである。

自分が興味をもってなかったこと、知らなかったことを知れた。
情報が知れたこと。
今までより、もっとひとによりそえるようになりました。
NIEタイムをとることで人の気持ちを想像したりするのが得意になりました。感想を書くときも思いつきやすくなりました。
新聞を読むようになった
感想がすぐ出るようになった
しゅうちゅうカ
北海道に来て降雪、除雪のしごとを初めてする事ができた。NIEタイムをやるようになって他の国との様々な関わりを知ってよかった。
もっと自分から家族に、言えるようになった
色々な気持ち 自分から行動
テレビでニュースを毎日読んだことで地域で〇〇が起ることがわかったしこういう事があるから準備しなきゃとニュースをみることでこないことありました。
レモネードを買って人のために行動していい事をしたこと
NIEができたこと
テレビは全然みないから、あまりわからないからウチ家族とか友達にきいたら、色々変わった。
読んだ感想(読書感想文)を書きやすくなった。
NIEタイムをすることで、新聞からでもいろいろな情報が知れることに気づきました。
他の人がどのようなことをしているのか。
スターの勉強でやっている福祉にもNIEタイムがつながって北海道のみよくがわかってNIEタイムとつながって福祉の勉強とつながってくるからNIEタイムは勉強につながると思ったのいいと思いました。
はじめは世界のことを全く知らなかったけどNIEタイムをするようになったら他の都道府県や外国で様々な人が社会に取り組んでいることがわかった。北海道に来て降雪、排雪のことを知ってよかった。
ニュースを少しでも見るようになったことです。
感想文をたくさん書けるようになったり、文章を読んでたくさん面白いことや、不思議に思ったことを考えるようになった。
ニュースを見るようになった
一番は思いやりの心が成長できたなぜかという道徳の心も思いやりがなかったらできないから。
その時その時で頭に「今はこの記事と似ている！だからこうしよう！」という考え方がみについた

資料9 NIEタイムの効果について
※一部抜粋

3-2 課題

これまでの4か月間の実践は、児童が一人で記事に向き合うものだった。感想が中々思いつかない子がいたことも事実である。3学期からは、グループで記事について思うところを交流した後、一人一人が感想を書く時間を設けるなど、他者とのつながりを一層生み出す中でねらいに迫っていきたい。

新聞を活用した「分かる・できる・楽しい」学習の展開

～本校児童の課題を踏まえた実践から～

札幌市立明園小学校 教諭 檜 克博

1. はじめに

本校は、札幌市東区に位置する中規模の学校である。今年度は『「たくましさ」「思いやり」があふれる明園小学校』を重点目標に置き、授業を核にして育てつつ、つながりを生かした協働的な教育を推進している。教育活動を推し進める手段として、新聞活用の有効性を探った。

本校はNIE実践の継続校3年目である。昨年度までの課題から新聞活用の意図を明確にしつつ、次の2点を窓口に子どもたちの姿を観察した。1つ目は新聞作りなど、新聞そのものを学ぶ主体として扱う効果。2つ目は記事の読み取りなど、新聞を活用することで生じる学びの効果についてである。

以上の2点から子どもたちの姿を追うことで、活用の可能性とその効果について検証を行った。

2. 児童（生徒）の様子

本校の児童は、勉強に対して前向きに取り組む児童が多く、人の意見を聞いて、それを参考にして自分の考えを見直す姿勢がみられる。一方で、授業で学んだことを、他の学習で生かしたり、立場や考えの違いを意識して話し合い、自分とは違う意見を生かして自分の考えをまとめたりする児童が少ないという点が課題になっている。（明園小学校ホームページ 令和6年度「学ぶ力」育成プログラム参照）

そこで、新聞を活用することで本校児童の

課題も解決する一助にしていきたい。実践者は、学級担任ではなく専科指導（国語、家庭科）のため、自らの実践の他に他学級の担任の実践も含めて報告する。

本校児童は新聞を読む機会がある子ほどの学級も2割前後であり、新聞に初めて触れる子が多い。国語の学習で新聞の特徴や読み方を学ぶ学年もあるが、実際には新聞を継続的に読んだことがない子が多く、親しむ機会を兼ねて授業を行った。

新聞を授業に活用することで、本校児童の課題となっている「学びに対して他の学習へ広げて学ぶ姿」や「互いの立場や意見の違いを生かし、自分の考えをまとめる姿」の向上を期待している。

3. 実践の内容

昨年は、子どもたちによる受信と発信の双方向のやり取りがある記事活用を重視した実践から、記事扱う際に配慮すべきこととして、以下を確認することができた。

- ・子どもの考えの「見える化」と「共有化」
- ・新聞活用の意図の明確化

今年度も上記の成果を大切にしつつ、本校児童の課題である部分（学んだことを他の学習で生かす・立場や考えの違いを意識して話し合う・自分とは違う意見を生かして自分の考えをまとめる）の改善に向けて、新聞活用の取組を行った。

実践内容は以下の3点である。

実践1 立場や考えの違いを意識して話し合う実践

4年国語「新聞を作ろう」の実践では、4年生のことやクラスのことを3年生に伝え、さ

らに関わり合いを深めることを目的に、グループで新聞作りを行った。事前に、新聞の工夫や取材方法などを確認し、記事を分担しながら取材メモを作成した。

<1. 単元の目標>

- ・比較や文類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方を理解し使うことができる。(知・技)
- ・書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落を作ったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成をすることができる。(思・判・表)
- ・新聞を書くという目的に向かって、友達と協力し、記事の内容や割り付けを考えながら粘り強く新聞を作ろうという態度を養う。(態度)

<2. 本時の目標>

- ・相手を意識し、目的に応じて割り付けを考えることができる。(思・判・表)

<3. 本時の展開(6/10)>

子どもの意識の流れと主な学習活動	教師の関わり
割り付けを決める。(学習計画を確認する。) いろいろな内容の記事ができたね。 表やグラフ、イラストも入れたいね。 どの記事をどこに書いたらいいのかな。 伝えたい 強 明園ソーラン 読者のおもしろさやようみ ① 図を使って、大きくのせる順番を決めよう。 一緒にやったソーランの頑張りは大きく伝えたいな。 2組のいろいろなランキングも面白いかも…。 ② 図を元にして、割り付けを考えよう。 ③ ここまで進めてきた内容を他のグループに紹介し、アドバイスしてもらおう。 知らせたい記事は大きく、目立つようにしよう。 グラフはこの場所がいいね。 写真もあるといいね。 この記事は縦長にすると目立つね。 知らせたいことや記事の読みやすさを考えて、見出しや本文、写真や図などの割り付けを考えることが大切だね。	・取材メモを元に、グループで割り付けを決めるという学習内容を確認する。 視点1：友達の考えを聞きたい、自分の考えを伝えたいと思えるような手立て ・「記事の大きさ」をどうするかに焦点化して問うことで、自分の考えやその理由について、どの子もグループ内での話し合いに参加できるようにする。また、大きく載せる記事はどんな内容が良いのかを全体で確認し、次の活動につなげるようにする。 ・図を使って自分の記事の付箋を貼ることで、なぜその位置に付箋を貼ったのか、その位置が適当なのか、話し合う必要感が生まれるようにする。 視点2：子どもたち同士の考えをつなげる教師の関わり ・交流場面で助言する視点を具体的に示すことで、大きくする記事の妥当性を確認したり、グループの困り感を解決したりする話し合いができるようにする。
<4. 本時の評価> 図を用いながら話し合い、相手を意識し、目的に応じて割り付けを考えようとしている。	・割り付けを決めるときのポイントを確認し、今後の新聞作りに意欲的に取り組めるようにする。

記事ごとに色分けした仮の割り付けを交流し、割り付け方の違いに着目させ、「記事の大きさ」をどうするのかに焦点化して問うことを行った。子どもたちが、読み手である3年生を意識しながら、自分の考えやその理由について話し合いに意欲的に参加しようとする姿が見られた。



また、縦軸に「伝えたいこと」横軸に「読み手が読みたくなること」を表した矢印の図を使い、自分の記事の付箋を貼ることで、その位置に付箋を貼った理由や位置の妥当性についての話し合いをどの子も進めることができた。立場を明確にしたことで、根拠を通して考えの違いを意識して話し合うことができた。

実践2 自分とは違う意見を生かして自分の考えをまとめる実践

5年家庭科「できるよ家庭の仕事」の実践では、自分にできる家庭の仕事について学んだ。家事というと、子どもたちにとってお手伝いの感覚かもしれないが、大人は様々な捉え方や意識の差がありそうだと考えた。そんな折、家事に関わる記事があったため、授業の中で取り上げた。

この記事は、漫画家をしている女性が簡単な自己紹介をした際に、「主婦のかたわら、漫画の仕事をしているのですね。」という同年代の男性から言われたことに違和感を感じたという内容である。働くママと働いていな

いママという言葉が記事にあり、「家事は仕事ではないのか」という話題になった。



北海道新聞
2024年10月19日
しあわせ最前線
「どのお母さんも働いている」

子どもたちの意見は以下の3つに分かれた。

<仕事という意見>

- ・家事は仕事だと思う。なぜなら、家族の一員で家事は必要なことだから。
- ・外で働いていないけど、みんな家族のために色々やってくれているから仕事だ。
- ・やらないと生きていけないから仕事。
- ・母が「家のこと」と言っているので仕事じゃないかなと思いました。

<仕事ではないという意見>

- ・仕事じゃないと思う。普通仕事は給料があるけど、家事にはないから。
- ・仕事じゃないと思う。そうしたら全部が仕事になるから。
- ・家の仕事は残業がない、いつでも休憩できる、文句も言われなし、仕事でないと思う。

<その他>

- ・ボランティアのようなことだと思う。
- ・外の仕事と家の仕事は全くの別物で家の仕事は別の言い方をした方がいいと思う。

多様な理由の交流により、同じでも根拠に多様性があり、迷いが生じたり自分の意見を見直したり姿があった。今は、はっきりと意見が定まらないことも学びだと伝え、家族みんなが協力していくものだというのをみんなの一致点として理解することができた。

実践3 学んだことを他の学習で生かす実践

5年書写「めざせ！新聞記者」の学習では、学んだ書き表し方が実生活でどのように表されているのかを学んだ。

新聞記事を見て、行頭や行末の高さがそろっていることやひらがなは漢字より少し小さめに記載されていることに子どもたちは気が付いた。

新聞記事から文字の配列など、見やすさのわけを検証している様子。



- ・内容ごとに分かれていて、一目でコーナーが分かる。
- ・文字の高さがそろっているから見やすい。
- ・目立つようにかこっている所がある。
- ・すきまがそろっていると見やすい。
- ・ひらがなと漢字が同じ大きさに見えるように、文字の形や大きさを工夫している。
- ・写真を使うと分かりやすいけど、写真の位置や大きさも考える必要がある。

以上は、子どもたちの気付きの声だが、これまで国語や書写で学んだことを生かして、なぜ見やすいのかをあらゆる観点から捉えていた。また、授業後の振り返りに、ノート の書き方やポスターのまとめ方に生かしていく声がとても多かった。今回新たに分かったこととして、アナログだけではなく、発表資料などのデジタルにも生かせるという子どもたちの気付きがあった。新聞は紙媒体で

はあるが、デジタル文字が刷られている特徴から、子どもたちにとってはタブレット端末の発表アプリでも生かせると思ったようであった。

4. 成果と課題

(1) 成果

本校児童の課題を克服するために、新聞活用の意図を明確にしつつ、子どもたちの思考力・判断力・表現力を高めることができた。

- ① 記事による立場をはっきりさせることで、対立や意見の違いを浮き彫りにし、交流する手立てとすることができた。
- ② 学びと関連する記事は生活や社会との結び付きを子どもたちに実感させ、意欲の高まりや思考の深まりにつながった。

上記の2点のように、自分事として学ぶ手立てを図ることで、本校児童の課題となっている「学びに対して他の学習へ広げて学ぶ姿」や「互いの立場や意見の違いを生かし、自分の考えをまとめる姿」を見ることができた。新聞活用は、学んだことと実生活を結び付ける可能性を改めて確認することができた。

(2) 課題

3年間で検証して継続して課題だったのは、発達段階に合う活用方法の検討であった。小学校は他校種と違い、新聞を詳細に読むことができる子どもは限られるので、教材として扱う際の目的や方法をよく吟味しなければならない。

5. おわりに

新聞を活用することで、様々な教材の一つとして本物に触れる良さを子どもたちは経験することができた。実践を続ける上で、NIE推進協議会に継続的に御支援を頂いた。この場を借りて感謝申し上げたい。

学校図書館を中心とした新聞の活用

旭川市立永山小学校 教諭 牧野 広太
学校司書 中島 環



1. はじめに

本校は今年度で開校127年となる、歴史ある学校である。

今年度でN I E実践校3年目となり、学校にはいつも新聞があるという感覚は根付いてきたが、それには学校図書館での取組によるところが大きい。

1年目は「0から1へ」をテーマに、これまではなかった新聞の文化を学校に取り入れることを目的として活動を進めてきた。2年目は「少しずつ 新聞を身近な存在へ」をテーマに、本校の実態に合わせ、学校生活において実際に少しでも新聞を活用できる方法を探ってきた。そして3年目となる今年度は、結果的に学校図書館が最も新聞活用に適していると考え、学校司書にこれまで以上に協力をしていただき、本校の一つの形として定着を図ってきた。

私自身、ゼロから実践校を始めたのが、これで2校目となる。当然、環境や風土がまったく違う中で、過去の経験を生かした部分とそうでなかった部分を振り返ると、いろいろな気づきがあった。紙媒体による子どもの活字離れが著しいことを、肌身をもって日々感じている。新聞は、間違いなくそれに抗う最良の友である。

2. 児童の様子

本校の児童数は545名（R7.1.1現在）であり、市内で2番目の規模だが、年々減少してきている。

新聞を購読している家庭は少なく、過去の調査によるとおよそ30%だった。担当する6年生の学級でも、購読率は17%であった。また、市内のほぼ全家庭と近郊の町（約17万部）には、週2回フリーペーパーがポスティングされており、これと一般的な新聞の違いを理解していない児童も多い。

本校には、いわゆる「フリースペース」と言われる場所が存在せず、教室と廊下と体育館のみといった校舎である。今後、児童数の減少に伴い、そのようなスペースが少しでも確保できるとよいのだが、その見通しはない。本来であれば、そのような場所に新聞コーナーを設置できれば、もう少し身近なものとして新聞を手にとることもできるのかもしれない。そのため、今年度も図書室の一角を貸していただき、簡素なN I Eコーナーを設けている。学校司書が非常に協力的で、いろいろとアイデアを出し、常に新聞に触れられるよう工夫を凝らした場を提供していただいていることが本当にありがたい。これまで以上に、数多くの取組が見られた。

今年度は6年生担任ということもあり、社会の歴史分野で授業に新聞を活用してみた。学級では新聞によく触れているため、難しい内容も違和感なく学びを深めることにつながったように感じている。

3. 実践の内容

① まわしよみ新聞

今年度も、昨年度に引き続き、毎日帰りの会で取り組んでいる。6年生ということもあり、少しずつレベルアップを図っていたが、それなりに楽しく活動を継続しつつ、得られる力の大きさを再認識した。

取組の意図は下記の通りである。

- 〈1〉 広く社会に目を向けてほしい。
- 〈2〉 タイムリーな活字に触れてほしい。
- 〈3〉 情報を選び詳しく読む力を付けてほしい。
- 〈4〉 文章を要約する力を付けてほしい。
- 〈5〉 集団の前で声を出す経験を積んでほしい。
- 〈6〉 集中して話を聞く力を付けてほしい。



今年度は特に「聞く側」の力の向上をめざし、発表の後に近くの人と感想を交流する時間を設けたり、なるべく紋切り型にならないような質問と回答を求めたりしてきた。発表する側も聞く側も楽しく、そして日常の授業と結びつくことで、確かな学びにも繋がっていると感じることが多い。



↓ 時期と共に少しずつレベルアップ！

【事実の要約】
【感想】
【記事クイズ】
【クイズの正解】
【事実】
【意見と根拠】
【提案】
【ジャンル】（ 政治・経済・スポーツ・社会・地域・教育・文化・国際・その他 ）
【事実の要約】
【意見と根拠】
【提案と理由】
【反論と回答】
【ジャンル】（ 政治・経済・スポーツ・社会・地域・教育・文化・国際・その他 ）
【事実の要約】
【意見と根拠】
【提案と理由】
【予想される反論とその回答】
【最終意見】

② 授業での活用

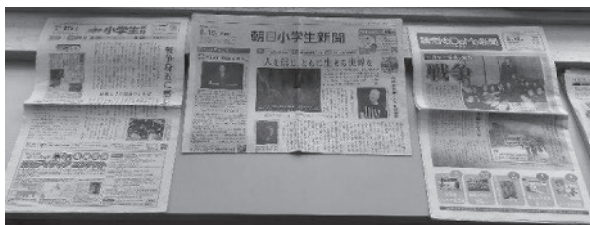
2025年の戦後80年を前に、北海道新聞では2023年7月から「私たちの平和論」というシリーズが続いている。その中から、個人的に重要視している沖縄戦について5回にわたり特集が組まれたので、社会の授業で沖縄戦の内容が出てくる時期に合わせ、記事を読み聞かせたり資料をデータとして提示したりしてみた。2ヵ月半の沖縄野宿生活での体験談を交えながら、過去の遠い場所での出来事とならぬよう、様々なつながりを意識して進めた。



合わせて、沖縄慰霊の日の毎日新聞一面からも、捉え方の違いを学んだ。できることなら、琉球新報や沖縄タイムスの紙面も入手したいところであった。



さらに今年度は、ほとんど夏休み期間中なのにも関わらず、8月に子ども新聞が届くような計画としていたため、終戦の日の毎日・朝日・読売各紙を並べてみた。



実際に授業で活用したのは3学期だが、このような取組を通すことで、6年担任時は夏前に必ず子ども達と保護者に伝える「六二三八六八九八一五五三に繋げ我ら今生く」(西野防人)の理解を深めていくことができるのだと感じた。

③ 学校図書館での新聞活用

新聞通信調査会が行った第17回メディアに関する全国世論調査では、月決めでの新聞購読は約54%。中でも30代、40代の購読が低い。小学生が家庭で新聞を

見る機会が減っていることが推測できる。

この調査で、信頼できるメディアの情報源としては『NHKテレビ』『新聞』の評価が高い。しかし、実際にはインターネットから情報を取得することが多くなっているという結果が出ていた。また、フェイクニュースに騙されない自信がある人は11%、自信がない人は88%という結果が出ている。手軽に情報が得られる世の中になっているが、何が正しいのか判断するのが難しくなっているということだろう。

学校で新聞を手に取り情報を読み取ることは、これからもっと必要な学習になると感じている。今年度は、新聞の記事をピックアップして展示する他に、図書館から新聞を活用してもらうことを考えた。

5年生の国語に、新聞を学習する単元がある。新聞がどのようなものであるのかが説明され、「日常生活でも新聞を読み、興味のあるニュースは複数の記事を読み比べてみましょう。」となっている。学校で複数の新聞が準備できれば、様々なジャンルでの学習が可能で、子ども達の社会への関心を広げることができる。図書館で新聞を閲覧できるコーナーでは、複数の新聞がある時に同じニュースを比較して見られるように開いて展示するようにしてみた。さらに、関連した本も同時に置いている。



ノーベル賞受賞の記事の展示

統計資料の本と共に展示

●「世界の国力ランキング」旺文社

2024. 7. 15 出版

※核兵器保有数

同じく5年生の国語に『統計資料の読み方』がある。表、グラフが掲載されている本をリクエストされたので、新聞記事の中からも探してみた。身近なものや地域に関連した話題のものを選んだ。



．．．北海道新聞
ぶ北作じ海
り海付や道
・道面が積
かのかのい
ぼ人もの
ち口品
や種
など

オリンピック・パラリンピックの年でもあった今年度は、アスリートの記事が大きな写真で数多く新聞に掲載されていた。大きな出来事の記事は、子ども達に知ってほしいものの1つだと考えているので、展示に活用した。世界のどこでどんなことが行われているかを知るのは、世界の地理や国のことに興味をもってもらうチャンスにもなる。フランスは地球のどこにあり、どんな国なのか等、世界の国の本を見てもらうきっかけにもなった。



残手出
つの身地
た記`域
よ事やの
うがり話
だ。どげ
ものし
達北て
の口は、
印榛
象花旭
に選川



4. おわりに

今後は、新聞を展示で見せるだけではなく、「発見する」「考える」資料として実際に学校で活用することに重点を置いて考えていきたい。そのためには、提供する側がもっと広く情報を知っていなければいけないと感じている。特に、学習に使用する記事を探すためには、学習内容を事前に知っておく必要がある。教える側と提供する側の連携も大切だ。



新聞の利用も高学年が中心になっているが、新聞には様々なジャンルの記事が掲載されているので、もっと幅広い学年でも利用できると思っている。



今害
年時新
度の聞
利持広
用ち告
し出も
たしそ
用の
のパー
でッつ
あグで
る『』
。は災

新聞が、もっと子ども達の身近なものになるためには、手の届くところに常に新聞があり、読むことができる必要がある。学校に新聞があることが、これからますます重要であり、どの学校にも置かれていることが望ましいのだと思う。

子どもたちに配布した新聞資料
4年生と6年生に配布

4年生「知る水俣病」6年生「知る原爆」

図書館でも配布用を設置

「知る水俣病」「知る原爆」「知る沖縄戦」

※朝日新聞社の無料配布

2024 年度 NIE 実践報告

NIE と共に歩む

岩見沢市立中央小学校 教諭 富樫 いずみ

1 全校で取組を行うために

今年度、岩見沢市立中央小学校は NIE 実践指定校 6 年目となった。今年度も中央小では、343 名の全校児童に対する NIE の取組を全教職員総意のもと進めている。

昨年度までと同様、『全校での取組とする』ことを大切に、4 月段階で取り組む意図や効果、実践例をこの報告書をもとに共通理解し、各学年が創意工夫をして実践に取り組んできた。

また昨年度からは実践代表者が NIE と紐付いた校務の担当から外れたこともあり、校内での NIE 担当を研修の一係に位置付け、その担当者の先生に校内での活動全般（特に新聞展示会の提案等）を担ってもらった。このことにより、一層学校に根付いた特色ある活動としての NIE の存在が確かなものとなった。

学校全体で NIE 実践を行える学校は、実践校の中でも数少ない。教育効果の高い NIE を学校全体として取り組むことで、より多くの子ども達を変容させることは、他校で個人的に実践をされている先生方の望みでもあると考える。本校は幸運にも、教職員が価値を実感して全校で取り組む体制が整い、新聞展示会（2 月）をはじめ定着した活動が軌道に乗っている。

全校で取り組むため、全教職員に理解



を得るために重要なポイントは、以下の 2 点と捉える。

- 1 教育課程に位置付ける
～『学力向上』という共通目標を持ち現在の指導事項とのリンクを明確にする
- 2 校務分掌に位置付ける
～個の取組から学校の取組へ、年数をかけて学校の文化に定着させる

学校全体で、NIE の効果を実感できる取組を継続して行うこと、その取組の経過や現状を発信することが他校の取組においても何らかのヒントとなると捉え、岩見沢市立中央小学校としての NIE への貢献にもなると考えている。

また、今年度は NIE 第 16 回空知地区セミナーの会場校として本校が選ばれ、9 月 3 日に北海道新聞社みらい教育推進室から小林豊さんにお越しいただき、6 年生（2 クラス 62 名）の授業をしていただいた。

授業作りの際には、6年担任の意見を取り入れていただき、単発の投げ込み授業ではなく総合学習のまとめとしての新聞発表、その表出の仕方を学ぶ1時間としての授業となった。前述の通り、本校で大切にしている教育課程に位置付いたNIE活動の効果を確認することができた。

空知教育局の指導主事からも助言をいただき、学校としても多くの学びを得たセミナーとなった。



2 各学年の取組と教職員の意識

以下は、昨年度も行った各学年の国語担当者が、今年度の取組とNIEの効果について記述したものである。どの学年の担当者も効果を実感していること、NIEの継続が本校児童にとって有意義であると捉えていること、職員の出入りがあっても伝統として受け継がれていることが再確認できた。(なお各自で書きやすい形で提出してもらったので、書式の統一はされていない。)

.....

1年

＜取組内容＞ ～ 好きな生き物新聞作成（7月）・生活科新聞作成（1月）

＜取組詳細＞ ～ 一般の新聞や子ども新聞から、「新聞のいいところ」「見やすい新聞とは」「何を書いたらいいか」等につ

いて確認し、7月に道新新聞コンテスト応募。

生活科新聞は校内新聞展示会用に作成。より記事・見出しを意識させ、マス目用紙を使うなど1年生の発達段階に配慮しつつ「伝えたいことをわかりやすく伝える」新聞作りを目指す。

＜成果＞ ～ 本校の取組として「校内新聞展示会」があり、それに向けて夏に一度作成させることで、児童の実態を把握して1月の作成に向かうことが出来た。児童としても、一度作成しているのでその有用性を含め理解が早く、より質の高い新聞を作ることが出来た。次年度に繋がる新聞作成となった。

＜課題＞ ～ 1年生は発達段階もあり、多くの活動が出来なかった。今後3月までの間に「まわし読み新聞」「ワークシート」などの取組を行い、より新聞に親しませたい。

2年

＜実施＞ 7月に給食センターを見学し、そこで学んだことを壁新聞にまとめて掲示した。時数は生活科と合わせて、国語の作文単元もあてた。

＜成果＞ 新聞という形でアウトプットすることで子どもたちの学びが深まった。また、新聞にまとめるにはどのような情報の収集が必要なのかを学んだ子が多かった。(例：メモの取り方など)

＜課題＞ 1年生で新聞作りを経験しているとはいえ、個人差が大きく、非常に時間と支援を必要とする子が2～3割程度いた。その子達は、かなり書くことを教師から教えられないと書けなかった。

＜実施＞ 9月に見学旅行で円山動物園に行ったことを新聞にまとめた。

＜成果＞ 7月に苦勞して給食新聞を作ったこともあり、今度は指導の必要な子が1割程度まで減少した。楽しんで作る姿も多く見られるようになった。また、クイズを入れるなどの工夫も見られた。

＜課題＞ やはり1割程度の作文の苦手な子への指導が必要。また、円山動物園への取材は時間がなく、十分なメモをとることができなかったため、展示の説明を写真でとってから、図鑑で調べ直す必要があった。

＜総括＞ 本校でNIEに取り組んでいなければ、このような新聞というアウトプットの方法を身につけさせるという大きな成果はなかったと思う。学年を追うごとに積み上がっていく力は大きいと考える。しかし（特に低学年は）事前に新聞づくりの練習をしないと、子どもの負荷や指導にかかる時間が大きい。（何を書いているのかかわからない・どう書かせればいいのか指導に悩むなど）なので学年に応じた国語の事前指導の必要性を感じている。例えば、国語で身近な動物を調べる単元があるので、そこで図鑑で取材→小さな新聞を作らせるなどをすると良かった。

3年

＜取り組み＞

・7月：社会 工場見学新聞づくり（グループ）

・9月：社会・国語 見学旅行新聞づくり（個人）

＜成果と課題＞

・7月はグループで新聞づくりを行ったこ

とで、書くのが苦手な児童もみんなで協力しながら書くことができた。新聞のレイアウトの仕方についてみんなで考えることができた。

・9月は個人で取り組んだため、個人差がかなり大きく、全員が完成するまでにかなりの時間を要した。記事を書くときレイアウトを考えるとときに、特に大きな個人差が見られた。

・個人で取り組む新聞はマスが小さくかなり時間がかかった。記事の下書きを学校で終えて、家に持ち帰って完成させる児童もかなりたくさんいたので、したら負担になりすぎずに取り組めるのか考える必要があった。

4年

＜取り組み＞

・9月 社会・国語 見学旅行新聞づくり（個人）

＜成果と課題＞

・国語の学習の「学級新聞をつくろう」の単元にそって、新聞の書き方を学習してからスタートした。また、他学年の新聞が廊下や集合学習室にはって合ったので、それを参考にすることができた。特に高学年の新聞を参考にしたい！と写真を撮って真似る子もいてとてもありがたかった。課題としては文章を書く能力に個人差が大きいこと、学習発表会の忙しい時期にかぶってしまったことがあり時間がかかってしまった。時期と内容の精選が必要だった。

5年

＜取り組み＞

- ・5月 国語「新聞を読もう」(一斉)
- ・6～7月 総合的な学習の時間「見学旅行(新聞社見学)」(グループ)
- ・7月 総合的な学習の時間「見学旅行まとめ新聞づくり」(個人)
- ・12月 社会「新聞社のはたらき」(一斉)

<成果と課題>

・国語「新聞を読もう」は、教科書に沿って内容指導を行ったが、事前に同じ日の新聞を人数分取り寄せるなどして取り組めば、より深い授業になったのではないかと思う。ただ、5月という時期もあり、事前申請する余裕がない点は残念だった。

・総合的な学習の時間「見学旅行」は、新聞社の見学を行ったものの、内容としてはカメラマンの仕事であったり新聞社の歴史だったりという内容も多く、記事の作成や見出しの検討場面、紙面編集や校正作業などを見ることができず、狙っている学習と見学先の受け入れ内容が一致しない部分があった。

・総合的な学習の時間「見学旅行まとめ新聞づくり」は、見学旅行の最初から「新聞づくりをする」ことを言語活動の柱として取り組んだことがよかった。それまで学習した新聞の構成を理解して、比較的スムーズに新聞づくりを進めることができた。一方、図版の挿入などはまだまだ課題が残った。

・社会科の「新聞社のはたらき」は「情報通信産業」の一部として、メインでテレビ局を扱った後の1時間コラム的な扱いとなったため、さらっとした押さえにとどめた。

6年

<取組教科、内容>

国語 6月 運動会の学び作文・ぶんぶんタイム投稿

総合 7月 グループによる修学旅行新聞づくり

社会 8月 歴史新聞づくり・道新新聞コンクール応募

総合 9月 まわし読み新聞づくり【炭鉄港新聞づくりに生かそう】

(講師・小林豊さん・空知NIEセミナー)

総合 12月 炭鉄港新聞づくり

国語 10月 学習発表会の学び作文・ぶんぶんタイム投稿

国語 1月 人物紹介はがき新聞づくり(予定)

社会 2月 人物紹介はがき新聞づくり(予定)

<よかった点>

作文投稿を作文制作のゴールに設定することで、読む人(相手意識)がいることを意識して取り組むことができた。特に、限られた字数の中で、構成を意識し、自分の主題を書き表すことができた。

新聞づくりに関しては、年度計画をもって進めることができた。そのため年度末に作製した炭鉄港新聞では、見出しの工夫、読者を惹きつける言葉選びや意図をもった割付等に変化を感じた。

.....

実践校として長期間活動させていただく中で、自校の取組は年々深まりと広がりを感じている。今後もNIEの新たな教育効果の可能性を模索し、全教職員の創意工夫と効果の共有をしながら学校全体で日々実践を重ねていきたい。

情報文を読み、自分の意見を持つ

札幌市立宮の森中学校 教諭 松尾 暁子

1. はじめに

本校は、札幌市中央区にある全校 10 クラスの小規模校である。周りを山に囲まれ、校地内に川が流れる自然豊かな環境にある。また宮の森地区は、教育施設に恵まれており、円山競技場では「陸上競技大会」、大倉山ジャンプ競技場での社会科「地形学習」、円山動物園での理科「セキツイ動物学習」、本郷新記念札幌彫刻美術館での「美術鑑賞学習」と環境を生かした学びを実践している。そして、地域にお住まいの方の手を借りた「オーロラ学習」「キャリア学習」など、人的特色を生かし、コミュニティースクールとしてのありかたも模索している。

教育目標である「自立・共生・未来志向～自ら立ち、共に生きることを学び、明日を志す生徒」を実践する中で、「ユニット学習」・「異学年交流」も本校ならではの教育形態である。



2. 生徒の様子

本校は、穏やかで真面目な生徒が多い。今回、新聞を活用した国語の授業に取り組んだ2年生の「学習などについてのアンケート」の結果によると、「自分には良いところがある」と思っている生徒が85.3%と自己肯定感も高い傾向にある。「1日の時間の使い方を自分で考え生活している」72.6%「自分で計画を立て学習している」60.0%と過半数ではあるが、残りの生徒に関しては、日常生活を自主的に過ごすことに関する課題が残る。「毎日の朝読書」に取り組み、教科で課している「ビブリオバトル」にも積極的に取り組んでいる。また「読書は好きである」と回答した生徒は74.7%いるが、日常生活の中で新聞を読むことはほとんどなく、新聞にテレビ欄があることさえ知らない生徒が複数いた。最近の傾向で新聞を取っていない家庭もかなりあり、情報はSNSで得る傾向が強い。

全国学力学習状況調査の結果を見ると、R6年度も、どの項目も全国平均を上回っているが、「情報の扱い方に関する事項」では「情報と情報の関係について理解する」ことに課題があるとされ、「原因と結果」「意見と根拠」「具体と抽象」などの基本的な情報と情報との関係を理解し、実際に「話す・聞く・書く・読む」の場面での活用が、国語科の指導目標の一つであると再確認した。

3. 実践の内容

上記の学力調査の課題を踏まえ、新聞を活用した学習として、「まいとびっくす」を実行することにした。「まいとびっくす」とは、A3のノートに注目した新聞記事を貼り、簡単な感想を書くというものである。

0, オリエンテーション

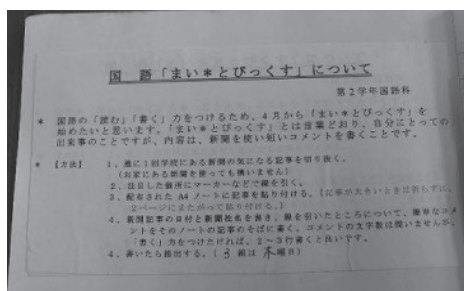
まず、学校にあった古新聞朝刊1日分を全員に配り、どのように記事が流れているかという基本的な新聞の読み方や「見出し」「リード」といった構成に関する用語などを教えた。次に、「まいとびっくす」のねらい

ア、新聞などの情報文にふれる。
イ、その情報に対しての自分なりの意見を持つ。

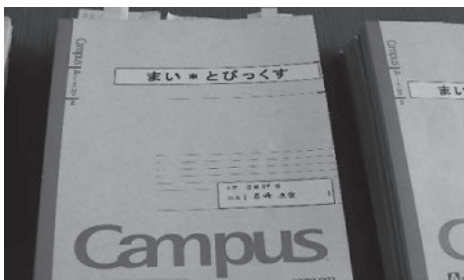
ウ、その情報を「ユニット」で交流し、他者からの意見や感じ方を共有する。

という3点を伝えた。その後、A3ノートとシールを配り（写真1・2・3）、週に1回決められた曜日に「まいとびっくす」を提出することと、それまでに新聞を読み、簡単な感想を書いて提出することを伝えた。

(1)



(2)



(3)



また、配られた1日分の新聞の中から目にとまった記事を切り抜き、ノートに貼り付け、意見・感想を3～4行程度書き提出させた。

1, 実践1 (慣れる)

1学期は、「まいとびっくす」のねらい「ア・イ」にしぼり、まずは新聞を読んでもることを第一にした。家庭で新聞を取っていない生徒のために、NIEで提供していただいている新聞を用意し、教室前の廊下に置いた（写真4）。家庭に新聞がある人も、隙間時間を利用し廊下の新聞を利用することを勧めた。新聞にふれ、多くの情報の中から、個人の関心を引くものを見つけ出すことに重きをおき、教員対生徒との交換ノートのような形で進めた。

(4)



(現在の廊下の様子4)

2, 実践2 (自分の意見をもつ)

新聞を読み慣れてきたところで、二学期からは、意見文になりそうな社会のできごとをピックアップさせ、それについての見解を5行程度にまとめさせた。さらにその中から1点選び、原稿用紙400字～800字で簡単な意見文を書くこととした。(写真6・7)

6



7



3, 実践3 (自分の意見を構築するために他者との意見の交流をする)

抵抗なく新聞が読め、自分の意見もある程度書くことができるようになってきたところで、「意見文を書く」ことに取り組んだ。自分の意見を構築するために、マイトピックスのねらい「ウ」の「ユニット」を使った学習に進んだ。(写真8～10)

8



9



10



「ユニット学習」とは、平成19年度より本校に導入された学習形態で、現在も「令和の宮の森型教育」において「目指す生徒の学びの姿」の一つ「相互啓発と相互承認のある学び」を具現化するため、授業中しばしば実行される形態である。学び合いを想定した3～4人のグループを学級担任がつくり、座席を指定する。そのメンバーで意見を交流しながら「相互啓発と相互承認」を促すスタイルである。

お互いに各々の選んだ記事と各々の意見を書いた付箋を読み合い、その後、記事や他者の意見に対し、読んだ感想・意見を付箋に書き、回し読みをする(写真8～10)。中学生であるため、深みを持った意見は少ないが、他者と交流することで「そういう考え方もあるんだな」「こんなこと考えられるなんてすごいな」といった「相互啓発と相互承認のある学び」から、自分の意見を構築する一助とした。

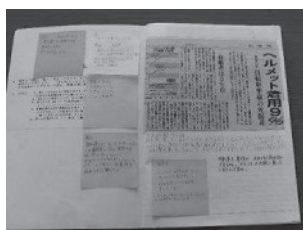
4, 実践4 (意見文を書く)

中学生同士の意見では浅いため、道新の「まなbell」やその他の検索エンジンを使い、関連の記事や情報を読ませた。その後、付箋に「意見と根拠」「予想できる反論とその反論」を書き込ませ、意見文としての起承転結に列べさせた(書写11・12)。その後は従来の原稿用紙に書いていく作文指導の流れで進めた。



(11)

(12)



4. 成果と課題

(1) 成果

これまで新聞を目にすることはあっても、目を通すことがなかった生徒が多いため、新聞（情報文）にふれる良い機会となった。新聞ごとに同日の記事であっても、1面の取り扱いや主張が違うという「気づき」が、複数の新聞を比べ読みする中で自然に生まれた。また、ある程度の生徒が「感想と意見の違い」（「意見には根拠が必要だ」）ということを確認できるようになった。さらに、比較的多くの生徒が、新聞の文体をお手本にし、整った文章を書くことができるようになりつつある。

(2) 課題

4月から2年生を対象にこの取り組みを始めたが、3年生になって継続することは時間のうえで難しい。そのため、単年度の取り組みとなってしまう。今年度の全国学力学習状況調査の結果、「情報の扱い方に関する事項」では全国平均を3.7%上回っていたものの、1週間に1度、9ヶ月間新聞を読んだことが、有効であったかは疑問である。自主的自発的

に新聞に親しむようになってほしかったが、働きかけなければ新聞を読まないという現実も課題なのかもしれない。

おわりに

これまで小説や動画以外のものを目にすることがなかった生徒が、積極的に廊下で新聞を立ち読みしたり、休み時間に教室で読んでいたりした。また、会話の中に、「その根拠は」というような問が聞かれたり、「もっと具体的に」という言葉も口にするようになった。今回の取り組みが、彼らの日常に変化をもたらしたように思う。あらゆるメディアに触れ、彼らの生きる力につながっていくことを願う。



情報発信とフェイクニュースを意識したNIE

ー北海道と新潟の中学生による新聞づくりを通じた交流授業ー

函館市立南茅部中学校 教諭 武岡 良

1. はじめに

本校は渡島半島南東部に位置し、4学級82名の生徒が学校生活を送っている。本校は2023年度に旧函館市立臼尻中学校と同尾札部中学校が統合された中学校である。新設されたばかりであり、学校全体で新聞を活用した取り組みは行えていないのが実情であった。今年度は北海道NIE推進協議会の実践校の指定を受け、新聞提供事業を受けつつ、本校の第3学年が北海道教育大学函館校の野寄講師と連携を取り、新潟県上越市立中郷中学校との交流学习に取り組んだ。本年度の授業は、「令和6年度上越教育大学研究プロジェクト（新聞を活用した教育(NIE)によるメディアリ

テラシー研究）」の助成を受け、企画・実施されたものである。

本校の生徒は、各家庭で新聞を購読していないという生徒も多く、新聞を読む習慣をもたない生徒だったが、学習を通して、情報を発信することの難しさや重要性を実践的な形で知ることとなった。今回の実践報告では、社会科の授業を中心とする、生徒による新聞づくりの実践について紹介したい。

2. 実践の内容

(1) 単元目標

情報を取捨選択できる力と、情報の真偽を見極める力を育成する。

(2) 単元計画

次	時	生徒の学習内容・活動	授業者・支援者等
第1次	第1時	「災害と新聞の役割、新聞作りの基本」	授業者：斉川誠太郎（北海道新聞社）
	第2時	「情報の見極め方について」	授業者：野寄雄太（北海道教育大学函館校）
第2次	第3時～第4時	新聞作成（小グループ、役割分担、取材、記事を書く、写真の選択、見出し、レイアウトの相談、決定）	授業者：南茅部中学校：武岡良 ※野寄と進捗状況の確認、記事の内容、文章の校正、写真の選択、レイアウト等コメントを実施。ZOOMで3回程度打ち合わせを行った。
第3次	第5時	南茅部中と中郷中がそれぞれ作成した新聞を読み合い、質問事項を検討す	指導：南茅部中学校：武岡良
	第6時	オンラインで両中学校をつなぎ、お互いの新聞について議論する	指導：南茅部中学校：武岡良 支援者：野寄雄太（北海道教育大学函館校）

(3) 授業の実際

第1時 「災害は必ずやってくるー新聞記者の経験からー」 第1時では、新聞の作成に先立って、北海道新聞のみらい教育推進室長、斉川様から講話をいただいた。前半は、ご自身の北海道南西沖地震や胆振大地震での取材や災害時における新聞の役割や、災害時におけるフェイクニュースや偽情報が、被災地に与えた影響について、生徒たちは理解を深めることができた。

後半は、新聞の構成を伝える時間とした。生徒は、見出し、前文、本文の役割、レイアウトの基本構造、チャート式で文章構成案を作ること、5W1H、文章、段落はなるべく短めにすることなどを学んだ。

第2時 「情報の見極め方について学ぶ」

第2時では、北海道教育大学函館校の野寄講師による、フェイクニュースを見破ることを目標とした授業に臨んだ。生徒は、情報の信ぴょう性を確認する際には、発信元の確認をはじめとした、5つの方法があることを押さえたうえで、フェイクニュースかどうかを判断する経験を積むことができた。加えて、今回の取り組みでは、自分たちが作成する新聞にもフェイクニュースの記事を作成し、掲載していくことから、偽情報を作成し、拡散する立場の視点についても、学ぶことができた。

第3時～第4時 「新聞の作成」

第3時では、5つのグループに分かれて記事の作成に入った。それぞれのグループでは、小中9年間で培ってきた知識を活用して、地域の特色である漁業や防災に関わる地域の現状や課題について情報を整理し、見出しやレイアウトを考え、クラスで1つの新聞作成することができた。新聞の作成にあたり、「どうしんまな bell」を活用した。

第5時 「お互いに作った新聞を読み合い、質問を考える」

第4時では、上越市立中郷中が作成した新聞を読み、質問を考えた。また、次時のオンラインによる交

流時に相手の中学生からの質問に回答できるようにした。自分のグループが担当した記事以外の記事についての質問にも回答できるように準備をした。

第6時 「上越市立中郷中学校とのオンライン交流授業」

2024年12月18日に、上越市立中郷中学校と、お互いに作成した新聞を活用した交流学习を行った。生徒を3つのグループに分け、グループごとにオンラインでつなぎ、お互いの記事について質問し合った。当日は両校の生徒同士による積極的な交流が見られた。南茅部の昆布漁の実態については、特に中郷中学校の生徒の関心を引いたことから、全てのグループから質問が上がった。新聞記事の感想を共有が終わってからは、記事を作成した際の苦労や、情報を正確に読み取ることの重要性について意見交換が活発に行われていた。

両校の地域の特徴に関わる質問もあった。雪国という共通点から苦労話にも花が咲いた！

(4) 学習活動の様子

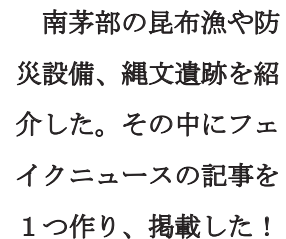
①新聞づくりの様子

本校の3年生は、漁業に関わっている生徒も多い。地域が抱える課題について、具体的かつ深刻に受け止めている生徒も多かった。しかし、その危機意識は「感覚的」であり、数値やデータとして他者に発信することが難しい状況であった。

生徒たちは新聞を作成しながら、資料として詳細なデータや事実関係に触れ、記事として整理していくことができた。事実関係を押さえることで、生徒と南茅部地区、ひいては社会との距離が縮まった機会を多く生み出すことができた。

世の中の事象を自分事として捉え、多面的・多角的

②生徒が作成した新聞



③オンラインによる生徒同士の交流の様子



3. 成果と課題

「どうしん まな bell」を活用することで、効率的に新聞を作成することができた。そして、お互いに作成した新聞記事の内容について質問し合うことで、記事の意図や読み手への伝わり方を考えることができた。

一方で、情報を読み取る力・発信する力については、未だ向上の余地があると考えられる。今後も場面に応じて新聞を扱うことで、読解力と情報リテラシーを高めていきたい。

【参考資料】

- ・ 齊川誠太郎氏（北海道新聞社みらい教育推進室長）作成資料（授業時に使用したスライド等）
- ・ 中平一義氏（上越教育大学教授）作成資料（学習指導案等）

2024年度 NIE 実践報告

新聞の活用と対話・協働学習

北広島市立西部中学校 教諭 野田朝日那

1. はじめに

本校は、自ら考える生徒（創造）、思いやる生徒（誠実）、行動する生徒（自主）、きたえる生徒（健康）という教育目標のもと、以下のような特色ある教育活動を行っている。



<キャリア教育・ユネスコスクールの実践>

地域の団体の力を借りた職場体験学習を実施している。自己設定したテーマに基づき、職業について調べ学習を行い、地域事業所等で職場体験を実施したり、西部地区生涯学習振興会の主催でソクラテスミーティングを実施し、10数名の職業人の話を聞いて将来に向けて具体的に今何をすべきかを考えたりしている。また、カボチャ農園作業を通じたESD環境教育実践として、カボチャを種から育て、栽培、収穫から地域への寄贈や社会貢献という持続可能な循環型社会を目指す環境教育を実践している。さらに、人権・福祉・環境・平和・国際理解教育の実践として、SDGsを意識した取組を行っている。人権教室や命の大切さについての学習・福祉体験や福祉学習の充実・ESD・平和や国際

理解教育（道内大学留学生との交流や市内ALTを活用しての授業）に力を入れている。

<コミュニティ・スクール（CS）の推進>

文科省、北広島市の指定を受け、コミュニティ・スクール事業を推進。小中9年間の発達や学びを支える教育の充実を目指し、小学校、地域の関係機関等と連携しながら「地域とともにある学校づくり」を進めている。地域の人材活用、地域貢献、CSを利用した学力向上や生活改善策、情報発信活動に力を入れている。

<小中一貫教育の取組>

9年間を見通した指導計画及び小中乗り入れ授業や、中学校区での西部スタンダードの実践、家庭地域と連携を図った生活習慣の確立、CSとの連携による小中合同の交流活動を通して、確かな学力や豊かな心、体力向上、開かれた学校づくりを目指している。特にCS防災訓練やCS災害図上訓練などは、小中合同で行っている。



2. 生徒の様子と授業づくり

本校は、小学1年生から中学3年生までの9年間で、ほぼ変わらぬメンバーで過ごすことになる。そのため、グループでの話し合いなどは、活発に行われ、自分たちで課題の解決に向けて活動を進めることができる。お互いの良さも十分に理解しているいっぽうで、一度関係が拗れてしまうと修復が難しく、苦労している様子も見られる。また、関係が変わらず、環境が少しでも変わることへの不安や、新しいものを受け入れることが不得手な面があり、新たな人間関係を構築していくことへの苦手意識をもっている。慣れた環境を好むことから、今よりももっと集団として向上しようという意欲に乏しいところもある。このような背景から、本校では、「主体的に学び、未来を切り拓く、生きる力」の育成を、重点教育目標に掲げ、「互いの考えを認め合い、高め合う児童生徒の育成～対話・協働学習の工夫を通して～」という研究主題のもとで、研究を進めている。対話協働学習に力を入れ、対話の質を高めるためのファシリテーションの研修を行うなどして、工夫を凝らしている。生徒自身が、自分の考えを表現することに加えて、他者の意見を傾聴し、尊重することを大切にする授業づくりを行っている。



(国語の授業でのディベートの様子)



(国語の授業でのスパイダー討論の様子)



(国語の授業での「敬語」を使った対話の様子)

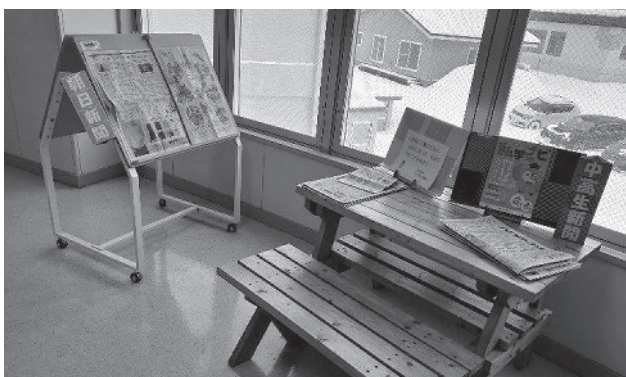
同じ教材や場面を読んでも、感じ方や捉え方は人それぞれで、その価値観の相違を交流し、認め合うことができるようになることが重要である。新聞記事を活用し、読み回しなどをすることで、いろいろな考えに触れ、「新しい視点」で事象をとらえる、という体験をすることができた。さらに、昨今の日本や世界情勢に興味や関心をもつきっかけにもなった。

生徒は、ネット社会で生きており、文字を読むという習慣がなく、語彙力の不足も感じられる。新聞記事には、中学生にしてはやや難しい単語も多いが、たくさんの種類の語に触れることが何より大切であると感じる。

3. 実践の内容

① 学校での展示の工夫

本校では、図書館に新聞のバックナンバーを保管し、いつでも活用できるようにしている。最新版は、常設している新聞閲覧コーナーに展示している。子ども新聞や、季節等に合わせた書籍とともに展示し、閲覧できるようにしている。学習委員が毎日、新聞の入れ替え等を行っていて、誰しものが気軽に手に取れる環境にある。

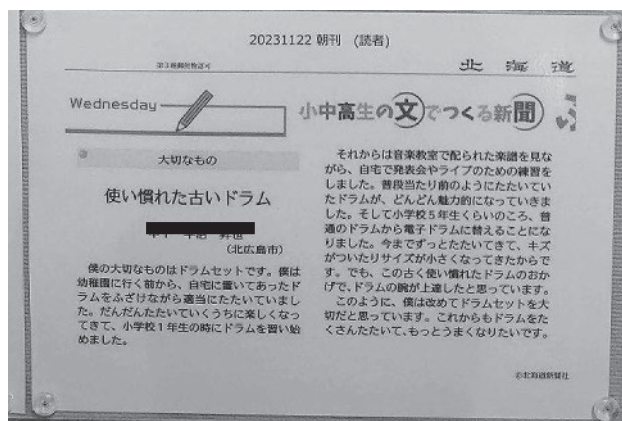


今年度から、従来の新聞閲覧コーナーに加えて、ホールに特設コーナーを設け、全校生徒および全教職員が、気軽に新聞を手にすることができるようにした。新聞の読み方に関する書籍や、複数の新聞を置くことで、より興味を示し、休み時間に新聞を開いてみる生徒や授業で活用して下さる先生が増えた。



② 国語・書写の授業での継続的な取組

昨年から、まずは新聞に興味をもってもらうため、「ぶんぶん time (タイム)」を読み、中高生が新聞を創っているということを感じてもらい、実際にテーマに沿った作文を書く授業を定期的に行った。実際に掲載された生徒はとても喜び、学習のモチベーションになっていた。また、周りの友人も、その生徒が書いた作文に興味関心を示し、自身の創作に生かしていた。掲載された記事は、各学級や校内の掲示板で全校生徒および全教職員に周知した。



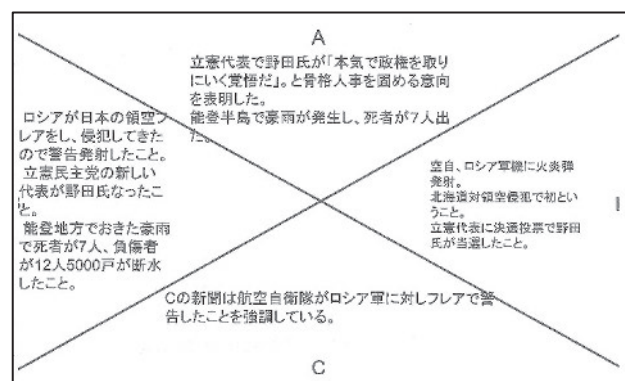
また、昨年度より、「いっしょに読もう！新聞コンクール」に応募しており、様々な新聞記事に触れ、自分の考えをもち、表現するという機会を設けてきた。たくさんある新聞の中から、自分の興味や関心がある記事を選択し、その記事についての考えを自分の言葉でまとめた。また、その記事を他者（友人や家族）にも読んでもらい、どのように考えているかを知ること、自身の考えを深めた。

生徒の課題として、学力テスト等で、書き抜き問題での誤答が目立つことから、早く正確に書く力を養いたいと思い、書き写し学習用の卓上四季ノートを用いて、卓上四季を視写するという取組も実施した。実施の際には、時間を計測した。記事に出てくる語彙については、積極的に辞書を用いて意味を調べ、語彙を増やそうとする姿勢も見られた。

③ 社会科における実践

3年生の公民では、「マスメディアと政治」をテーマに、世論とマスメディアが政治に与える影響について考えた。「新聞によって見出しや記事が異なるのはなぜか」について、それぞれの意見を出し合い、考えを深めた。

新聞社名を伏せて4社の新聞を提示し、各社が最も伝えたいことを考え、Xチャートにまとめ、班内交流をした。その後、新聞各社の特徴と、そう考えた理由について、班で意見を出し合い、スライドにまとめた。



新聞各社の特徴とそう考えた理由		
	特徴	理由
A社	政治について多く書いている。	政治の見出しが1番大きい。データを使って見やすい。
B社	見出しが多くて色んな情報が知れる。	他の会社より見出しの数が多いから。
C社	航空自衛隊がロシア軍に対しフレアに警告したことを強調している。	黒い背景に見出しが書かれているから。
D社	見出しが少なく伝えたいことを詳しく書いてある	見出しを見ただけでも少し理解できるように工夫されている。

4. 成果と課題

(1) 成果

今年度は、6社の新聞を購読させていただいたことで、記事の比較をしたり、記事を選ぶ際の選択肢が増えたりなど、授業での活用の幅が広がった。また、複数の教科で、活用することにより、生徒の新聞に触れる機会が増えた。新聞を読んだことがない生徒や、読み慣れていない生徒がほとんどだったが、以前よりは身近に感じてもらえるようになった。新聞記事は、ある程度の文字数があるため、「文字を読む」という活動がしっかりできた。日常会話では使わないが、社会で必要とされる語も多く、記事を読む中で、「何て読むのか。」「どういう意味なのか。」と聞かれることも多くあった。わからないことを調べる良い機会にもなり、知らない語に触れる、語彙を増やす大変良い機会になった。記事には、図表も多く用いられていることから、情報を正しく読み取る力の育成にもつながった。学力テストや、チャレンジテスト、全国学力・学習状況調査など、各種テストで求められている力の育成に結び付くものがあった。

(2) 課題

新聞の記事は、ある程度の文字数があるため、読み取りに時間を要することから、活動の時間の十分な確保と、日頃から読み慣れておく必要がある。

5. おわりに

新聞は定点観測がしやすく、例えば、株の変動について、1か月後にどうなっているのかをみんなで分析するという学習を行った際には、売買の差益売買の比較など、有効に活用することができた。今後は、どの教科でも積極的かつ有意義な活用を模索し、実践していきたい。

社会認識を高める新聞活用

北海道教育大学附属旭川中学校 教諭 吉田 雅風

1. はじめに

混迷の度を増すグローバル情勢と生成 AI などデジタル技術の発展といった大きな変化があいまって、社会の先行きに対する不確実性がこれまでになく高まっている今日では、あらゆるものや人の動き・変化が地球規模で一体化することについて考え、「グローバル市民」として自分を見つめ、地球規模のものや人を捉えることで、改めて自らの生活について前向き・建設的に考えを深める生徒を育成することが肝要であると言える。そのような社会の潮流を踏まえ、本校では、「総合的な学習の時間」で、「Global」（地球規模のこと）と「Local」（私たちの住む場所特有のこと）を同時に扱う「Glocal」（グローバル）を総合的な学習の時間の中に新設し、各教科等で育成する資質・能力と実社会・実生活とをつなげて実践を行うこととするなど、地域の目線と世界規模の目線を両立する、真の意味で「広い視野」をもった生徒を育成するための実践を行っている。

2. 児童（生徒）の様子

本校は、生徒数 306 名であり、各学年 3 クラス構成の学校である。本実践を行った第 3 学年においては、社会事象に対する関心が高い生徒が多い傾向にある。特に、社会事象の背景を知ろうとしたり、事象に対して多面的・多角的に捉えようとしたりすることの出来る生徒が多いという特徴がある。

一方で、客観的な事実と自分なりの意見を

混同してしまう生徒もいる。12 月に行ったアンケート調査では、2 項選択法で「事象に対して多面的・多角的に捉えようと意識できている」と答えた生徒は全体の大半である 90 パーセントであったことに対し、「客観的な事実（社会認識）と自分なりの意見を区別できている」と答えた生徒は 40 パーセントほどしかいなかった。

真の意味で「広い視野」をもった生徒を育成するためには、資料を適切に読み取り、客観的な事実（社会認識）と自分なりの意見を区別出来るようにする必要がある。

新聞は、特に事実と考えを区別出来る生徒を育成するために最適な教材の一つである。その理由としては、①そもそも新聞記事自体が、事実と考えを区別して書かれている数少ないツールであり（SNS 等では、このようなことは極めて難しい）、②事実の確からしさが極めて高く、③新聞は毎日情報が更新されることや、④読解力に課題がある生徒でも、見出しから比較的適切な情報の読み取りが出来るといった点が挙げられる。

そこで、本校では、教育課程を意識しながら、新聞を授業実践に持続的に取り入れ、最大限効果のある実践を目指して取り組んだ。

3. 実践の内容

① 掲示板を利用した継続的な取組

「2」のような生徒を育成するために、記事に対する意見や考えを共有する場として

の掲示板を活用した。毎月、掲示板には「環境問題」「スポーツ」「テクノロジー」などのテーマに沿った新聞記事を、物事を考える視点（教師のメモ）とともに張り出す。自然と生徒が掲示板の前に集まるようになった。



【写真 1】 掲示板と生徒の様子

そこで生徒同士の自然な交流が生まれ、教師の提示した視点（メモ）について、日常的に議論するようになった。多様な視点を学び、議論を深めるきっかけとなった。

②社会科教育における教材としての利用

社会科の授業においては、以下の2点において新聞を活用した。

①授業の導入場面における新聞活用

授業の導入場面で新聞記事を提示し、授業の内容につなげることを意識した。授業の内容と重ね合わせながら読み深めることの出来る新聞を扱うことで、教科書では得られないリアルタイムの情報を通じて、授業の内容に入ることが出来るようになった。その結果、

生徒の社会科の学習や社会的事象に対する興味関心が高まった状態で授業を行うことが出来るようになった。また、生徒が学びを実社会に結びつける発言をするようになり、特に、経済の仕組みや選挙制度、国際問題など、学習内容を具体的に捉えることが出来るようになった。

②授業の展開場面における新聞活用

授業において、生徒が課題解決をする際の資料として新聞記事を提示する場面もあった。例えば、経済分野の授業で、財政政策における経済の安定化について理解するために、現在の金利変動の新聞記事を扱った。新聞記事を使うことで、生徒は今の実生活とのつながりを意識し、授業内容に対する理解を深めることに寄与した。



【写真 2】 授業の展開における新聞の利用場面

上の資料は、財政政策の意義について議論を行っている場面である。教科書と提示された新聞記事を関連付けることで、理解を深めていた。

③新聞スクラップコンクールへの参加

本校では、昨年度から道北新聞スクラップコンクールに中学校3年生の学年生徒全員で応募をした。本取組では、新聞という生の情報源を用い、時事問題や社会課題について多角的に考える力を育成することを目指した。

まず授業内で、生徒たちが個々に新聞記事を選び、それをもとにスクラップを作成した。

記事の選定から内容の要約、そして自身の意見や考察を記述する作業を通じて、生徒たちは情報収集能力だけでなく、情報を整理し、独自の視点で分析する力を伸ばした。スクラップの内容は生徒が選択した経済・政治・自然環境・人権・テクノロジーなど、それぞれで大きく異なっており、中には英字新聞を使う生徒もいた。このことから、生徒の幅広い興味関心を包括した実践になったのだと考えることが出来る。また、完成したスクラップをクラス内で共有し、互いの視点や考え方を学び合う交流活動を行った。これにより、生徒たちは単なる個人作業にとどまらず、多面的・多角的なものの見方を学ぶ貴重な機会を得ることができた。さらに、作成したスクラップを道北新聞スクラップコンクールに出典し、見事に9名の生徒が表彰（各部門で最優秀賞・優秀賞）を受けた。

以下の写真は、完成したスクラップと交流場面である。



【写真3】授業におけるスクラップの交流場面

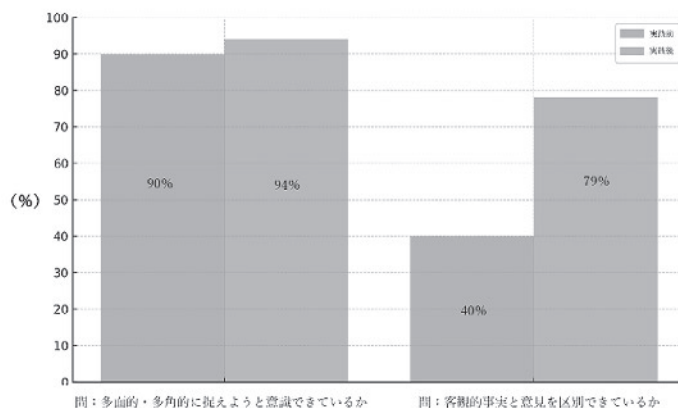
4. 成果と課題

（1）成果

本研究では、生徒89人を対象に、事象を多面的・多角的に捉える意識と、客観的事実（社会認識）と自身の意見を区別する能力の変化をアンケート形式で測定した。事前アンケートでは、「事象に対して多面的・多角的に捉えようと意識できている」と答えた生徒は全体の90%であった一方、「客観的な事実と自分なりの意見を区別できている」と答えた生徒は40%にとどまっていた。

授業実践を行った結果、これらの意識・能力には大きな向上が見られた。「事象に対して多面的・多角的に捉えようと意識できている」と回答した生徒は94%に上昇し、「客観的な事実と自分なりの意見を区別できている」と回答した生徒は79%に達した。

「今年度の実践を通じた生徒の意識の変化」



【グラフ1】生徒へのアンケート

グラフ1から、授業実践が生徒の社会事象に対する認識の深まりに効果的であることが分かった。

また、今回の実践を通じて、生徒たちは社会事象への関心を大いに高めることができた。特に、新聞という媒体を活用することで、世界や地域で起きている出来事に対する興味が広がり、社会と自らの生活とのつながりを感じながら学ぶ姿勢が醸成された。

加えて、掲示板を活用した意見交換やクラス内での共有活動では、生徒同士が互いに学び合い、多様な視点を吸収する雰囲気形成された。これにより、生徒たちは単なる受動的な学習ではなく、仲間と協力する中で主体的に学びを深めることができた。以上のことから、教育現場における新聞活用の意義を改めて確認することができた。

本取組を通じて、新聞という日常的な媒体が教育現場で果たす可能性の大きさを改めて実感した。生徒たちは、単なる知識の習得にとどまらず、自ら問いを立て、答えを模索する探究的な学びを体験したのではないだろうか。今後もこのような実践を通じて、生徒たちが多面的な視点を持ち、社会の一員として積極的に貢献する力を育てていきたいと考えている。

(2) 課題

一方で、今回の実践ではいくつかの課題も浮き彫りとなった。まず、読解力に課題を抱える生徒に対する支援に課題がある点が挙げられる。新聞記事を活用した学習は、背景知識の不足や文章の難解さにより一部の生徒にとって理解が難しい場合があり、記事の要約や内容の補足といった工夫が求められる。

さらに、実践後のアンケートでも「客観的な事実（社会認識）と自分なりの意見を区別出来る」と回答した生徒が増加した一方で全

体の8割程度にとどまったことから、事実と意見を明確に分けて整理する能力の向上が今後も課題であることが明らかとなった。

また、活動の成果を効果的に評価する方法についても改善の余地がある。特に、生徒の意見や多角的な視点をどのように評価し、学びの成果を可視化するかが課題として残った。さらに、掲示板等の取組みは行われたものの、今後は教科横断的な視点や、学校全体で学びの成果を共有する仕組みの整備が必要であろう。

最後に、スクラップコンクールへの参加が一過性のものとならないよう、継続的な学びを支援する仕組みを構築することが求められる。これらの課題を解決することで、本実践の効果をより一層高めることが出来るようにしたい。

5. おわりに

この実践は、新聞というリアルタイム性と多様性をもつ教材を通じて、生徒が新しい視点を得て、事象を多面的・多角的に捉える意識と、客観的事実（社会認識）と自身の意見を区別する能力を伸ばすことを可能にした。これは、生徒が社会認識の力を伸ばし、社会事象に対する関心を高め、資質・能力を伸ばすことに寄与したということである。

新聞を教育に取り入れることは、単なる知識の習得だけでなく、現実の社会に直結した学びを通じて、生徒が未来を生き抜く力を育む貴重な手段となることが分かった。

特に、新しい視点を得て、事象を多面的・多角的に捉える意識と、客観的事実（社会認識）と自身の意見を区別する能力については、21世紀型のスキルであると言えるだろう。そういった意味でも、新聞を教育に取り入れることは、未来を生きる生徒を育てる上で、とても有効であると言える。

新聞に触れさせる工夫・読ませる工夫

札幌市立屯田北中学校 教諭 福井 剛史

1. はじめに

本校は今年度開校 20 周年を迎えた、生徒数 670 人程度の学校である。新聞を購読している家庭は少なく、家で新聞を読んでいる生徒もクラスに数人である。そのため、まずは「新聞を手にする」「新聞を読んでみる」ところからスタートした。

写真 2-2



2. 新聞に触れさせる工夫

写真 1



写真 2-1



まず新聞がどこにあるのかを変えるところから始めた。これまでは3階の学校図書館前に置いてあった新聞閲覧台を教室前の廊下に移動した。（写真1）

学校図書館前の廊下には、学校司書と協力して「今週の～」と「シゴトビト」をシリーズで置くようにした。（写真2）

3. 新聞を読ませる工夫

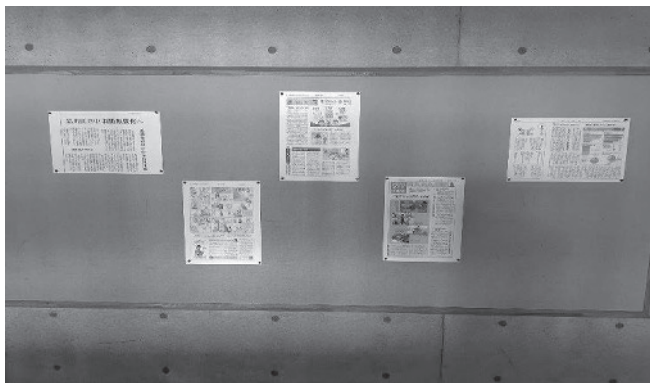
新聞を生徒に読んでもらうため、廊下の掲示板に中学生に関する記事を掲示した。（写真3）

2週間程度で貼り換え、新しい記事に興味を持たせるようにしたところ、掲示板前に集まり新聞を読む生徒が少しずつ増えていった。

写真 3-1

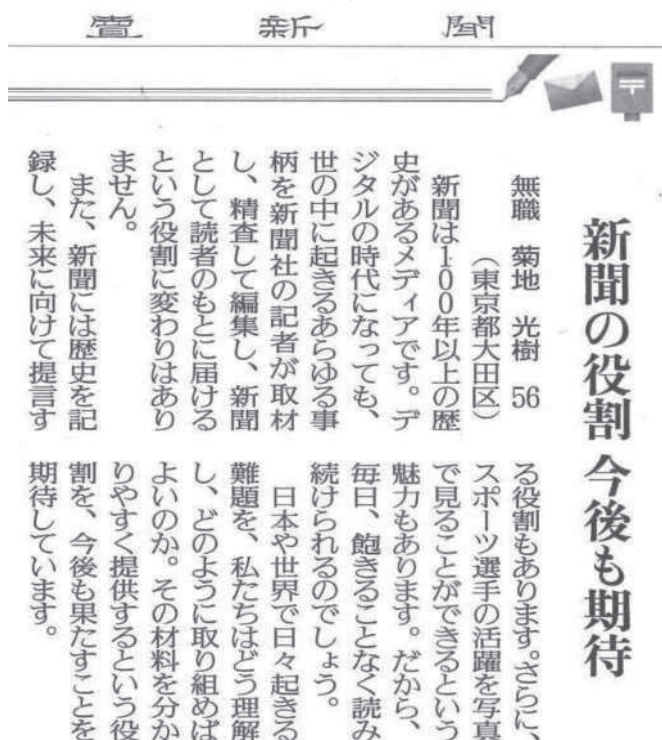


写真 3-2



4. 教材としての新聞

写真 4



3年生の社会科の授業で、1年間の最後に新聞に対する考えを聞いてみた。読売新聞 2025 年 1 月 16 日の読者の声（写真 4）を題材に「新聞の意味」を書いてもらった。

以下に紹介する。

・新聞は最近スマホで見れて紙での需要が少なくなっている中、役割に期待が高まってこれからのことを考えるといいと思った。

・新聞の役割は大きいと思う。今はデジタル化が進んでいるけどインターネット上にはデマの情報なども流れているから、新聞でしっかりと正しい情報を入手することに新聞は必要だと思う。

・新聞は情報化が進展してスマホなどが流行ってきている中でもあらゆる事柄を正確に読者に届けられるのはいいところだと思った。もしスマホが使えなくなったりマスメディアが少なくなっても情報を届けられるのはいいと思った。

・実際自分も数回しか新聞を朝から読んだことはないけど新聞の重要性はある程度あると思うからインターネットを利用するなどして消えないでほしい。

・新聞は実際に起きたことがもとにされて記事になっているので、テレビや SNS よりは発信が遅いが、その分信用できる内容が記録されていることが多い。しかし、新聞社によって、同じ記事でも書いてあることが違ったりして、編集者の価値観が入っていることもあるため、そこは適切に判断して、利用することが必要であると思う。

・情報化が進んでいて新聞を見る人が少なくなったとしても新聞は昔からある文化だし紙として残っているから将来に伝えられることもあるから新聞は残ってほしいと思う。

・新聞にはネットやテレビより更に詳しいことが掲載されている。新聞は歴史を記録し未来に向けて提言する役割もあり他にもスポーツ選手の活躍を写真で見れるところにも魅力がある。私達には日本や世界で今起きている難題をどう理解し、どう解決するかを考える必要があると思う。

・新聞は日常に欠かせないものだと思う。あんな長文を編集するのだから編集者の賃金をあげたほうがいいと思う。新聞社の記者が取材して精査して編集して読者のもとに届けるというシステムが出来上がっている。社会の現状をいち早く知るためには新聞が重要だということが分かる。デジタルが発展してきたなか新聞は100年以上、役割に変わりはない。私達が生きていくなかでメディアは重要な役割を果たしていくことになる。

・現在あらゆるメディアがあるなか古くからある新聞。新聞のいいところは記者がその現場に行き直接話を聞きに行っ、新聞を書いているので嘘の情報が少ない。予想で書いていないので正しい情報が掲載されている。SNSなどの情報のほうが出回るのが早いけど的確な情報が少ない、嘘か本当かわからない不確かな情報しか出回らない、なのでスポーツ選手の活躍だったり、今後安心して見れるようになってほしい。

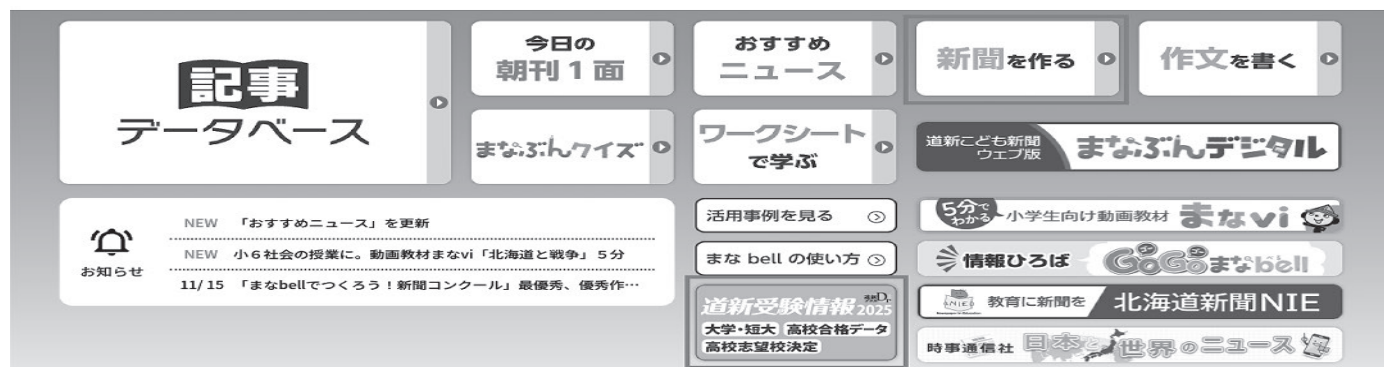
・今後も必要とされるマスメディアの一つであり期待している。マスメディアを通して政府や政党の活動や、それに対して出されたさまざまな意見を知ることができる。幅広い意見を取り入れ、自分の考えをまとめられるようになるためにも、今後も新聞は必要とされると思う。

・新聞は100年以上の歴史があるメディアだと知って驚いた。ネット等だと稀にデマや信憑性が低いもの書なくはないが、新聞だと信用性が高く、授業でもたまに活躍する情報が乗っていることが多いから今後にもっと期待を持てると思う。

・ネットなどで情報がわかる時代に、新聞があり続ける理由は「正しい情報」に「わかりやすい文章」だと思う。ネットは正しい情報もあれば間違った情報もあるし、文章も横書きで文字をたくさん書いてるイメージ。新聞は、ネットに比べ適切な情報がたくさんのもっているし、写真とともに大きい文字に小さい文字まで工夫して見やすくしてくれている。

5. まなbellの活用

こちら3年生社会科の授業内で「過去の冤罪」「人権が侵害された例はあるか」をまなbellで調べて、レポートにまとめさせた。通常のネット検索だとさまざまなサイトが引っかかり真実かどうかわからないものが見つかるが、まなbellを使うことによって、実際の裁判の結果や起訴された内容など「事実」をもとにレポートにまとめることができた。



生徒からは「こんなに冤罪があったことに驚いた」という声が聞かれた。

6. 成果と課題

1年の取組を通して、新聞に触れる・読む機会が増えた。しかし、新聞を教材とした取組やまなbellをさらに活用することはもっとできると感じる。

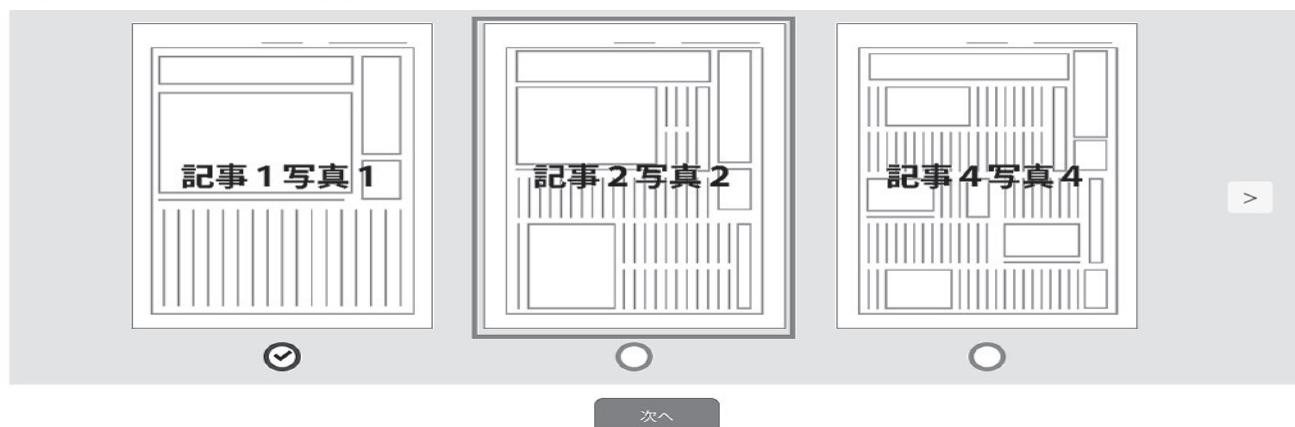
まず、まなbellには入試に関する資料が掲載されている。（写真5）どの学年でも進路（高校受験）に関する指導を行うようカリキュラムに位置付けているので、まなbellを活用した活動が可

能である。高校について調べたことやキャリアについて調べたことをまなbellの「新聞を作る」機能でまとめることもできる。次年度に取り組みたい。

新聞にまとめる際には、中学生なので「記事2・写真2」を基本としたい。小学校で「記事1・写真1」中学校では「記事2・写真2」中学校の後半～高校にかけては「記事4・写真4」と系統だてて指導していくことで、新聞を読む楽しさ～作る楽しさ、さらに作る苦労も考える機会が増えていくはずである。

写真 6

新聞を作る テンプレート選択



生徒が主語になる新聞活用を目指して

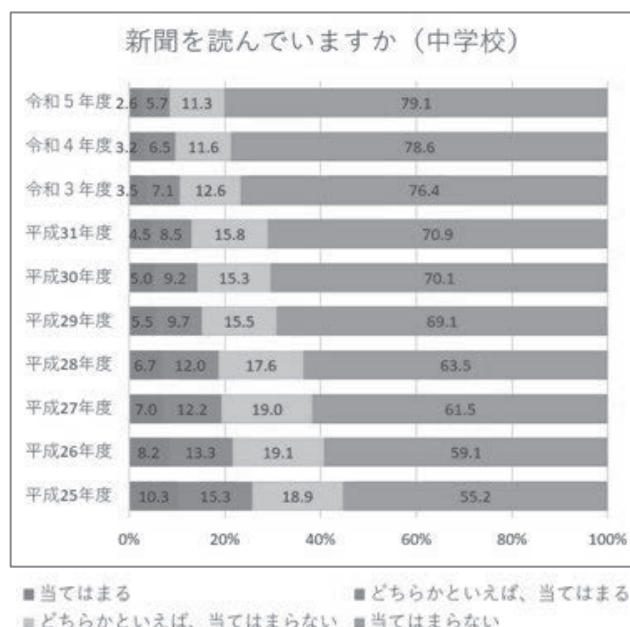
旭川市立永山中学校 教諭 鏡 拓也

1. はじめに

本校は、生徒数440名、15学級という旭川市ではいわゆる大規模校として分類される学校である。NIE 実践指定校2年目となり、昨年度同様に、その普及に取り組んでいる。

教職員の人数も多く、なかなか共通理解に苦勞しているところではあるが、各学年の国語科や社会科担当教諭を中心に、授業に提示する教材として活用されるような場面も多く見ることができるようになってきた。

2. 新聞に親しむための実践について (1) 環境を整える



全国学力学習状況調査生徒質問紙

このように、新聞との距離感が近い生徒の割合は年々減少傾向にあり、どんな形にせよ、新聞に触れる機会を増やしていくことは重

要である。本校においても、新聞を定期購読している家庭の割合は多くない。実践校として指定していただき、各社の新聞を頂けるようになったおかげで、生徒が気軽に新聞にふれることのできる環境が整いつつある。



各階に設置した新聞掲示コーナー

また、図書館司書が中心となり、いわゆる「地元」を取材した新聞記事を図書館前廊下に掲示している。中学生に読んでほしい記事も一緒に掲示してくれており、協力して NIE を展開していく環境が整いつつある。



図書館前廊下新聞掲示コーナー

(2) 朝の NIE タイム



本校では、登校後の 10 分間を朝の学習時間として、読書やタイピングの練習など、日替わりで様々な活動を行っている。

その中の一つ、毎週金曜日は「朝の NIE タイム」と題して、北海道新聞社のワークシートに取り組んでいる。新聞記事の魅力の一つとして、紙面に様々なトピックがあることが挙げられる。時間が限られているので、毎回 1 枚のワークシートしか取り組むことができないが、年間を通して考えてみると、かなりのトピックにふれることができる。

特に、「地元」に関わる記事については、より主体的に読もうとする意欲を感じる。現代社会の出来事を、自分事として捉えることを難しいと感じている生徒は、年々増加しているように感じられるが、それでも「地元」に関わる記事には興味がある。身近な事象に、自分なりの意見や感想をもつことにより、思考力や判断力は磨かれていく。また、担任の教諭からは、文章の要点を捉える能力も向上しているという声も寄せられ、本校生徒の課題である読解力の向上にも繋がっている。

3. 授業での活用について

本校が実践校として指定していただいたタイミングに合わせて、記事データベース「まなbell」を導入させていただいた。このデータベースには、北海道新聞の記事が

蓄積されており、本校では、主に総合的な学習における教材として活用されている。



NIE を展開していく上で最も活用できる記事は、やはり「地域面」であろう。生徒にとって、「地元」に関係した記事は興味があり、読み進めたくなる。もっと関連記事を読みたいと思った時に、すぐに調べられる利便性がよい。

まだまだ、各教科の指導と NIE を結びつけていくための試行錯誤をしている最中ではあるが、年間を通した本校の取組の中で、根付きつつある総合的な学習の時間の活動を紹介していく。



北海道新聞夕刊 (2014 年 11 月 19 日)

本校の総合的な学習の時間では、旭川という「マチ」を多角的に考えたり、自分の興味のある分野を探究したりする活動を行っている。特に3年次では「10年後の旭川のまちづくり」について考える学習をしている。

「ぬくもり」のあるまちづくりを目指して

①旭川の現状について

私が考えたい分野は福祉・子育てです。旭川には、福祉や子育てを支援する取り組みがあることがわかりました。特に、近年開始された、子どもの医療費無償化は家庭の支出を大いに抑えられる面で、家庭に寄り添った取り組みだと思います。また、旭川ファミリーサポートセンターという、支援が必要な人と支援する人が会員になることで支援を受けられるサービスもあります。他にも、さまざまな取り組みが行われていますが、そのことについて私は調べるまで知りませんでした。市民にとって良い取り組みであるのに、あまりPRされていないところがもったいないと感じました。

②他の都市との比較でわかったこと

私は、隣接する東神楽町・東川町と比較しました。東神楽町では、支援センターでのイベントや住宅のリフォームや建て替えの助成があったり、東川町は、妊婦・子どもへの支援が充実していたりすることで移住者増加につながっているのがわかりました。東川町では、生まれた子どもに、成長を願って町内の工房で作られた椅子が贈られます。（下の画像）これは、町民にとっても、産業のPR・発展にも良い取り組みであると思います。産業と結びつけた活動を行うことがまちと取り組みの発展につながると考えます。



◀東川町で行われている『君の椅子』プロジェクト

③私が考えるアイデアについて

市民への支援など、行っている取り組みについて、まずは、市民にアピールしていくことが大切だと思います。そのために、ホームページやお知らせにもっと興味を引く工夫が必要だと考えます。見出しの名前を工夫したり、見やすく改善したりするなどです。また、旭川市は、私が②で比較した2つのまちよりも人口が多く、多くのお金が集まるのではないのでしょうか。しかし、その分、支援が必要な人も多いと思います。その足りないお金の分は、積極的に寄付や募金、クラウドファンディングを募って集め、活動について知ってもらう機会も増やすのが良いと思います。子育て支援施設については、旭川各地にたくさんあります。ですが、1つの「子供の遊び場」のような大型施設にまとめ、その中にさまざまなコーナーをつくるといった、親子で楽しめる工夫をするのも良いのではないかと思います。市民の意見をもっと取り入れ、誰にとっても居心地の良い「旭川」にしていきたいです。

旭川市の広報広聴課の取組に「未来創造ポスト」というものがある。このポストには「アイデアポスト」と「改善ポスト」の2種類があり、特に前者は、市政やまちづくりに対する提案を自由に投稿できるものとなっている。

本校の総合的な学習の時間の系統性として、2年次までに、市内のインフラや未来を拓く人材の育成について探究活動を行うことになっている。3年次では、これまでの知識の蓄積を活用し、「医療・福祉・観光・教育・産業」など、授業者が示したいいくつかの分野から、最も興味があるものを選び、その分野に関わる自分の提案を主に「アイデアポスト」に投稿することを課題としている。「アイデ

アポスト」はその名の通り、斬新なアイデアを求めているので、すでに実践されたアイデアを遡る必要がある。そのために「記事データベース」を活用し、自分の提案をまとめる上で参考になる記事をスクラップさせた。また、異なる分野を選んだ生徒同士でもスクラップした記事を交流させ、多角的に提案を考えるように促した。

次の記事は、旭川市政施行100年を記念したイベントの概要を報じたものである。



北海道新聞朝刊（2022年10月15日）

秋の「食べマルシェ」や冬の「雪まつり」など既存の大きなイベント以外にも、人を集めるイベントをしたいという提案を考えた生徒が、北海道や旭川の各種イベントの関連記事を主体的に読み込み、旭川のスイーツに特化したイベントの企画を提案していた。将来はパティシエを目指しており、そういう魅力的なイベントに溢れる「マチ」に帰ってきたいという志を周囲に発表していた。

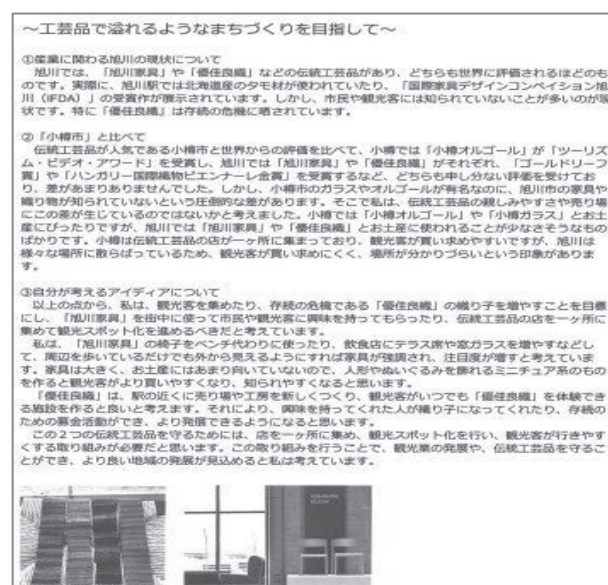
さらに、「地域面」を読み進めていく中で、買い物公園の集客力の衰退による空き地化や駐車場の増加を問題視した記事にふれた生徒が、次の記事のような、広場や空き地の

有効活用に関連した記事を積極的に読み込み、自分のアイデアの参考にしていた。



北海道新聞朝刊（2017年8月2日）

授業者の願いとして、3年間の探究活動を通して、自分の「マチ」の魅力を再発見し、ゆくゆくは地元で、力を発揮してほしいという思いがある。系統立てて丁寧に学習をしていくと、3年次には自立した学習者として、「マチ」の将来像を主体的に考えることができるようになる。今回の取組では、100以上の提案を広報広聴課に投稿できた。自分の提案を実現できる旭川人として、こつこつとその努力を積み上げていってほしいものである。

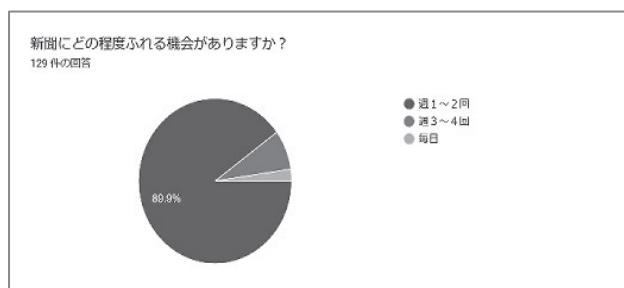


4. おわりに

情報を照会する場面において、ICT 機器ではなくて新聞にあるものとは何だろうか。NIEを考えていく中で、この間に答えることができなければ、生徒と新聞の間にある溝は、なかなか埋まらないように感じた。

NIE を展開して2年目。まだまだ、実践不足ではあるが、前述の問に対する自分の答えとしては「自分を取り巻く社会に関わるトピックにたくさん触れられること」である。

現代は「VUCA 社会」と言われている。このような社会になっていくからこそ、自分にとって必要な情報は、主体的に捉えながらも、世の中の様々な事象に興味をもち、これから何が重要になるのかを自分なりに見定め、新たに見出した情報を活用して、他者と協働して学習していく態度が求められる。これは、ICT 機器と新聞それぞれが共存していくための大切な要素になるのではないだろうか。



本校の3年生（130名）を対象にしたアンケートでは、「新聞掲示コーナー」やまなbellの「今日の朝刊1面」によって、週に1~2回程度は新聞に触れる機会があると答える生徒の割合は9割近くになった。総合的な学習の時間を通して、記事データベースの活用の仕方も向上し、自分の意見に過去の記事を参照して補強できる生徒も増えてきた。

2年間の成果をよく分析し、今後は、校内研修等において、教師間の共通理解を高め、どの学年においても、新聞記事を自分の意図通りに活用できる情報活用能力の育成を目指していきたい。

意見文作成における情報の関係性 —「具体」と「抽象」を起点とした、“知識”の獲得—

札幌市立真栄中学校 教諭 遠藤 翔太

1. はじめに

3年前にNIE全国大会で授業をさせていたことから始まり、実践は今年度で4年目である。昨年度までの実践は、「三角ロジック」を主として、生徒の読む力と書く力の育成に努めた。今年度は、文章の論理展開も引き続き研究課題として取り組むが、より部分に着目した実践をすることに重点を置きたい。したがって、段落同士の関係性などから理解を深め、その後文章の構成や展開に目を向けるようにしたい。中でも、段落ごとの情報と情報の関係性を捉えることを主とした。そうすることで、記事の分量が変更されてしまうことを考えて書く必要がある“新聞記事の特性”に、今までとは違った角度でアプローチできると考えているためである。

2. 児童（生徒）の様子

現在中学1年生を担当しており、1学年で約150名ほど在籍している。国語の学習に意欲的に励む生徒が多いが、一方で自分の考えを表現することに課題を感じている生徒が多い。特に「意見」と「事実」の関係性には大きな課題がある。文章から関係性を読み取ることはできても、実際に表現する場面では使いこなせていない現状があげられる。また、本来2年生で学習することではあるが、「具体」と「抽象」の関係性を1年生段階でおさえおくことで、情報収集時の整理分析や、書くことの意見をまとめること、話すことの収束、読むことの段落の要旨を捉えるこ

となど、有効に働く場面は多くあるため、「意見」と「事実」の関係性ととともに押さえておきたいところである。

3. 実践の内容

① 「ぶんぶんタイム」への投稿

「意見」と「事実」、「具体」と「抽象」の関係などの課題意識を解決するために意見文を書くこととした。意見文は「事実」を使いながら「意見（主張）」を伝えるための文章であるためである。また、学習の必要感をもつために有効だったのが「ぶんぶんタイム」である。自分の書いた文章が新聞に掲載されて、社会に出る、という生きた学習は生徒の心を強くつかんだ。

テーマなどは自由に決めることにしたが、「まな bell」を利用して、過去の掲載された文章を分析することにした。複数の具体的な情報から、共通点などを見いだす活動は具体を抽象化することである。抽象化することで得られるメリットを生徒が実感し、情報収集することが必須となった現代において必要な学習であると考えている。

一度文章を書き終えた時に、「満足した文章が書けただろうか」という問いを投げかけた。生徒からの反応は、「なんだかうまく書けた気がしない」、「この根拠で伝わるのかわからない」などの声が出た。そこで、自分の文章を「事実」を青色で、「意見」を赤色で色分けして視覚で状況を捉えることにした。

■自分の文章を色分けした結果、赤「意見」が多かった。
だから、根拠が伝わりにくくなっている状態（伝わりにくい・課題）となっている。データから分かる事をもう少し伝えていくことで、青が多くなる。それを使えば、もっと赤で伝えられることが増えて主張が強くなり、より仮説が実証できるのではないかと考えた。

〈生徒 A の分析結果〉

■自分の文章を色分けした結果、「事実」が多かった。
だから、事実に対しての意見、根拠が（伝わりにくい・課題）となっている。
作文をするうえでやりやすい意見と事実の比率があるかも🤔

〈生徒 B の分析結果〉

③今日わからなかったこと
まとめがわからなかった。まとめはなにかユニットの人にも聞いてみたがイマイチいい意見が出なくてまとめは最後の文だ。と言っている人もいたけれどまだ最後まで文が書けていない文はまとめがない文ということなのかなと思った。

③今日わからなかったこと
事実と意見のどちらを多く含めば良いのかわからなかった。まとめとはなにか、まとめをどこに入れば良いのかわからない。事実なのか意見なのかわよくわからない分があった。（具体的な学習場面 作文を事実の意見に分けているとき）

〈生徒 A・B 授業後の振り返りより〉

② 教材から“意見と事実の使われ方&まとめの使われ方”を見つける

色分け後の振り返りから、「意見と事実のバランス」、「まとめをどのように用いるのか」が課題として生徒が認知し始めた。自分の書いた文章の不足を捉えることができ始めたため、『『不便』の価値を見つめ直す』という説明文で、文章を分析して理解を深めることにした。

分析方法は、①それぞれの段落を「意見」と「事実」にグループ分けする、②段落同士の関係性を分析すること、③筆者の説明の仕方を分析すること、の3つである。この3つは生徒たちが考えた分析方法である。

生徒たちは「意見」と「事実」の関係性を早々に捉え、段落の順番などから関係性につ

いて理解を深めていた。以前授業の中で、簡易的な具体と抽象の関係を確認したこともあるため、こちらも早く捉えられようと考えていたが、「まとめ」についてはどのような関係性になっているのか捉えるまでに時間がかかっていた。改めて、概念のみの学習では、生徒の学びにつながらないことを実感した。生徒はこの段階で、「どこがまとめの段落なのか」、「まとめの段落がどのような段落であるのか」、という「まとめについての考え」が不足していたことを認知し始めた。

そこで、まとめとなる段落で使われていそうな接続語や、書かれている内容はどんなものが考えられるか、を生徒に問い、確認した。生徒がまとめと考えたものは、「このように（な）〜」、「つまり〜」といった言葉や、内容では、「情報を整理（比較）している」、「要約（簡略化）している」など、があげられた。その後、該当しそうな段落を全体で確認し、他の段落とどのようなかかわりがあるのかを投げかけた。

起点となるまとめの段落を捉えられたことで、漠然とした状態ではあるが、他の段落との役割から関係性を考える様子や、意見と事実それぞれの段落とまとめの段落の関係性を考える様子が見られた。

STEP2 まとめの段落はどう関係しているだろう（段落の関係性を分析する2）

筆者は、まとめの前にそのまとめの説明文を詳しくしている文（補足）を入れた関係性を多く含めた。
なぜなら、この説明文ではまとめが多いからそれぞれどういう説明だったのかを少し説明したほうが理解できるからだと思う。そして自分がそう感じた段落は⑮だ。そして⑮はまとめの⑮みたいに「もう一度、生活を直してみよう」のように提案してなくて、⑮は「提案がなされ始めている」と書かれているから自分の考えだけ他の人はまとめと見えていたが「ダイコンは大きな根？」みたいにこの説明文ではまとめの前に補足？見たいな文があるんじゃないかと思った。

〈まとめと他の段落との関わりについての記述〉

STEP2 まとめの段落はどう関係しているだろう（段落の関係性を分析する2）

筆者がその関係性を多く含めた理由はなんだろう？どんな良いことがあるだろう？
筆者は、主張と根拠とまとめの関係性を多く含めた。
例えば5段落は「このような考えから〜」と入っているため4段落の筆者の意見をまとめている。そして12段落も「こうして集めた情報を整理すると〜」とあるから9段落からの事実の事例をまとめている段落になっている。そして14段落も「これらの〜」という言葉が入っていることから13段落の意見のまとめだと予想した。そしてそのまとめをまとめたものが15、16段落になっていることがわかった。このようなことから意見をまとめたものが後々主張になり、事実をまとめたものが根拠の関係にあたると思った。このように段落ごとにまとめていくと主張や根拠が生まれて15、16段落のまとめをまとめる（全体の段落をまとめる文）に役立つという良い点があると思った。

〈意見・事実それぞれのまとめ段落との関わりについての記述〉

③ まとめの段落の種類について考える

「まとめ」の段落と「まとめられている」段落を捉えたことで、具体と抽象の関係なのは？と考える生徒が増えてきた。また、一言に「まとめ」や「具体」と「抽象」の関係といっても、その中で細かな違いがあることに気が付いていた。

生徒があげていた関係性は、

① 3つの段落で事実として書かれた具体が、次の段落につなげるために抽象化されている。

② 事実はそもそも具体で述べられることがほとんどで、それらを抽象化したものが主張（意見）である。というものであった。①については、序論や本論のなかでも見られる関係性であるため、はじめはどんな役割があるのか理解できなかった段落も、この関係性を理解したことで役割についても理解している様子が見られた。②については、「意見」と「主張」の違いについても理解を深めながら、学習をしている様子が見られた。この段階まで学びを深めたことで、生徒は自分とは違う考えをもつ生徒と意見交流をする様子も見られた。

④ 「具体」と「抽象」の良さとは？

生徒は「具体」と「抽象」の関係を捉えたことで、自分の書いた文章にどのように使えばよいか、をもとに効果・良さについて理解を深めていた。

生徒の考える効果・良さとして、抽象化（まとめ）の段落があることで文章全体の構成や読みやすさにつながっていることを挙げる記述や、相手に伝えるためには具体例を多くする必要があるが、情報が多くなればなるほど複雑化して伝わりにくくなるから、抽象化することで読み手が整理して読むことができる、などの記述が見られ効果について考え

を深めていた。

STEP2 まとめの段落はどう関係しているだろう（段落の関係性を分析する2）

筆者は、不便は必要じゃないと主張する人と同じ疑問をもっていたから具体と抽象の関係性を多く含めた。

なぜなら、9、10、11段落で事例をもとに不便のメリットを具体的に述べた後に14、15、16段落で「物事の中に、実は、新しい気づきや楽しみが隠れているかもしれない、これまでの常識とは異なる別の視点を持つことで、世界をもっと多様にみることができるはずだ。1度生活を見直してみよう。」のように、抽象的に述べた。このような具体を考え、相手との解釈のズレをなくして、16段落で抽象的に述べ、簡潔にまとめたり、例え話ができるなどのメリットがある。また、「常識とは異なる別の視点をもつことで、これは、抽象化するために大切なもので、普段考えないことを考えることによって新しい発見があるため。このように、物事を具体と抽象によってバランスよく考えることで様々なメリットがある。」

筆者は、筆者の最終的な主張をよりわかりやすく、かつ根拠が薄くならないように伝えたいから具体的な事例と抽象的な筆者の主張の関係性を多く含めた。

まず、前提として「具体」というのは多くあればあるほど筆者の伝えたいことはより深く伝わるが、その分複雑になるものだ。そして、「抽象」というのはその複雑に表された「具体」を簡略化して述べることに、思考の柔軟性が生まれ、解釈する幅を広げる事ができる。

この「解釈する幅を広げる」というのがあって「具体」をより深く説明することができ、事例をたくさん挙げられるようになる。そして、それを簡略化して、かつ筆者の考えを交えることで「最終的な主張」が生まれるのではないだろうか。自分はこの考えから2つ気づいたことがある。1つ目は具体、抽象はお互いに支え合っていることだ。抽象が、具体を解釈する幅を広げて「具体」をサポートしているのはわかと思うが、自分は「具体」も「抽象」を支えているのだと思う。なぜなら、具体があることによって、はじめに述べた「筆者の最終的な主張をよりわかりやすく、かつ根拠が薄くならないように伝える」ができる

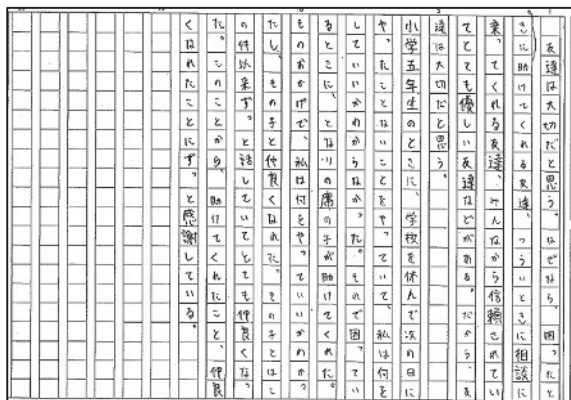
〈情報を抽象化する良さについて考えていた記述〉

⑤ 意見文の書き直し

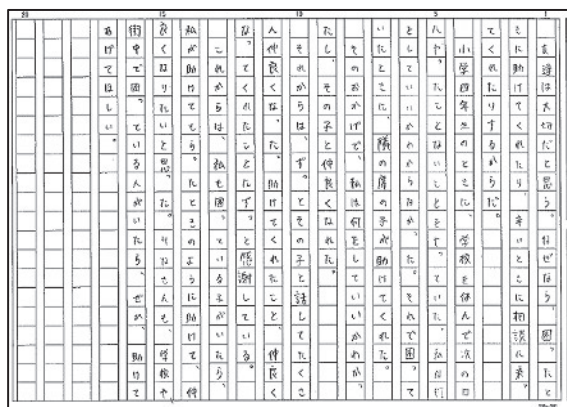
「読むこと」で得た知識をもとに、意見文の書き直しを行った。

生徒は以前の自分が表現したものを今の知識で比較しながら書き直しをしている様子が見られた。なかでも、何も考えないで表現していたことに気が付き、一つ一つの表現に意味を持たせながら書いている生徒や、まとめを書いていなかったために、今までの文章での不足や欠点に気が付く生徒など、「具体」と「抽象」による効果を考えながら学びを深める姿が見られた。その他には、言葉の表現が抽象的で伝わらない文章を書いていた、など、言葉の表現の観点で学びを深める生徒もいた。いずれも、400字という限られた字数がぶんぶんタイムにあるため、より効果的な表現について考える必要があるために深まった学びだと考える。

②レポートを書き直してみても考えたことは、前の自分はまとめを入れてなくて、結局何を伝えたいのかよくわからない文章になってしまっている。まとめを入れないとただ調べたことや自分の考え書いただけのメモみたいなものになってしまうことがわかった。（前の自



〈書き直し前〉



〈書き直し後〉

4. 成果と課題

(1) 成果

「具体」と「抽象」を中心に扱って見たが、生徒はその効果や使い方について理解を深めている様子を見ることができた。難しい学習課題に頭を抱える生徒も少なくなかったが、一度関係性について気が付き始めると時間を忘れて取り組むなど、意欲的に学ぶ姿も見られた。

また、学習者の学びの意欲や学習の必要感を維持していたものは「新聞に載りたい」という生徒の強い思いであると考えます。授業という枠を超え、生活の場に根差された新聞は、学習者にとっても魅力的で、引き付ける力はかなり強いものであったと改めて実感しました。

今回は新聞への投稿、まな bell を使った情報収集としての教材使用にとどまったが、限られた字数で表現すること、その上で伝えるために効果的に表現すること、を学習者は

学ぶことができたため、新聞の記事を読む際により効果的に読み取ることができると考えている。

(2) 課題

課題として、情報収集能力にはまだまだ課題が残ることがあげられる。

単元の初めに、まな bell を使用して情報収集を行ったが、エコーチェンバー現象のように必要な情報にばかり触れる機会が多い中、自分で情報を調べることには不慣れな生徒が多かった。例えば、検索ワードに自分が欲しい情報を「キーワード」として検索することや、新聞で良く用いられる「漢語表現」などがあげられる。「キーワード」で検索することは、文章の要約でも身に付けることができると考える。また、「漢語表現」については新聞を読み込む中で言葉に触れることが最も効率が良いと考える。

したがって、今回の授業で興味をもち始めた新聞教材をさらに取り扱うことによって、中学3年生までに身に付けられるよう指導していく予定である。

5. おわりに

「新聞離れ」と言われる昨今において、学習者にとって新聞は魅力的であり、教材として引き付ける力はかなりのものであった。

また、以前のような文章全体の構成や展開ばかりに目を向けるだけでなく、段落と段落の関係などの「小さな文章」から全体に目を向けることでより理解が深まった。そして、字数が限られている新聞記事にこそ、段落などの小さな文章の理解があることで、新聞記事を読む際により理解ができるように考えている。

めざす資質・能力の育成に向けた持続可能な活動

別海町立上西春別中学校 教諭 猫宮 和也

1. はじめに

本校は、今年度実践指定校として3年目の認定を受け、全校でNIE活動に取り組んできた。昨年度は初年度から継続している北海道新聞社による出前授業を活用しながらまわし読み新聞の実践を継続し、「キャリア教育における基礎的・汎用的能力の育成において、まわし読み新聞の活動が効果的だと実感できたこと」や「総合的な学習の時間の単位として、新聞を教材とした探究的な学習を構想してNIE活動を行なったことで、資質・能力の育成のためのNIE活動という意識を持つことができたこと」が成果であった。

一方で、単元の中で学級裁量の時間までは、前任の担当者が中心となり各学級の学習を進めたが、担当者の指導頼りにならず、各学年が組織的に実践をする体制を整える必要性を感じた。

その課題解決に向けて、今年度は教師や生徒が変わっても一定水準での学習が担保される持続可能な取り組みとしてのカリキュラム開発を推進した。

2. 実践の内容

全国・学力学習状況調査の各種調査結果から、学習の基盤となる資質・能力の育成が数年にわたる本校の課題であると考えられる。この課題解決に向かい、令和2年度は「問題発見・解決能力」の育成をめざして、資質・能力のつながりを整理し、授業改善を行なった。令和3年度は全教科等における言語活動の充実を図り「言語活用能力」の育成を目指した。また、令和4年度末から昨年度までの間には、「情報活用能力」の育成と並行して、NIE活動を教育課程に位置づけるべく、カリキュラム開発に着手

し、総合的な学習の時間の見直しを行った。その結果、別海町が推進している「ふるさとキャリア教育」を総合的な学習の時間の核としながら、NIE活動を教育課程に位置づけ、「情報活用能力」の育成を目指すと同時に、持続可能なカリキュラムの実現を目指した。

(1) 単元の概要

総合的な学習の時間の目標	
探求的な見方・考え方を働かせ、自分の生活と地域や社会の人・もの・こととの関わりについて横断的・総合的な学習を行うことを通して、目的や根拠を明確にしながら課題を解決し、自己の生き方を考えていくことができるようにするために、以下の資質・能力を育成する。	
(1) 自分の生活と地域や社会の人・もの・ことに関わる探求的な学習の過程において、課題解決に必要な知識及び技能を身に付けられるようにするとともに、地域の特徴や良さに気づき、問題解決に向けて取り組む人々の努力や工夫により支えられていることに気づく。	
(2) 自分の生活と地域や社会の人・もの・ことの中から問いを見だし、その解決へ向けて仮説を立てたり、調査して得た情報を基に考えたりする力を身に付けるとともに、考えたことを、根拠を明らかにしてまとめ、表現する力を身に付ける。	
(3) 自分の生活と地域や社会の人・もの・ことに関わる探求的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、地域に対する愛着を深め、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら社会に参画しようとする態度を育成する。	
探究	情報化の進展とそれに伴う日常生活や

課題	消費行動の変化（情報）
学習事項	目的に応じた責任ある情報の選択と発信
単元名	マイスクラップ新聞
単元の目標	新聞を活用した情報に関する探究的な学習を通して、情報の収集や選択・活用・発信の方法や自分達の生活と地域や社会が情報を通して相互につながっていることを理解するとともに、物事や情報を批判的に考察し、判断して、目的に応じた効果的な伝え方について考え、日常生活における情報の選択や発信の仕方について考え行動できるようにする。
観点別評価規準	
知識・技能	①新聞の役割や特徴を踏まえて、目的に合った情報の収集や活用の方法について理解して、適切にできる。 ②まわし読み新聞やスクラップ新聞の作成を通して、自分達の生活と地域や社会との関連に気づき、責任ある情報の選択や発信の必要性について理解している。
思考・判断・表現	①新聞スクラップを作成するための課題を設定し、見通しを持って計画している。 ②目的に合わせて記事や情報を収集している。 ③収集した記事や情報を比較したり、分類したりして、目的に合った記事や紙面の構成について考えている。 ④目的に合わせて記事の書き方や構成を工夫し、まとめている。 ⑤日常生活における情報の選択や発信の仕方について、これからの情報との関わり方について考えたことを表現している。
主体的	①課題解決へ向けて、新聞の役割や特徴

に学習に取り組む態度	を活かして目的に合わせた新聞スクラップやまわし読み新聞の作成に取り組もうとしている。 ②課題解決へ向けて、物事や情報を批判的に考察したり、異なる意見の良さや他者の考えの価値を受け入れながら、学びあったり参考にしようとしている。 ③情報の選択や発信の仕方について振り返って、自分の生活の中での情報との責任ある関わり方について考えている。
------------	--

※1～4時間目については、2・3年生は昨年度履修済みのため、1年生を対象として実施し、2・3年生は新聞スクラップやまわし読み新聞の実施としている。

時	学習過程	学習内容
1	課題設定 情報収集 整理分析	オリエンテーション、新聞の価値、特徴、構成や読み方 (出前授業)「新聞 読めばこんなに面白い」
2		新聞スクラップの基本
3	整理・分析 まとめ・表現	新聞の構成調査、記事の書き方 (出前授業)「『まわし読み新聞』を楽しもう！」
4		まわし読み新聞の作成
8月：NIEタイム		新聞スクラップ
9月：学活		まわし読み新聞、振り返りⅠ
10月：NIEタイム		新聞スクラップ
11月：NIEタイム		新聞スクラップ
12月：学活		まわし読み新聞、振り返りⅡ
1月：NIEタイム		新聞スクラップ
2月：NIEタイム		新聞スクラップ
3月：NIEタイム		新聞スクラップ、振り返りⅢ

（２）出前授業①

「新聞 読めばこんなにおもしろい」

別海町では月に１回、「別海町新聞の日」が定められており、全校生徒に１部ずつ北海道新聞が配布される。今年度も校内の取り組みとしてNIEタイムと称し、新聞スクラップやまわし読み新聞の活動など、段階を踏みながら実践を継続した。年度始めの新聞の日にあわせて、２・３年生は昨年度までの振り返りと共に、新聞の価値や新聞を読むことの意義、NIEタイムの内容等についてのオリエンテーションを行った後、早速新聞スクラップ等の活動に入るが、１年生については、昨年度に引き続き、新聞の特徴、構成や読み方を学ぶことを通して、新聞に親しみをもち、NIE活動の取り組みに向けて意欲を持つことをねらいとして、北海道新聞社の出前授業「新聞読めばこんなにおもしろい」を活用した。

授業では、始めに情報リテラシーの大切さや新聞の構成や工夫について学び、その後、ワークシートを使って、それらの工夫を生かした新聞の読み方について実践的に学習した。



また、新聞全体に目を通して見出しやリード文からおおよその内容を掴み、自分の気になる記事を見つけ、友達と選んだ記事を紹介し合い交流した。



この授業を通して、「新聞は難しい漢字ばかりで苦手意識があったが、最初に結論が書いてあったり意外と簡単に読める工夫がされていることを知ると読みやすかった」「隅まで読まなくても理解できることに驚いた。これからは見出しやリード文に注目して素早く沢山の情報を知れるようになりたい。」など、新聞に関心や親しみを持つことができた生徒が多くみられた。

（３）出前授業②

「『まわし読み新聞』を楽しもう！」

２時間目には出前授業①で学んだ知識・技能を活用して新聞のスクラップを行った。生徒達は自分が気になる記事を２～３個程度選び、スクラップ帳へ貼付し、「なぜその記事が気になったか」について自分なりの言葉で精一杯表現していた。また、選んだ記事のポイントとなる部分に線を引いて要点をつかむなど工夫が見られた。

３時間目は新聞の記事の書き方や自分の考えの伝え方、相手の考えの受け取り方について体験的に理解することをねらいとして、北海道新聞社の出前授業「『まわし読み新聞』を楽しもう！」を活用した。１年生にとってはこの時間が初めてのまわし読み新聞の活動になる。「気づき」と「ゆるく楽しく」をテーマに、題字の大切さやまわし読み新聞の作成方法について学び、まずは見よう見まねで作成を進め手順を理解していった。

どのグループも、目を惹きつける題字の選定や強調（色・フォント）の仕方を工夫したり、なぜその記事を選んだのかについて活発に相談する様子が見られた。



依然として新聞に対する苦手意識を持っている生徒もいたが、講師の方から「選ぶ記事は写真だけでもいいよ」「選んだ理由はどんな理由でもいいよ」と助言をいただき、全員が意欲的に活動に参加し、自分の意見や立場を表明することができた。

下記の振り返りからも見受けられる通り、「収集した記事や情報を比較・分類したり、目的に合った記事や誌面の構成について考えている」や「異なる意見の良さや他者の考えの価値を受け入れながら、学び合ったり参考にしようとしている」という観点については十分達成できたと考える。

【生徒の振り返り】

- ・皆が見やすいように、見出しが目立つような工夫をすることができました。
- ・自分の好きな記事や友達を選んだ記事を見せ合い、コメントをし合うことが楽しかった。
- ・皆がどんな記事を選んだかが分かり、記事がかぶっても違う考え方をしている人もいた。
- ・楽しみながらできたが、自分の考えをわかりやすく伝えることが思ったより難しくて、新聞社の人は凄いと思った。

（４）新聞スクラップ・まわし読み新聞作成

先述の通り、月に１回配布される新聞を活用して、生徒たちは個人で新聞をスクラップし、ミニスクラップ新聞を作成したり、それらの材料をもとに３～４人の小集団でまわし読み新聞の作成をしたりしている。本校でのこれらの取り組みは３年目であり、１年生は試行回数を重ねる中で「まずはこの活動自体に慣れ親しんでいく」という段階であるが、２・３年生になると活動もスムーズに進み、「考えが相

手に伝わるような簡潔な文」「興味を引き立てる見出しや共感を得られるような情報提示の仕方」「自分と相手の考え方の違いを比較して考える」などの工夫をしている姿も見られた。



完成したまわし読み新聞は、多目的ホール（学校の中心箇所）に設置されているNIEコーナーに掲示し蓄積されていく。本設置場所は本校の中でも一番人通りが多く生徒の憩いの場でもあるため、NIEコーナーに成果物を掲示することで、ふとしたときに友達や他学年の生徒が書いた記事を読んだり、生徒たちの興味関心を引くことができる。

NIEコーナーには毎日銘柄ごとに新聞も設置されており、国語科や社会科をはじめとした各教科の授業課題等と合わせてこのスペースが活用されることもある。



以下は実際に生徒達が作成したまわし読み新聞（氏名等削除のため一部加工済）である。上述のように「ゆるく、楽しく」をキーワードに、自分が気になった記事の切り抜きに自分の考えや感想を添え、そこに他者がさらにコメントをしたり交流していく。



北海道新聞 2024年12月11日

3. 成果と課題

(1) 成果

今年度は、1年生の導入の4時間（総合的な学習の時間）以外の活動は、月に1回の朝の活動時間や学期に1時間程度の学活など、限りある機会に短時間で行った。活動の型が生徒に浸透しやすく、一定の期間が空いてもルーティンに沿って取り組むことができるデザインであったため、年度始めに課題として挙げていた「教師や生徒が変わっても一定水準での学習が担保される持続可能な取り組み」として1年間通して実施できたと感じている。

特に、まわし読み新聞の活動では、好きな記事を選び、他者へ自分の考えを伝える一方で、友達と意見の相違があった際にも相手の立場になって考えの違いを自覚したり、折り合いをつけて違いを認め合ったりする姿があった。生徒の振り返りからも、本単元の目標（「学年ごとの NIE 活動を通して目指す姿」）の達成に近づけたと実感している生徒が多いことが見受けられた。

以下は今年度の生徒の振り返りと学年ごとの NIE 活動を通して目指す姿（思考・判断・表現）である。学年ごとに達成度の差はあるが、気になった記事について自分の考えを自分なりの言葉で表現することができた。次年度は「批判的に考察する」ことに視点を置いて学習を進めることで、生徒の情報活用能力の向上やより深い学びに繋がると考える。

【1年生】

- 記事の中から心を動かされたところを用いて自分の考えを表現する。
- ・自分の考えが相手（他学年の人にも）に伝わったり、共感してもらえるように相手意識を持って書けました。
- ・前は自分の好きな所だけ読んでいたが、今は見たことのない（知らない）記事についても考えられるようになった。実際見てみると面白い。
- ・自分たちが住んでいる地域（北海道や別海町）の記事を気にかけるようになった。

【2年生】

- 他者の意見と自分の考えを比較して、自分の考えを深める。
- ・記事の内容に対して、どうあるべきか自分の考えを整理したり、反対意見や疑問を持って読めるようになってきた。
- ・スマホで見た内容でも新聞だとより詳しく書いていたりするので読むようにしている。
- ・最近は一通りの記事をさらっと読んでみて、内容を理解した上で自分ごととして捉えることができるようになった。

【3年生】

- 自分の意見だけでなく、他者の意見も取り入れながら、多様な視点から自分の考えをまとめ整理する。
-
- ・内容を読み取る力が身についたと思うが、双方の視点で考えていくと誤った認識が減り、より深い理解に繋がると思った。
 - ・世の中で起こっていることについて、自分の価値観や、自分の住んでいる地域と比べて考えることができるようになった。
 - ・授業で習ったこととの関わりが強いものについて書かれている記事を読んで理解が深まるようにしている。

(2) 課題

全学年を通して活動時数や時間が縮小したことによって本校が考えるNIE活動の本質的な意義や目標が薄れ、その意識が「制限時間内に・沢山の文字数を書いて・新聞を完成させること」に向かってしまい、活動（成果物の完成・提出）が目的と捉えてしまった生徒も散見された。

次年度は「持続可能な取り組みであること」と「活動＝目的ではなく、生徒たち自身から『～ができるようになった』や『活動の中で生まれた自分なりの新たな問い』を生み出すことができる学習であること」の両立を目指した単元計画の作成が課題となる。

また、教師側も NIE 活動の中で、生徒一人一人にじっくりと問い返しを繰り返し行いながら、めざす資質・能力の向上や本校の目指す姿（重点：①A2 熟考し考えをまとめることで、工夫して表現・行動する ②A3 目的意識を働かせ、学びを自分の生活につなぐ）の達成を目指していきたい。

小中共通
教育目標

学びの山を登り切ろう

めざす姿(～よりになりたい・したい)

自主	協働	健康
【学びと活用・自己実現】	【相手意識とコミュニケーション】	【心身の健康と学びの力】
自己との対話を進め、自分なりの学び方をさらに深める 自分との対話・自己学習方法を探索・学び方が「いのち」の活用・活用への活用 思考力・活用	他者との対話を進め、苦手を受け入れ良さを認め合う 多様性の尊重・対話を通じての相互理解・他と自分を見つめ合う・苦手・思考力・活用	心と体の健康状態を自覚し、自ら生活改善を図る 自分の心身の健康状態を自覚する・身体を鍛えたい・見る生活改善・活用 できる生活改善
A1	B1	C1
熱心・考えをまとめることで、工夫して表現・実行する 心の成長・考えをまとめる・対話の発展・考えをまとめる・伝えたい・意が伝わる活動	対立を調整し、相手意識を持って共に成長し合う 対立と相違の調整・相手の理解・相手の立場になって考える・アサーティブ（主張）の受け合い	継続的に思考を改善し、ねばり強くやり抜く Try・Error・様々な方法を考える・「ねばり強いチャレンジ」で考える・時間的
A2	B2	C2
目的意識を働かせ、学びを自分の生活につなぐ 何のために・学びの意義を考えた・質問する・か・未来・学び・生活・生活に活用	自ら意図を働かせ、双方で協力し合う 主体的に行う・積極的に自ら参加して・活動力	周囲の力をかりて、いつもSOSを出せる 一人で頑張る・誰か・多くの人に助けを求める・頼る・頼む・人間関係
A3	B3	C3

4. おわりに

今年度も本単元の実施にあたり、北海道新聞社の出前授業を2度活用させていただいた。本単元のねらいに合わせて、学習の内容を検討いただき、生徒の実態に合わせたわかりやすい授業を通して生徒たちの持つ新聞への苦手意識を緩和し、親しみを持つきっかけを与えて下さったことに感謝申し上げます。

私自身が新聞という媒体から離れ始めた世代の中学生であったため、恥ずかしながら今年度NIE推進係となり、初めて新聞と向き合いその教育的価値について考える機会を与えていただいたと感じている。このようなご縁もあり、計画・活動の推進の中で、新聞は「自分の考え方や価値観を知り、他者の考えとの違いに気づくきっかけ」をくれる重要な教育ツールであることを再確認することができた。今後も「伝えたいことに応じて表現の工夫について考え、課題解決に活かそうとする」など、「情報活用能力」を始め、生徒たちに身につけさせたい資質・能力の育成のために、NIE活動を充実させていきたいと考える。

『まとめ新聞』『新聞スクラップ』の制作

芽室町立芽室西中学校 教諭 掛水 成幸

1. はじめに

本校は、十勝平野西部に位置し、6学級142名の生徒が学校生活を送っています。今年度もNIE実践校の指定を受け、授業等での新聞記事の活用や新聞複数紙による閲覧コーナーの充実を継続させることができました。

今回の実践報告では、昨年度から継続して取り組んでいる「かべ新聞・学級新聞・学習新聞による『まとめ新聞』と新聞記事を扱った『新聞スクラップ』の制作」について紹介します。

2. 実践の内容

①『かべ新聞』の制作（2年総合）

本校2学年は郷土学習の一環として総合的な学習の時間で「宿泊学習」「職場体験学習」「進路学習」について取り組んできました。特に今年度の「宿泊学習」では、足寄町で学習をすることで、地元である芽室と足寄の相違点を見つけ出し、体験したことをもとに記事を作成し、かべ新聞にまとめる活動を行いました。

2年目となったかべ新聞制作では、昨年以上に時間をかけずに内容を深め、完成度が高い作品に仕上がりました。これは昨年の経験とともに、タブレット端末などのICT機器をより良く活用し、生徒の役割分担を明確にすることで「時間」と「人手」を効率よく配分できたためだと思っています。そして、この経験は次年度の修学旅行のまとめとして継続させたいと考えています。



【昨年に続き制作したかべ新聞（2A・2B）】

②『学級新聞』の制作（2年学級活動）

今年度2学年の新たな取り組みとして、タブレット端末を活用した「学級新聞」の制作を行いました。

学級にある報道部の活動として共有編集することで記事を同時に作成しながら新聞の編集活動を行いました。「新しいクラス紹介」「私たちの先生」「宿泊学習や体育祭の紹介」などの記事をスムーズにまとめることができました。

「個人目標」では一人一人が自分の目標を入力し効率的に編集作業を進めました。

今回は初めての取り組みでしたが、今後継続して取り組むことで、さらに内容面が充実したものになると思われます。

【生徒が制作した学級新聞（2A・2B）】

③『学習新聞』の制作（2年理科）

理科では長期休業中の課題として「理科偉人新聞づくり」をタブレット端末で行いました。ロイロノートを使い、あたえられたレイアウトに沿ってまとめる課題でしたが、自分でレイアウトを工夫する生徒も見られ、考えて編集する様子が見られました。

【理科で制作した学習新聞（2年生）】

④『学級新聞』の制作（全学年社会科）

社会科では長期休業中の課題として「社会科まとめ新聞づくり」を手書きで行いました。特に1年生は「国調べ」をテーマに行いました。記事だけでなく、イラストや色使いを工夫するなど、きれいに仕上げられたものが多く見られました。また、3年生の作品は3年間の経験を活かし、完成度が高い作品に仕上げられていました。



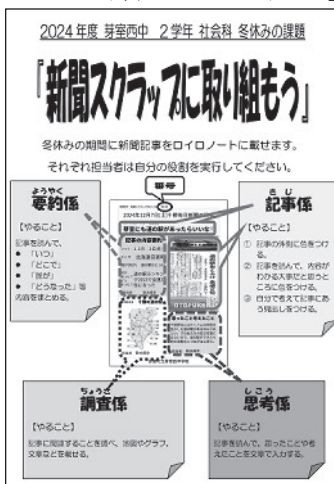
十勝の作品展で入賞した1年生の学習新聞。見出しやイラストで読み手を引きつける内容になっている完成度の高い作品になっています。



十勝の作品展で最高賞を受賞した学習新聞。記事の内容、レイアウトの工夫、丁寧な仕上げなど、全てにおいて3年間の経験を活かしてまわられている作品です。

⑤『新聞スクラップ』の制作（2年社会）

現在、十勝管内の小中学校では十勝毎日新聞の協力で、勝毎電子版を利用させていただいています。これを活用し、冬休みの課題として「新聞スクラップ」に取り組みました。



今回の新聞スクラップでは、事前に役割分担を行い、「記事係」「要約係」「調査係」「思考係」の4人で1つの記事に対して取り組むという新しい形で学習活動に取り組みました。



取り組む前に見本を提示しました。また、今回は「共有」での活動のため、生徒同士が作品を随時見合うことで、確認しながら制作を行うことができました。

生徒が制作した新聞スクラップ 1



生徒が制作した新聞スクラップ 2



3. 成果と今後

①『まとめ新聞』の制作について

「かべ新聞」は昨年に続いて十勝管内のコンクールへ出品し、昨年に続き最高賞を受賞することができました。生徒は昨年以上に達成感を感じたようで、次年度につながる活動になっていると思います。昨年アドバイスを頂いた「見出しのつけかた」についても、読者が興味をもつような「見出しのつけかた」を協力して意見を出し合いながら考えて行う姿が見られました。

学級活動による学級新聞は、初めての取り組みでしたがタブレット端末を使うことで最小限の時間で完成させることができました。今後継続して制作することで、内容やレイアウトもより良いものになると思われます。

教科による学習新聞では、個人によるまとめ新聞であっても、過去の先輩の作品や仲間の作品を参考にすることで、工夫がみられる作品が多く、特に3年生の作品は完成度が高い作品に仕上げられていました。

②『新聞スクラップ』について

新聞スクラップに取り組んだ生徒の感想をまとめてみると次のことがわかりました。

(1) 新たな知識の獲得

「今回の課題で知らなかったことをたくさん知ることができた。まとめるのも楽しかった。」とあり、普段あまりニュースを見ていない生徒が、新聞を通じて新しい情報を得ることができたことがわかりました。

(2) 楽しさと難しさの両面

「見出しを考えたり感想を書いたり楽しかったけど思ったより難しかった。」とあり、活動が楽しかった一方で、見出しや記事のまとめが難しいと感じたことがわかりました。

(3) 協力の重要性

「4人で協力することができ、難しかった

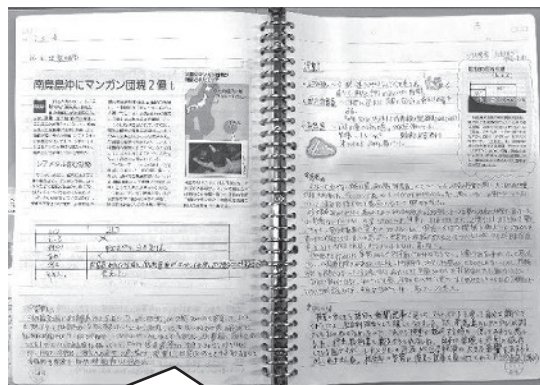
けどいい経験ができて良かった。」とあり、グループでの協力が、良い作品を作るために重要であったことがわかりました。

(4) 新聞への興味の喚起

「今回の活動であまり見てこなかった新聞に興味湧き、楽しくまとめに取り組むことができた。」とあり、この活動を通じて、新聞に対する興味が高まったことがわかります。

(5) 今後の意欲

「今後もしっかりその日起きたニュースを確認していきたい。」とあり、活動を通じて得た経験を活かし、今後もニュースを追いかけていきたいという意欲が見られました。



自主的に取り組んだ3年生の作品。今回3年生は学年としては取り組みませんでしたが、昨年の経験をもとに、自分から定期的に新聞スクラップに取り組む生徒が見られました。

このように、生徒は新聞スクラップを通じて新しい知識を得る楽しさと難しさを体験し、協力の重要性を認識しつつ、今後の活動への意欲を高めることができました。普段から新聞に触れることが減っている中で、新聞記事から情報を読み取り、考え、調べる活動は、生徒にとって良い経験になったと思っています。今後も生徒には新聞記事に触れる活動を取り入れながら、NIEの活動実践を行いたいと考えています。

2024年度 NIE 実践報告

日常の学びを「社会生活に結びつける」

NIE の実践

浦幌町立上浦幌中学校

教諭 中村 宏喜

はじめに

本校は、2026年度から隣接する小学校とともに「義務教育学校」として新たにスタートすることが決まっています。新たな学校をスタートさせるにあたり、教科の乗り入れなど、小中の先生方が協力しながら道を切り拓いているところです。

さて、本校での新聞提供事業を活用したNIEの実践は四年目を迎えました。小学校でも「小学生新聞」などを閲覧できる場所も設けられ、NIEに関しても小中間の連携・つながりを模索しているところです。

これまで、「新聞は生きた教材」を合言葉に様々な実践に挑戦してきましたが、今年度は「より社会生活に結びつく教科指導」を意識しながら実践の推進を行ってきました。特に、言語活動の基盤となる国語科においては、「言葉を豊かに」「語彙力を社会生活にも活かせるように」を念頭に、教科のみならず横断的な学習としても、多様な新聞活用や新聞づくりを通して、「ものの見方・考え方を広げる」授業づくりに結びつけて実践を試みました。

新聞をより身近に感じるための掲示

本校では、文科省で打ち出している「学校図書館図書整備計画」通り、4月から三紙を購入しています。地方紙二紙（十勝毎日新聞・北海道新聞）、中央紙一紙（朝日新聞）が毎日配達されています。



よって、朝日新聞においては「朝日中高生新聞」を新聞提供事業で選択しています。その他にも「読売中高生」や「道

新～まなぶん～」にも生徒に身近な話題や、高校入試に関わる対策なども読むことができ、各担任も通信などで紹介するなど活用の幅を広げられています。

また、こうした「中高生」向きの新聞には“おすすめの図書”などが掲載されることがあります。こうした記事は別に図書室に掲示し、委員会活動として図書購入などに活かしたり、購入後の内容解説として使用するなど、

生徒会の委員会活動にもつながりを持たせています。



読売中高生新聞（'24年11月15日）

新聞掲載され推薦図書の紹介と、実際に購入した図書



**新聞で社会とつながり、
語彙を豊かにする国語科の実践より
～コラムの速記・速読による視写～**

昨年成果を上げた新聞活用継続として、4月から国語の授業の5分を使い「新聞の1面にある記事の紹介」を行いました。ただ、3年生は時数が少ないため1週間に一回の実施。2年生は朝の会に「今日のニュース」を取り入れたため学級活動へ移行。よって、1年生のみ毎時間の実施としました。

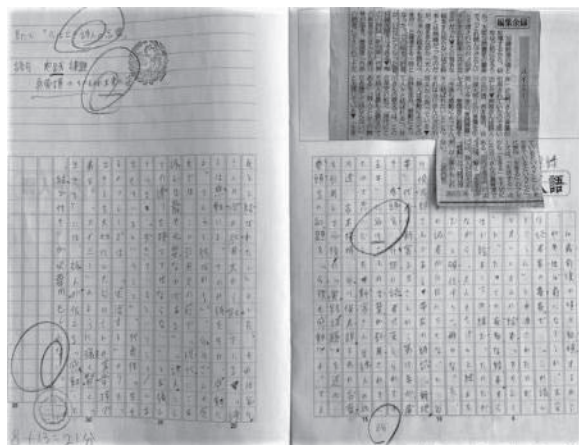
発表力についてはきましたが、本校の課題として「書く力」「語彙力の低さ」が挙げられていたため、7月からは「コラムの速読と視写」に切り替えました。

「天声人語の書き写しノート」を使用し、最初は朝日新聞のコラム「天声人語」を活用しスタート。

- ① コラムは自分で探して準備しておく
- ② 週の初めの国語の時間で、10分を使って試写をし、残った文は家庭学習で行い、最後まで掛けたら合計時間を書いて提出。（期限はその週内）
- ③ 全て試写ができれば、見出しを作ってみる。

こうした流れで展開し、提出されたノートは、特に漢字の誤字・脱字をチェックして返却するという形をとりました。

専門的な用語での引っ掛かりは別として、



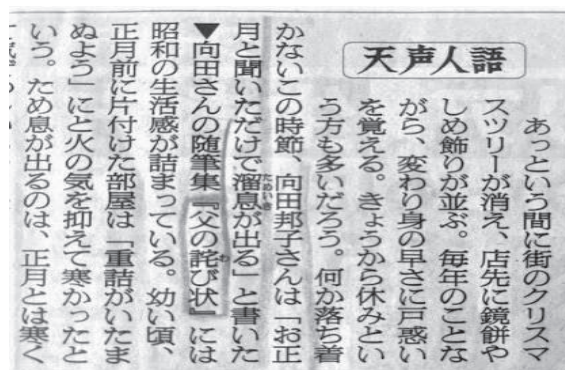
1か月（4回）たつと3年生は8割くらいを視写できるようになってきました。他の学年も、速記のスピードは確実に上がりました。

そこで、後期（10月）からは授業での時間を8分としました。それでも12月には、その学年も時間内にコラムの半分は視写できるようになりました。

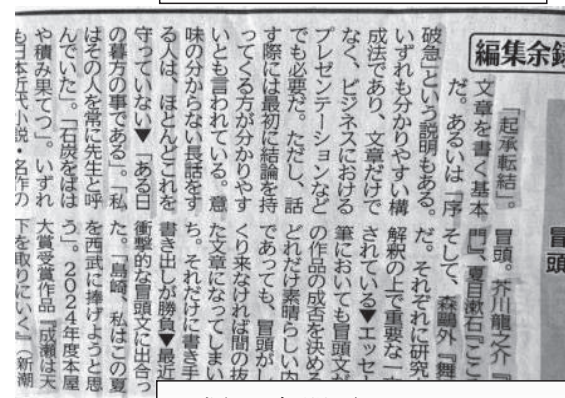
また、後期からは「視写用コラム」の場所を新設。子どもたちが興味を持てる内容や、国語科で出てくる作家や作品（下のコラムを参照）が顔を出すコラムにマーカーを入れ、「これ知ってる！」「この人、習った！」と選ぶコラムをすぐに決定できるようにしました。



更に、時数の違いはありますが、提供されている新聞全てのコラムを対象としました。



朝日新聞（24年12月28日）



十勝毎日新聞（25年2月17日）

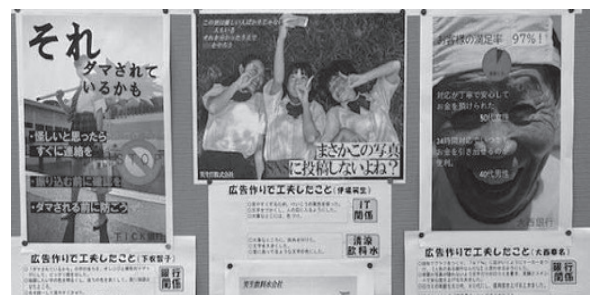
広告作りで語彙力・表現力を育てる ～1年生 国語科～

新聞の活用は、記事だけではありません。写真や広告など、あらゆる部分が「言語活動につながる活動」として活用可能です。

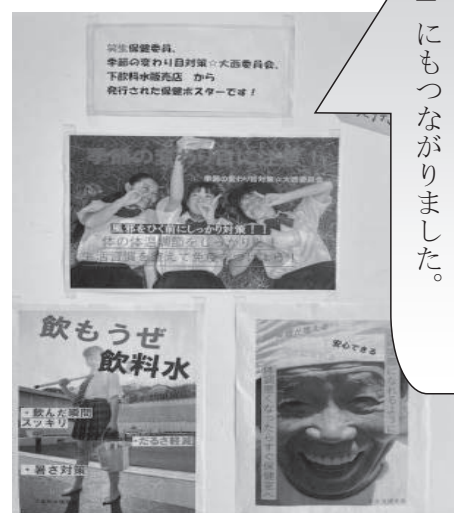
1年生では「広告を作ろう」の授業1ヶ月前から、教室横の多目的室の壁一面に「新聞広告」を貼り出しました。キャッチコピーなども重視し、できるだけ「全面広告」を使用しました。

これらを参考にしながら、各自が「設定された会社」のキャッチコピーを考え、PCを活用しながら広告作りに挑戦しました。

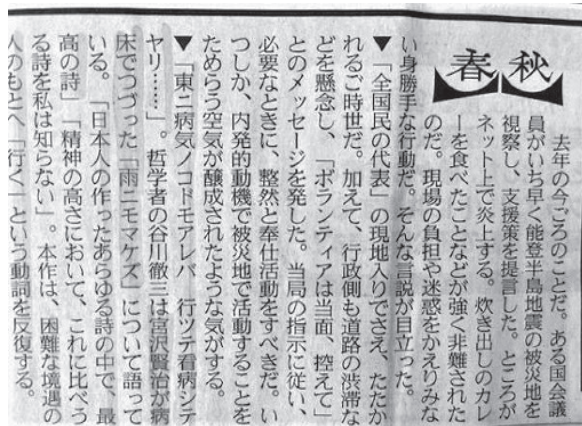
特に、キャッチコピーを考える際には、2種類以上の言葉を候補として挙げ、仲間からどちらの方が良いのかを聞くなど、他人の目（意見）も意識しての取り組みとなりました。



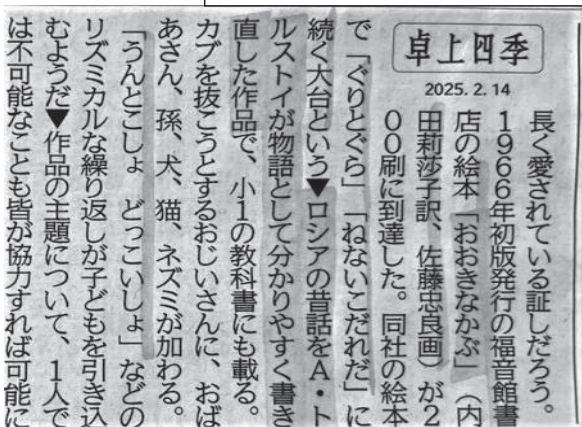
今年度は応用編として、『保健室の広告』も作成。養護教諭も掲示とともに、コメントを加えてくれました。



保健室前には、昨年の作品も掲示されている。先輩方とは違った角度から広告を作成。「健康への意識の高まり」にもつながりました。

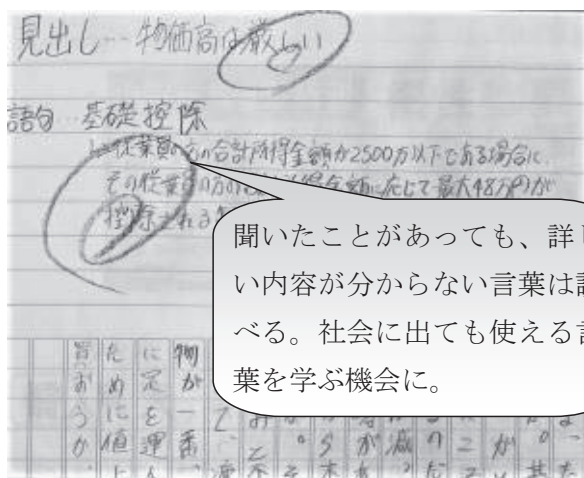


日本経済新聞 (25年1月9日)



北海道新聞 (25年2月14日)

最後に、11月からは、書き写した後に「初めて知った言葉」や「“漢字で書きなさい”と言われたら書けるか?」「意味が難しい、分からなかった言葉」も書き出したり、その意味を調べることも、自主的活動（家庭学習）として付け加えました。



聞いたことがあっても、詳しい内容が分からない言葉は調べる。社会に出て使える言葉を学ぶ機会に。

「春休みの選択課題」としても、1・2年生は実施する予定です。

教科横断的な学習を意識した NIE を活用した実践

1 キャリア教育を意識した

新聞スクラップ（全学年）

「新聞スクラップ」の取組は、2つの長期休業での課題と連動させ実施しました。「読解の力」だけでなく「書く力」や表現力育成に結びつけました。

夏休みには、学年ごとにテーマを提示（1年：浦幌町～十勝、2年：十勝～北海道、3年：北海道～日本）、その中で小テーマを各自設定しました。

この経験を生かしながら、冬休みの大テーマは、「自分の進路につながる新聞スクラップ」とし、将来を考えながら各自で小テーマを設定し、課題解決学習としました。（自らの設定課題に沿って、10以上の記事をチョイス。）

これら夏・冬を通した作品は、全十勝スクラップコンクールにも出品され、最優秀賞ほか各学年数名の入賞者が出るなど、管内でも認められる取組となりました。



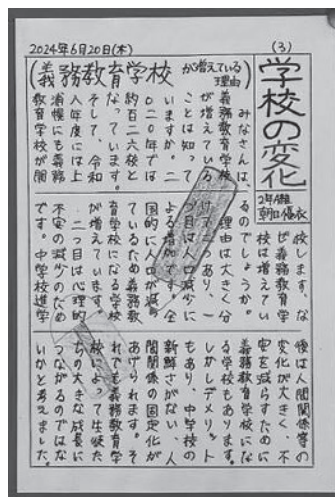
中学校の部では、全学年で多くの入賞を果たす

中学校1年生の部では、最優秀賞を受賞

2 新聞形式でのまとめ

(1) はがき新聞（全学年国語）

「書く力」を養うために「はがき新聞」の取組を継続して行いました。今年度は国語科の「書く」と連携させ、2年生の「投稿原稿を書

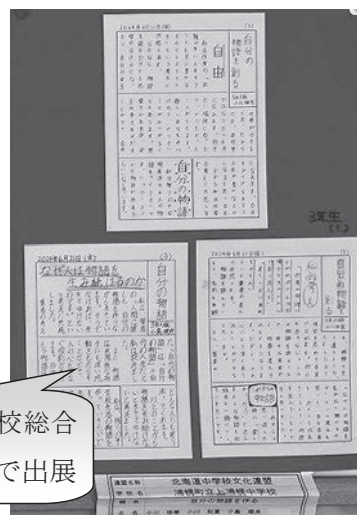


こう」では、批判的な見方で新聞投稿文を書きました。また3年生の「なぜ物語は必要なのか」では、自分の人生観を踏まえた文章を、一文の長さに注意し小気味の良い文体になるようコンパクト

トにまとめました。

作品は文化祭での教科展示のみならず、全国中文連の舞台にも北海道を代表して出品され、高い評価をいただきました。

全国中文連中学校総会文化祭にも全校で出席



(2) 学級新聞づくり

(国語・総合的な学習の横断的な学習)

総合的な学習の時間での発表原稿を時数を意識しつつ「記事原稿」に変え、新聞形式にまとめました。1年生は4ページ、2年生は6ページの「学級新聞」として完成させ、十勝のコンクールでも最優秀賞を受賞。

また作品は地域の「公民館まつり」でも掲示され、文章力を評価されるだけでなく、地



域の方々に中学校での取り組みを知っていただく良い機会となりました。

新聞を読んで読解力、思考力、表現力を高める

小樽市立北陵中学校 教諭 窪田 達大

1. はじめに

本校は、「小樽市立北山中学校」「小樽市立末広中学校」の2校が統合し、新設校としてスタートを切ってから8年目を迎えた。教育目標を「小樽の未来をつくる北陵生の育成」と定め、「深く学び、考え、表現できる生徒」「豊かに人とつながり、思いやりのある生徒」「たくましく心身を鍛え、自らを律する生徒」を目指すべき姿と捉え、故郷小樽のまちづくりの担い手となる生徒の育成に努めている。

しかし、全国学力・学習状況調査の結果から、本校の生徒は、国語科では「書くこと」「読むこと」の領域が全国平均を下回り、数学科においても理由を説明する問題で無解答率が高いなどの課題が明らかになっている。また「語彙」が不足していたり、言葉を紡ぐ術が未熟だったり、物事の発想の基となる「実体験」に乏しかったりと多くの課題を抱えている。

これらの課題を解決する一つの方法として、教育課程の中に、週に一度のNIEタイムを設定し、「書く活動」「読み取る活動」に取り組み、8年目を迎えた。

2. 実践の概要

(1) 教育課程への位置づけ

「小樽の未来をつくる北陵生の育成」を目指す、本校生徒の「書くこと」と「読むこと」の領域の課題解決を目指す、教育課程の中に「NIEタイム」を設定し、毎週金曜日に4種類のワークシートに取り組んでいる。

(2) 「12のスキル」とNIE活動

本校の生徒に身につけさせたいスキルを「12のスキル」として提示しており、学年ごとに重点を設け、教育活動全般で取り組んでいる。

目指す生徒像		
深く学び、考え、表現できる生徒	豊かに人とつながり、思いやりのある生徒	たくましく心身を鍛え、自らを律する生徒
目指す生徒像につながる生徒の「12 Skill」と育成を目指す資質・能力の3つの柱との関連		
主体的に学ぶ力を育て、高める	コミュニケーション能力を向上させ、社会性を高める	集団としての自治的能力を育て、高める
1年生の重点 SKILL		
S1 立腹ができる S2 場面に応じた正しい言葉遣いをする 知識及び技能	S5 自分を大切に、敬意を払うことができる 思考力・判断力・表現力等	S8 挨拶をし、時間を守り、場をきれいにできる 学びに向かう力、人間性等
2年生の重点 SKILL		
S3 相手意識に立って自分の考えを表現し合うことができる 思考力・判断力・表現力等	S6 様々な人や多様な考えを受け入れ、関わり合うことができる 学びに向かう力、人間性等	S9 先を見通して計画的に行動できる 知識及び技能 S10 何事にも挑戦できる 思考力・判断力・表現力等
3年生の重点 SKILL		
S4 人の意見を「聞き」自らの考えを深めることができる 思考力・判断力・表現力等	S7 地域に貢献できる 学びに向かう力、人間性等	S11 マナー・モラルを踏まえ建設的に考えることができる 知識及び技能 S12 自分のキャリア・生き方を考えることができる 学びに向かう力、人間性等

その中でもNIE活動と特に関わりの深い項目は次の二つである。

「主体的に学ぶ力を育て、高める」という柱では、3年生の重点として、「人の意見を聞き、自らの考えを深めることができる」ことを挙げている。このスキルを身につけるために、NIEの活動を通して新聞記事から意見を読み取り、それについて自分自身の考えを持つ練習が大きく役立っていると考えられる。

また、「コミュニケーション能力を向上させ、社会性を高める」という柱では、2年生の重点項目として「様々な人や多様な考えを受け入れ、関わり合うことができる」ことを挙げている。NIEの活動を通して新聞を読むことで、多様な考えに触れる機会を得ることにつながっている。

【①小樽についての記事を読んで考える】

[illegible]

(北海道新聞 2024 年 5 月 18 日)

NIE 文学的文章を読み深めよう②

★札幌誕生

門井 慶喜
試稿⑥

留學に入つて、日露戦争は終わつてしまつた。
終つてゐれば、主権交還はみな北千歳港に
おきていふ通りになつた。留學にも旅費も
問題でもない。の戦争中の野郎である。四年
あつて五万人以上もの兵を食ひだした。全
くやむる上、海軍艦隊と日本軍の艦隊がロシ
アのバルチック艦隊を撃破したのも、やはり
その故郷である。

よつて、北千歳は、大なる権利の地である。
なほそれはある。樺太の南半分、分岐五十
十度以南が割附されたことと軍事上の極端
重要地位が経済的には他の地点より高いの
しかたでそれにはふかひのないのは、平和の実果
そのものだ。

わたしが罪を消費した。ロシア国々々は
社会主義革命の成功のさきで死んでしまへり。

[illegible]

(北海道新聞 2024 年 8 月 16 日)

NIEタイム ワーシ-ト RT.1.24時分

[illegible]

【問題(2)の①～③に答えるとき】を参考しよう！(朝日中高生新聞 2019年12月1日) 初級(4分) 中級(3分) 上級(2分)

☆わかった事、感じた事をメモしよう。 1分

かんたんな大車でもひとこまコブントもよう

(注) 和川殿、谷い茶などの茶logです。 2分

担当から ～文章作成に協力～ 上野原

[illegible][illegible]

(朝日中高生新聞 2024 年 12 月 1 日)

このワークシートは<http://www.hackender.com/ja/>からダウンロードできます。

[illegible]

2024年11月27日(水) 朝刊 全ページ (記事は再編集しています)

① カスハラ(カスタマーハラスメント)とは何ですか。

記事を参考に書きなさい。

② この条例には罰則はありませんが、罰則を設けるべきだと思いますか。

記事の内容を踏まえて、あなたの考えを書きなさい。

张世成、李海江、王德明、王德胜

2004.12.24 第1226号

(北海道新聞 2024 年 11 月 27 日)

【ワークシート①～④のねらい】

	ワークシート	ねらい
①	小樽についての記事を読んで考えるワークシート	自分たちのふるさとである小樽について考える。
②	長文を読んで、心情を読み取るワークシート	文章から書き手や登場人物等の心情を読み取る力を身につける。
③	新聞のコラムを読んで、文章を書くワークシート	読み取ったことについて自分の意見を持ち、それを的確に表現する力を身につける。
④	さまざまな記事を読み、情報を読み取るワークシート	幅広い社会の動きに視野を広げ、情報を的確に読み取る力を身につける。

（４）日常的に新聞を目にする環境作り

新聞を取っていない家庭が年々増えていく中、生徒が新聞に触れる機会をなるべく多く持つことができるように、図書室には常に複数紙をおいて閲覧できるようにしている。また、バックナンバーについても手に取りやすいように整理して図書室に置いている。



（図書室の新聞コーナー）



（図書室にある閲覧可能なバックナンバー）

廊下や掲示板にも生徒の生活に関わる内容や、関心を持ってほしい内容などの新聞記事の切り抜きを掲示している。



（職員室前に掲示された新聞の切り抜き）



（教室前掲示板上に貼られた新聞の切り抜き）

（５）「どうしん記事データベースまな bell」の活用

北海道新聞の「まな bell」では、過去の新聞記事をキーワード検索することができるため、課題に応じた情報収集や、生徒の興味関心に応じた自主的な情報収集活動を行うことができている。

国語科では昨年度に続き冬休みの宿題として、タブレット端末を利用して、興味・関心を持った記事について、自分の考えをまとめて作文を書く活動を行った。作文作成や作文提出についても、「まな bell」を利用して幅広い時間に取り組むことができるため、その日の新聞を読んで興味を持った記事をもとに作文を書き、その日のうちに作文を提出する生徒も多く見られた。

生徒に示した課題の具体的な内容は次の通りである。

【国語科の冬休み課題内容】

- 『まな bell』で新聞記事を読んで、自分の考えをまとめよう。

手順

- ①『まな bell』を使って、自分が興味・関心を持てる新聞記事を探して読む。
- ② ①の新聞記事について考えたことを350字以上400字以内で作文を書く。
- ③ ②の作文は『まな bell』内の「作文を書く」を利用して作成する。
- ④作成した作文は「先生に送る」の機能を使って提出する。

注意事項

- ※作文の最後に、「出典」として、「新聞記事の日付け（年月日）」と「記事の見出し」を書いて下さい。
- ※作文の中で新聞記事を引用するときは、必ず「」をつけて、自分が書いた部分と区別がつくようにして下さい。

題名 必須

北海道新聞の感想文

本文

461字

私は2025年は巳年なので蛇についてのニュースに興味を持ち、北海道新聞、2025年1月5日の朝刊に載っている『＜みんなの人気者！ご当地アニマル＞1＊ビルマニシキヘビ＝札幌市円山動物園＊筋肉質の輝き まるで宝石』という記事を読みました。
主な内容は円山動物園のビルマニシキヘビの生態についての話で、展示している環境や食事の仕方などが詳しく書かれていました。
私が特に興味を持ったのは、蛇の脱皮の話で

（生徒が「まな bell」で提出した作文）

3. 今年度（8年目）の成果

N I Eを通して付けたい力は主に、①インプットする力（速く、正確に読み取る力）、②まとめる力（キーワードを基にイメージする力）、③アウトプットする力（思いを分かりやすく伝える力）の3点である。

①については、難しい語句の補足説明などが必要ではあるものの、毎週の取組を経ることで、すばやく読めるように成長していく姿が見られる。②については、文章の内容が自分たちにとって身近ではない話題のとき等は要点を掴みかねている生徒が見られるが、これについても回数を重ねることで内容理解の力が身につけていく姿が見られる。③についても、なかなか自分の思いや考えを持てなかった生徒達も、新聞記事を通して多様な考え方に触れることや、仲間との意見交流を行うことで、自分なりの根拠を持って考えを書くことができるようになっていく姿が見られる。

いずれについても、一回の取組ですぐに力がつくものではないため、次年度についても複数の取組を継続・発展させることで生徒達の力を伸ばしていきたい。

世の中と子どもたちをつなぐ社会科学習 ～社会科学習のイメージ化のための新聞活用～

安平町立早来学園 教諭 片岡 鉄也

《はじめに》

教室で学ぶことには、新聞やニュースで報道されていることが少なくない。しかし、子どもにとって、教室で学ぶ世の中の出来事と実際の出来事との間には「距離」がある。それ故に、世の中の出来事と自分を「つなぐ」ことができず、「他人事」になってしまう。

「教室での学び」が「新聞での学び」をイメージしやすくしたり、逆に、「新聞での学び」が「教室での学び」を目に見えるものにしたりする。2つの学びが双方向に世の中のイメージ化を図り、子どもたちの手に「世の中」を届けるために新聞活用に取り組んだ。

本報告では、①災害報道を自分事としてとらえるための防災学習、②新聞を活用した国際理解学習、③中学校における小学生新聞の活用について報告したい。

《実践報告》

1. 災害報道を「体感」する防災学習

～自然災害にそなえるまちづくり～

(小学校4年生社会科)

(1) 活動の概要

〔目的〕

- ・ 自分たちの住む地域における大雨による自然災害の学習を通して、全国で多発する大雨による河川の氾濫等の自然災害を「体感(=イメージ化)」する。

- ・ 地域の自然災害に関する新聞記事を提示し、自然には生活に様々な恵みを与えてくれる一方で、時には自然災害を引き起こす2つの側面があることに気づく。
- ・ 自然災害に備える町の取り組みに着目し、役場職員から大雨による河川の氾濫から住民の安全を守るためにどのような対策をとっているかを知る。
- ・ 地域の自治会の人々による自然災害への備えに着目し、自分たちにできることを日頃から取り組むことの大切さを知る。

〔手順〕

- ①自分の住んでいる町の自然がもたらす恵みを振り返った後、胆振東部地震や大雨による河川の氾濫に関する自然災害の新聞記事の写真を提示。自然は恵みと災害の2つの側面があることに気づかせる。
- ②自分の住む地域では、災害に備えるために町の職員や自治会の人たちがどのような対策をとっているかを知る。
- ③フィールドワークにおいて地域で発生した大雨による災害をイメージすることで、全国各地の災害を自分事としてとらえる。(p2写真)
- ④「非常持ち出し袋」や「家での危ないところ探し」について家族と話し合い、自分の命を守ることの大切さを家族で共有する。

(2) 活動の振り返り

〔成果〕

- ・新聞やニュースなどの報道で知る「大雨による河川の氾濫」は、子どもたちが災害の大きさをイメージすることが難しかった。しかし、実際に川にフィールドワークに行くことで、新聞報道された自然災害を身近なものとして「体感」することができた。



昭和 56 年の大雨によって地域を流れる安平川が氾濫したことを町職員から聞き、自分たちがいま立っている場所のはるか頭上まで浸水したことに驚く早来学園 4 年生児童。

〔課題〕

- ・フィールドワークを通してイメージ化が図れるハザードが水害や土砂災害と限られているので、新聞報道されている他のハザードについてイメージ化を図るために工夫が必要だった。

〔児童・保護者の振り返りから〕

※ 学習のまとめ発表が参観日だったので、保護者から感想をいただき掲載。

- ・この学習で災害が起きた時に備えられると考えた。これを多くの人に伝えていきたいなと思いました。(児童)
- ・非常持ち出し袋の中身を家の人だけにまかせないで、自分も家族と協力して考えたい。(児童)
- ・「自分の身は自分で守る」。大人も子どもも「備える」意識はとても大切だとあら

ためて思いました。(保護者)

- ・災害を経験していますが、時が経つにつれ忘れていたことがありました。今一度家族で話し合いたいです。(保護者)

2. 新聞を活用した国際理解学習

(1) 活動の概要

〔目的〕

- ・中学校公民的分野「私たちと国際社会の諸課題」の学習後、自分たちが生きている今の世の中で、どのような問題が起こっているのか新聞から考えることにした。この活動を通して、教科書で学んだ世界の諸課題が自分の生活に「接続」していることを気づかせ、「自分事」として考える機会としたい。

〔手順〕

- ①『道新でワークシート』から「環境」「平和」「食料」「防災」に関連するワークシートを選ぶ。
- ②『道新でワークシート』の記事読み、気になる箇所に線を引いたり、書き込んだりする。
- ③選んだ『道新でワークシート』に関連する記事を探し、自分の選んだテーマに関する課題を解決していくために何が自分にはできるのかを考える。

〔国際問題の『道新でワークシート』〕

	No.	新聞見出し
環境	1238	気候変動 トムラウシ 縮む残雪
	1237	COP29*年 46 兆円抛出 途上国「失望」*温暖化対策 要求程遠く*先進国と対立鮮明
	1216	道内再エネ 初の 4 割超*昨年度発電量*送電網の増強課題
	1215	地球温暖化のペース最悪に
	1207	蓄電池接続希望 1.8 倍に
	1199	温暖化 サケの成長阻害
平和	1231	被団協に平和賞 核なき世界へ努力 評価

	No.	新聞見出し
食料	1223	食料自給率 3年連続 38% テンサイ糖度低下影響
	1219	道内コブ生産量減少 魚の中止や期間短縮
	1186	襟裳岬 豊かな森へ挑戦続く
防災	1194	ハザードマップ 進むウェブ化
	1182	被災者支援に寝袋発送＊能登地震＊札幌市が1万2千枚
	1179	SNS デマ 被災地不安 正義感で拡散、混乱助長



北海道新聞 NIE ホームページの「ワークシート」からダウンロード。記事だけではなくて、関連する設問があり、グループでの話し合いに活用できる。

(2) 活動の振り返り

〔成果〕

- ・ 新聞記事を通して、世界で起きている様々な出来事の関係性を発見できた。
- ・ 自分たちの身近な地域の課題が、世界の出来事とつながっていることに気づくことができた。

〔課題〕

- ・ 各テーマ（環境・平和・食料・防災）の新聞記事が多い時期と少ない時期がある

ので、新学期から新聞記事を各テーマに分類して保管しておく良かった。

- ・ 新学期から生徒一人一人に自分の関心のあるテーマを決めさせ、1年間その記事を追い続け、探求していく方がより学習を深められた。

〔生徒の振り返りから〕

- ・ 温暖化が、昆布という食料問題につながり、さらに和食という日本の食文化にも影響を与えることを知り、様々な世界の問題がつながっていることがわかった。
- ・ 温暖化の人間への影響だけしかみていなかったが、自然界全体に関わることであることに気づかされた。

3. 中学校における小学生新聞の活用 ～「知る」新聞活用と「深める」新聞活用～

(1) 活動の概要

〔目的〕

- ・ 中学校での学習内容が、実際の社会ではどのようにおこっているのかを「知る」場面では全国紙を、学習内容を深める場面では小学生新聞を活用し、学習目標に応じて使い分ける。

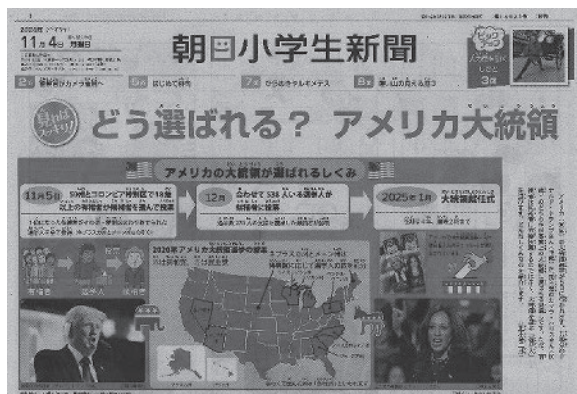
〔手順〕

①学習内容に関連する全国紙で説明する。



産経新聞 2024年11月12日

- ②日本の内閣総理大臣の決め方とアメリカの大統領の決め方を比較するために、小学生新聞を活用して理解を深める。



朝日小学生新聞 2024年11月4日

- ③全国紙で調べた当選者数や政党議席数を、小学生新聞のワークシートの紙面に記入することで内容の意識化を図る。(右写真)

(2) 活動の振り返り

〔成果〕

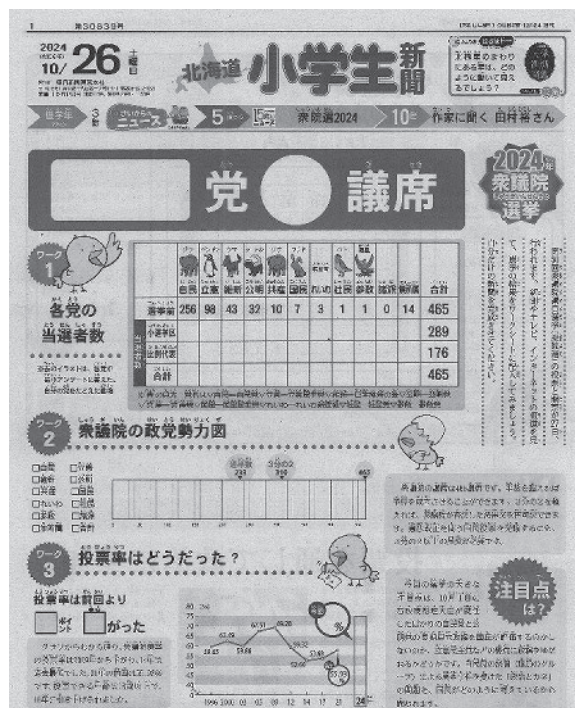
- ・義務教育学校であることから小学生の新聞活用を念頭において、小学生新聞購読を希望した。小学生新聞は図版も多く、分かりやすく解説しているので、中学生が学習内容を定着させたり、深めたりする際の教材としても効果的であった。
- ・授業での学習内容が世の中の出来事とどのようにつながっているか興味をもつことができた。

〔課題〕

- ・新聞の時系列ではなくて、どの単元でどのような新聞記事扱うか年間指導計画の中で位置づけて新聞を活用する方法と、「いま世の中で起こっていること」というタイムリーな教材としての新聞活用方法の2つの方法で活用していった方が良かった。
- ・教師の新聞紹介だけではなく、新聞記事を生徒が自ら選び、主体的に世の中の出来事につながっていける手立てを講じた方が良かった。

〔生徒の振り返りから〕

- ・いま学習している内容に関心がもてるようになった。
- ・7・8年生(中1・2)で勉強した地理や歴史の内容を9年(中3)で新聞を読むことでよくわかった。



総選挙前の紙面(上)がワークシート形式になっており、選挙結果をワークシートに記入することができる。総選挙後、開票結果が掲載された紙面(下)は紙面レイアウトが選挙前の紙面と同じなので見比べやすい。



毎日北海道小学生新聞 2024年10月26日・29日

義務教育学校における発達段階を考えた新聞の活用 ～9年間で社会に参画しようとする子どもたちに～

札幌市立義務教育学校福移学園 教諭 福本 勇太

1. はじめに

本校は、北海道札幌市の東区に位置しており、各学級1学年、全校児童108名の小規模特認校である。また、昨年度から札幌市初の義務教育学校「札幌市立義務教育学校福移学園」として新たなスタートを切った。

2. 児童（生徒）の様子

本校は、義務教育学校で小規模特認校のため、ほぼ変わらぬメンバーで9年間で過ごすことになる。環境が変わらないため安心して学校生活を送れる一方で、ずっと一緒だからこそ集団をよりよくしていこうという意識や社会に参画しようとする意識を高めていくことが難しい実態があった。また、情報収集＝インターネットという意識が強く、全てインターネットで解決しようとする姿も見られた。そこで、新聞を活用することで社会を知り、社会に目を向け、社会に参画しようとする子どもたちに、また、様々な方法を用いて情報を集め、集めた情報を取捨選択して活用できる子どもたちになってもらいたいという思いから、NIE 教育実践指定校として取組をスタートした。昨年度の取組を通して、少しずついろいろな学年で新聞が活用されるようになってきたので、今年度は、1～9年生の発達段階に合わせてどのように活用できるのかを探ることにした。

3. 実践の内容

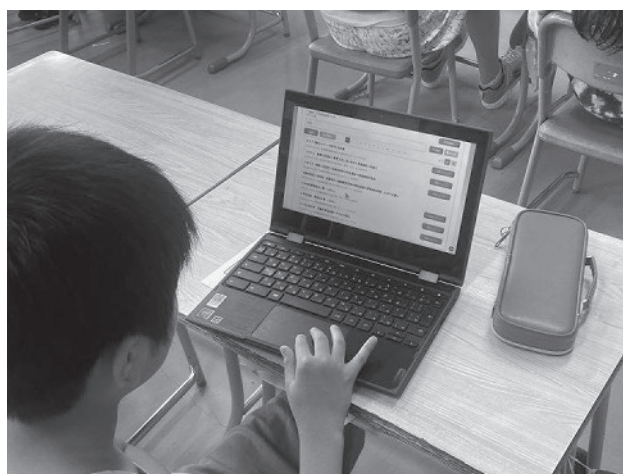
① 5年生社会科「自然条件と人々の暮らし」の実践

5年生の児童は、4年生の時に国語科や社会科、

総合的な学習の時間で新聞を活用していたので、今年度は、「まな bell」を授業の中で活用したいと思い、社会科「自然条件と人々の暮らし」の学習で実践した。

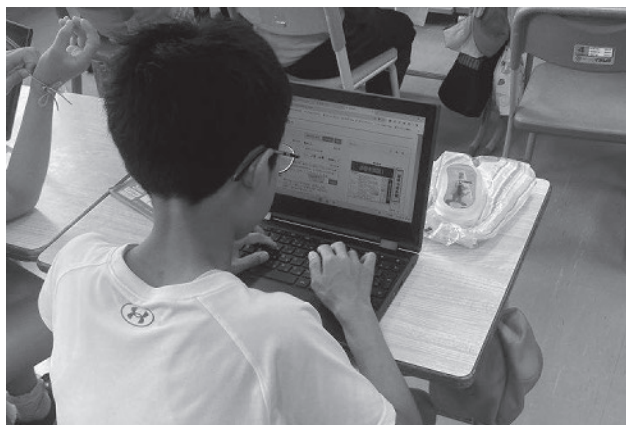
低地の暮らしについて学んだあと、自分たちの地域について調べてみると、実は「福移」も低地であることに気づき、「福移も昔は洪水があったのかな。」

「福移も洪水を克服したってことかな。」「石狩川の工事をしたんじゃないかな。」「もしかして昔は農業もさかんだったのかな。」など、たくさんの疑問が子どもたちから出てきた。資料を読んだり、実際に堤防を見に行ったりして情報を集めると、福移が洪水を克服するためにさまざまな努力や工夫をしてきたことや福移は湿地帯だったことなどが分かってきたが、手元にある資料だけではそれ以上のことが分からなかった。そこで、新聞データベースを使い、福移の湿地について調べてみると、今まで得られなかった情報を得ることができた。新聞は、地域の学習においても非常に役立つことが分かった。



学習の後半は、まな bell の新聞作成機能を活用して分かったこと、考えたことをデジタル新聞にま

とめた。新聞作成機能は、見出しの位置や資料の位置、字数が決まっているので、新聞の内容を考えることに時間を使うことができた。また、自然と新聞に関する知識も身に付いていった。一人一人が自分に合った型を選ぶことができ、書きながら修正することもできるので、新聞作りが苦手な子も抵抗感なく取り組むことができた。



新聞完成後は、互いに新聞を見合っけ気付いたことや感じたことを伝え合う時間をとった。友達との交流を通して、新たな見方や考え方に気付き、自分の学びを見つめ直すことができた。



交流後は、学んだことをもとに「伝えたいことがより伝わる新聞にするにはどうすればいいか。」を考え、新聞の修正を行い、「まなbellで作ろう！新聞コンクール」に応募した。



新聞データベース、新聞作成機能を活用することで、自分たちの地域についてより詳しく調べ、発信することができた。子どもたちが生き生きと学びを進める姿から、新聞と地域学習の親和性の高さを感じた実践となった。

② 3年生総合的な学習の時間「札幌野菜博士になろう」の実践

3年生は、総合的な学習の時間「札幌野菜博士になろう」の学習で新聞作成に取り組んだ。札幌の野菜について、農家の方に話を聞いたり、自分たちで野菜を育てたりして分かったこと、考えたことを札幌市民のみなさんにも知ってもらいたいという思いから、学習したことを新聞にまとめ、「小学生新聞グランプリ」に応募した。

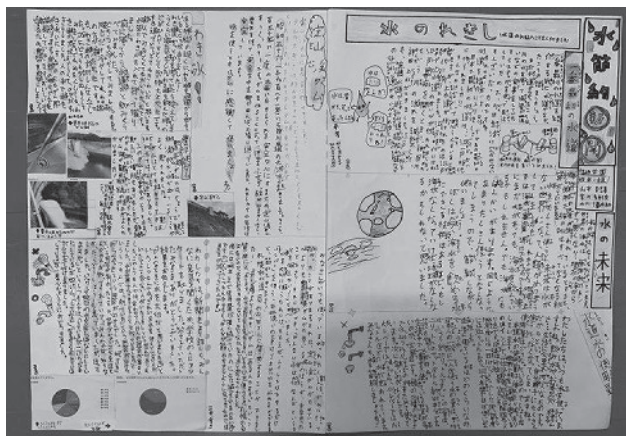


この経験が他の学習にもつながり、社会科で玉ねぎ新聞を作ったり、係活動で新聞を作ったりと、さ

まざまな活動へと広がっていった。

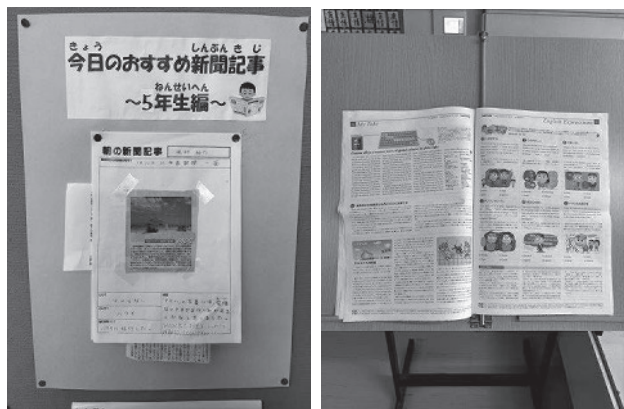
③ 4年生社会科「水はどこから」の実践

4年生は、国語科「新聞を作ろう」の学習で新聞の特徴や書き方を学び、その学びを生かして社会科「水はどこから」の時間にかべ新聞を作成し、「わたしたちのくらしと水 かべ新聞コンテスト」に応募した。



④ 新聞に触れる環境作り

誰もが気軽に新聞に触れることができるように2年前から始めた新聞コーナーの設置、新聞記事を紹介するコーナーの設置、まな bell を開いて今日の一面を読む時間の設定などは、今年度も継続して取り組んだ。



4. 成果と課題

(1) 成果

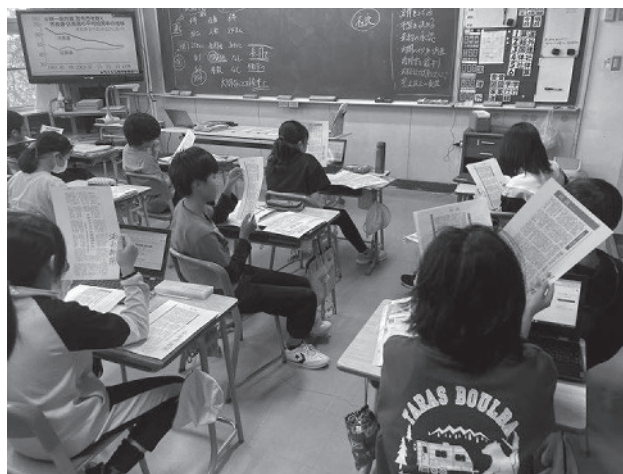
① 日常の中での新聞活用の広がり

学習の中で新聞を活用する機会を増やしたり、いつでも誰でも新聞を手にとって読める環境を作ったりと、新聞に触れる機会を増やしたことで、朝読書の時間、係活動など、日常の中で当たり前のように新聞を活用する姿が見られるようになってきた。



② 新聞を活用する学年の広がり

3年間の取組を通して、新聞の活用が少しずつ学校全体に広がってきたように感じる。日常生活の中での活用だけではなく、国語科や社会科、総合的な学習の時間など、学習の中でも積極的に新聞を活用する学年が増えてきた。また、紙の新聞とデジタルの新聞の両方を活用する学年も増えてきた。



③ さまざまな活動への広がり

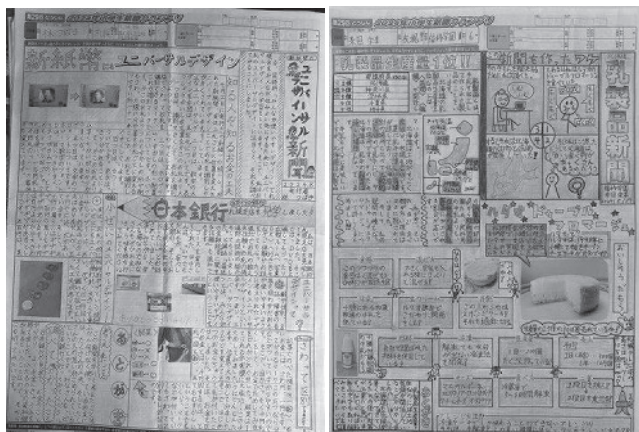
新聞の取組は、係活動や家庭学習にも広がっている。3年生は、後期から「新聞係」が誕生し、まな

bell を活用してデジタル新聞を発行している。また、6年生も係活動でまな bell を活用している。4年生は、家庭学習でまな Bell を活用し、学んだことを新聞形式でまとめる子どもたちが出てきた。新聞が「生活をよりよくする」「学習をよりよくする」ことに繋がった。



④ 社会に参画しようとする意識の高まり

2年生は生活科で、3年生は総合的な学習の時間で、4年生は家庭学習で、5年生は国語科で、6年生は総合的な学習の時間で新聞作成に取り組み、2～6年生の全ての児童が「小学生新聞グランプリ」に応募した。新聞を通して社会に興味をもち、社会を知り、社会について考える機会が増えたことで、学校の中で学びを完結するのではなく、学んだことや考えたことを地域や札幌市の方々にも伝えたいと発信するようになり、子どもたちの視野が学校から社会全体へと広がった。「自分たちにもできることがある」と、自ら社会に参画しようとする意識が高まってきたように感じる。



① 各教科における新聞の活用

昨年度よりも各教科の学習の中で新聞を活用する機会が増えてきたが、どの教科のどの場面で活用するとより効果的かというところまでは考えることができず、各学年の先生に任せっぱなしになってしまった。各教科の学習の中でより効果的に新聞を活用できるようにするために、まずは、各教科で育てたい資質・能力を考えたときに、新聞というツールがどの教科のどの場面で、どう活用できそうかを教員間で共有したい。そして、さまざまな教科で新聞を活用することで、各教科における効果的な新聞活用について探っていききたい。

② 学校全体での取組へと広げていく

3年間取り組んできたことで、間違いなく新聞を活用する取組が広がってきた。しかし、まだ学校全体での取組まで広げることができていない。各学年で新聞を活用できそうなときに活用するという担任任せの取組ではなく、1年生～9年生のどの学年でも新聞を活用できるようにしていきたい。そのために、まずは新聞を活用することでどのような力が身につくかを明確にする。それをもとに、どの学年でどのように新聞を活用していけそうかを考え、教員間で共有する。そうすることで、1～9年生の発達段階に合わせて新聞を活用できるようにし、学校全体での取組へと広げていきたい。

5. おわりに

3年間の取組を通して、新聞が子どもたちにとって身近なものになってきた。新聞は、単なる情報収集の手段の一つではなく、効果的に活用することで地域の学習にも役立ち、さらには学習や生活そのものをよりよくすることができるツールであることを改めて実感した。これからも、子どもたちが新聞を通して様々な力を身に付けられるように、発達段階を考え、義務教育学校だからこそできることに積極的に取り組んでいきたい。

義務教育学校3年目のN I E活動

富良野市立樹海学校 教諭 佐藤 一博

1. はじめに

本校は、富良野市の南東部に位置する広大な自然林を有する東京大学北海道演習林に隣接する東山地区に開設された義務教育学校である。令和4年4月に「樹海小学校」と「樹海中学校」が統合され義務教育学校として開校した。N I E活動においては、旧樹海中学校での実践を基本に5年生から9年生で実施し、今年度は3年目の取組となる。新聞を活用して、情報にじっくり向き合い主体的に読み解く力の向上を目指すこと、また、社会に興味をもち、それをよりよくしていこうとする課題意識や学習意欲を高める活動に努めた。

2. 児童生徒の実態とN I E活動の目的

本校は、前期課程16名、後期課程10名、あわせて26名の小規模校である。義務教育学校であることから1年生から9年生が同じ学び舎で生活とともにし、行事や総合的な学習の時間等では全校児童生徒で活動する機会が多いことが本校の特色でもある。少人数であることで、一人ひとりの学習活動が十分に確保され、授業での発言や発表する機会が多いため、堂々と発表できる力が身についている。

一方で、全国学力・学習状況調査の結果から、「グラフや文章などの複数の情報から自分の考えを表出すること」「理由を問うこと、理由を記述すること」

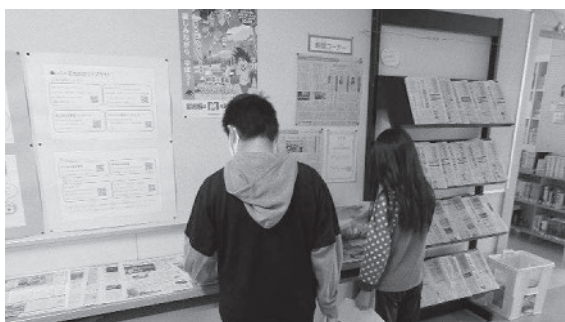
を苦手としていることが明らかになった。そこで研究主題を「自分の考えを表出し、共に深め合い高め合う児童生徒の育成～主体的な学びを目指した指導の工夫を通して～」と設定し、児童生徒の育成に努めている。

主体的に自分の考えを表出するための基本的な能力として、「読むこと」や「根拠となる情報を収集し活用する能力」が必要となる。そのため本校では各教科の授業だけではなく、N I E活動を朝活動に取り入れ、読解力、表現力、情報活用能力の向上を進めている。

児童生徒は、北海道N I E推進協議会から提供していただいている新聞から、見出しを見たり、記事を読んだりしながら、興味や関心がある記事を選択している。初めに選んだ理由（根拠）を記入し、次に記事について感想や意見を記入している。翌週には、自分の選んだ記事と感想を発表している。

このように、相手に自分の考えが伝わるように文章を作成し、自分の考えをわかりやすく発表する力を養っている。

今後も、児童生徒の読解力、表現力、情報活用能力の向上とともに、社会への関心を高め、自分ごととして考えを深める活動として「N I E活動」を継続していきたい。



3. 実践の内容

① 取り組む時間と場所を明確に設定する。

【指導案】

1. ねらい ・新聞を読むことを通じて、時事への関心を高めるとともに、情報を取捨選択する力を伸ばし、子どもの思考力や読解力を養う。
2. 対象学年 ・中等ブロック（5～7年）、高等ブロック（8～9年）
3. 活動日時 ・毎週木曜日の朝の学習時（8：05～8：20）に実施
4. 活動内容 ・新聞記事から興味のある内容についての感想や意見をまとめる。（隔週A）
ワークシート「朝の新聞」にまとめる。→iPadで撮影する。
・前週まとめた「朝の新聞」について発表し、意見を交流する。（隔週B）
発表時間は30秒程度。→発表後、ワークシート掲示。
5. 活動のながれ

	児童生徒の活動	教師の活動	備考
隔週A	①図書室に新聞を取りに行く ・図書室の新聞棚から新聞を選び教室へ ②興味のある記事を選び、感想や意見をまとめる。 ・ワークシート「朝の新聞」に記入する。 ③発表準備・片付け ・発表内容を考える。 ・ワークシートと新聞をiPadで撮影する。 ・新聞を返却する。	①・図書室の新聞棚前が、密集しないよう指導する。 ・一面や、気になる紙面を参考に選ぶよう指導する。 ②・学年の発達段階や個人の興にに合わせて、記事選びや記入方法についてアドバイスする。 ③・発表原稿などのアドバイスを	①新聞は、1人1部を持っていく。 ②ワークシートの枠内に収まるように記入する。 ③発表練習時間の設定はなし。各自で準備する。
隔週B	①発表会 ・発表する。→質問に答える。 ・発表を聞く。→質問する。 ②担任の話を聞く。 ③ワークシートを掲示する。	①発表会 ・質問は、学級の実態に応じて実施する。 ②発表会の講評 ・話し方や取り組み方などについて評価する。 ③まとめ ・きれいに掲示されているか確認し、指導する。	①発表することをねらいとするため、質問は児童生徒の実態に応じて実施。 ②担任以外でも可能。 ③個人ごとにファイリングする。

本校では、「学力向上・目標達成に向けたロードマップ」を作成し、学力向上に向けた実施計画を立てている。そこでは、NIE活動を学力向上の一環として、年間を通して実施している。

取組の推進は本校の組織「学力・体力向上プロジェクト委員会」が担い、児童生徒の現状を踏まえながら、具体的な方策を立てている。毎朝、登校後、朝の会までの15分間を「朝活動」と位置付け、「学力・体力向上」の基礎となる「朝読書」「朝運動」、そして「NIE活動」を設定し、活動している。

【学力向上・目標達成に向けたロードマップ】

学力向上・目標達成に向けたロードマップ		【富良野市立旭南中学校】											
年度	学期	月別											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年度	前期	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）
	後期	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）
2年度	前期	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）
	後期	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）	学力向上委員会 （学級委員会）

② 新聞の選定

NIE活動は、前記の通り毎週木曜日に実施している。限られた時間の中で活動を円滑にするために、児童生徒が手に取りやすい図書室前に新聞棚を設置し、新聞を身近に感じる環境を整えている。

新聞会社別に発行日順に並び、一面記事の取り上げ方の違いや、時事情報等を一目で比較しやすくし、児童生徒が興味のある新聞を選べるようにしている。



③ まとめ作業

NIE活動は、新聞記事から興味のある内容について感想や意見をまとめ、まとめた感想を発表し意見を交換している。本校のNIE活動は、1年を通して実施するため、継続できるよう無理のない取組として実施している。そのため、感想用紙はできる

限り簡素なものとし、二種類の感想用紙から選択して、記述量を調整できるようにしている。

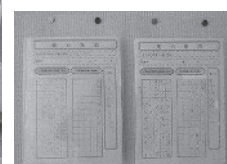


④ 発表

発表は、学年の実態に応じて柔軟に行っている。読んだ新聞をモニターに映し出すことで、記事の内容を共有しながら発表している学級もある。

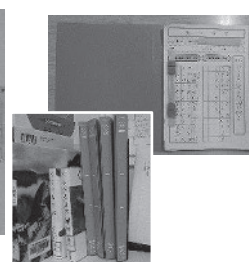
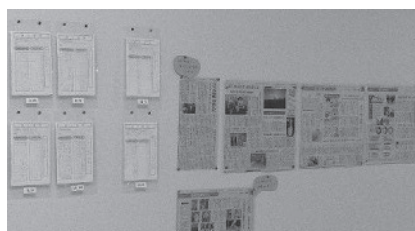
また、本校は小規模校のため、人数の少ない学年では他学年と合同で実施するなど、多様な意見が交流できるよう工夫して進めている。

発表後は、発表内容についての質問があれば意見交換を行い、担任が補足を加えて、より深い理解・学びにつなげている。



⑤ 掲示・記録

発表後は、他の学年のまとめも交流できるよう、廊下に「NIEコーナー」を設置して掲示している。また、過去の自分の記事を読み返せるように、ファイリングしてまとめ、次年度に引き継げるようにしている。



⑥ 朝活動以外での新聞の活用

朝活動での取組だけでなく、国語科の授業や他教科の調べ学習などでも新聞を活用できるように、資料の整備を行っている。特に本校では、学校司書が精力的に環境整備や指導に関わっているため、スムーズな取組を進めることができている。

国語科の授業では、学年に応じた新聞の読み方や活用の仕方について指導を行っている。社説や投書などを参考に意見文を書くときに必要な情報の収集や書き方を学習したり、新聞の構成を学習し自分たちで新聞を書く作業をしたりしている。

他教科においても、テーマに沿った記事を選ぶアドバイスや、過去の新聞記事をスクラップ資料にまとめて提供するなど、学校司書と連携しながら児童生徒の興味に合わせた新聞の活用をしている。

また、地域に根ざした記事を切り取って掲示したり、生徒が毎朝登校したら通るホールに新聞を置いたりすることで、新聞に対する児童生徒の関心を高めている。立ち止まって記事を読む姿や、ページをめくって新聞を読んでいる児童生徒の姿が見られる。



4. 成果と課題

(1) 成果

今年度は、本校がN I E活動に取り組んで3年目を迎えた。これまでの実践で得られた成果から、今年度はこれまでの実践内容を継承しつつ、児童生徒や担任の負担にならず継続していける活動を目指してきた。

令和元年度よりN I E活動に取り組み、本校の研究主題である「自分の考えを表出し、共に深め合い高め合う児童生徒の育成」に大きな成果が得られて

いる。特に、自らの考えを発表する力や理解する力の向上が見られた。また、現在の社会情勢への関心の高まりから、他の学習での相乗効果や進路選択の一助となっている。

活動内容を2週間（まとめる・発表）に分けて行っているため、短時間で活動でき、負担の少ない活動が継続されている。また、記事と感想用紙を画面に映し発表することで、聞いている児童生徒も記事の内容や個人の考えを共有することができている。

さらに朝活動以外の時間にも積極的に新聞を活用したり、N I E活動の成果や新聞の掲示や設置をしたりすることで、児童生徒が新聞を身近に感じるようになっていく。

(2) 課題

新聞を読む時間が限られているため、朝活動の時間だけでは、比較読みをする機会を確保できない。情報を取捨選択し、整理し、批評的に読み取る「情報リテラシー」を身につけるためには、国語科をはじめとした各教科の指導計画の中で、新聞を活用する場面を増やす必要がある。

また、学年の実態に応じて記事の選択や内容の理解に学級担任のサポートが必要な場面もある。さらに、漢字の読み、語句の意味の理解など、記事の内容を理解するために必要な基礎学力の定着が必要な児童生徒がいるため、段階に応じた丁寧な指導や小学生新聞の活用など、個に応じた記事の選定が必要であった。

5. おわりに

本校のN I E活動も、3年目（旧樹海中学校からの取組も含め6年目）となった。この活動を通して、児童生徒は大きな成長を遂げた。社会の出来事に関心をもち、気になった出来事をさらに詳しく調べるなど「主体的に学習に取り組む意欲と学習習慣の確立」が見られた。今後も、「継続できる活動」としてN I E活動に取り組み、教育に新聞を取り入れながら児童生徒の成長を促していきたいと考えている。

実践テーマ 本校における新聞活用

市立札幌大通高等学校 教諭 石山 俊央

1. はじめに

本校は、平成 20 年 4 月に定時制単位制普通科として札幌市中央区に開校した。生徒自らが授業を選択して時間割を作成する「単位制」のカリキュラムを採用する、「普通科」・「定時制」課程の高等学校である。生徒は午前部・午後部・夜間部のいずれかの部に所属する「三部制」を特徴としている。

本校の重点目標の一つに、「社会人として自立していける生徒を育てる」という目標があり、年齢や生い立ちなどさまざまな背景を持つ生徒が学ぶ本校は、すべての生徒が、自立という目標に向かって充実した学校生活を送ることを目指している。札幌市をはじめとする「地域社会」で活動されている人材や団体にも協力していただきながら、教育環境づくりに取り組んでいる。

2. 児童（生徒）の様子

今年度本校の生徒数は 1 年次 291 名、2 年次 301 名、3 年次 285 名、4 年次 271 名、合計 1,148 名である。令和 5 年度の進路状況では大学・短大 34%、専門学校 30%、就職 17%、その他 19%であった。本校独自のアンケート調査によると自宅に「スポーツ新聞以外の新聞」があると答えた生徒は全体の約 24%であった。普段新聞を手にする機会が少なく、情報を収集するメディアの一つとして新聞を手にしてほしいとの思いも NIE 実践指定校に手を挙げた理由の一つである。

3. 実践の内容

（1）総合的な探究の時間での取組

4 年次の総合的な探究の時間では「じぶん新聞」を作成した。

この取り組みでは、新聞記事を実際に手に取り、世界で何が起きているのか、人々がどんな思いや考えを持ちながら生活しているのか、ものごとの真相は何かなどを発見し、世の中と個人をつなぐ新聞の役割について認識を深めるねらいがあった。

授業では、教員の指示がなくとも、生徒はじっと無言で目をこらし集中して記事を読み込む姿が見られた。新聞の種類や特徴、見出しやリード文、本文の読み方や、地域面、スポーツ面、文化面、社説面などの構成を生徒は理解していった。



新聞を読み、記事を選んでいる様子

新聞づくりは次の手順によって作られた。

【手順 1】まずはじっくり新聞を読み込む。
他の生徒に読んでほしい、おすすめの記事を

選び保管する。「これはおもしろいな?」「本当の真実を伝えたい!」「知ってほしい!」と感じた記事をピックアップする。

【手順2】選んだ記事について、自分の考えや感想(自分の視点)、選んだ理由などをメモしておき、コメントを記入する。

【手順3】オリジナルの新聞名(〇〇新聞)を考え、発行者として自分の名前を記入する。

【手順4】全体のデザインや構成を考え調整する。

【手順5】とくに、読んでほしい箇所やキーワードを見つけ、アンダーラインを引き強調する。



じぶん新聞を作成している様子

①じぶん新聞の取組を振り返って

新聞記事から社会情勢を知り、内容を理解した上で自分の意見を持つ。新聞に馴染みの薄い本校の生徒に対し、生徒たちは楽しみながら多くの新聞記事に触れ、どう仲間に思いを伝えるかを工夫しながら表現力を鍛え、多くの人の目にとまる「じぶん新聞」作成に集中していた。

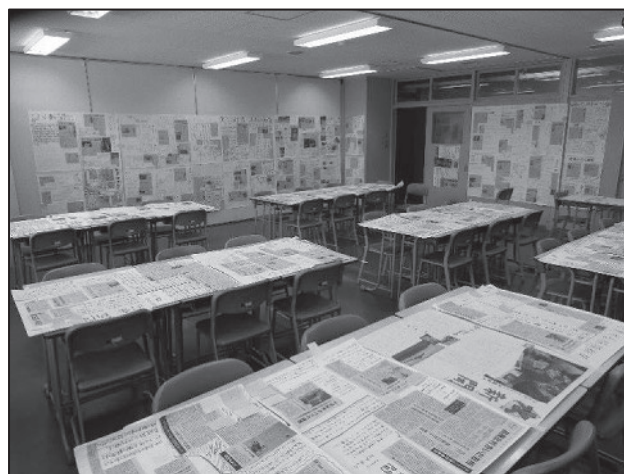


情報共有している様子

②じぶん新聞による生徒の変容

「じぶん新聞」の取り組みは、新聞を読むことによって、時事問題についての自分の考えや思いを他者に伝え交流することで、殻に閉じこもりがちな見方や考え方を広く開放し、社会との繋がり方を考え、自他の主体的な在り方を理解し合うのに適した学習内容であったと思われる。

記事を選び、記事の内容を要約し、それに対する個人の意見をまとめるという取り組みは、ねらいを充分達成することができたと思われる。そもそも新聞に興味を示すのかという懸念もあったものの、生徒は黙々とあるいは近くの生徒・担任の先生と話しながら新聞に目を通していった。



じぶん新聞を教室に掲示した様子

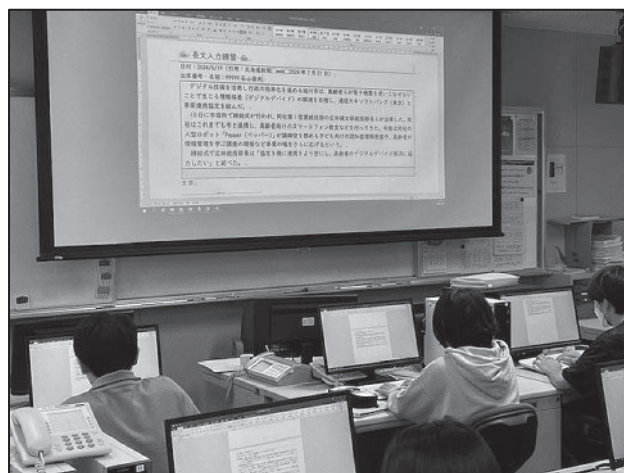
（２）情報Ⅰでの取組

①新聞記事の長文入力について

情報Ⅰでは情報やメディアの特性を踏まえ、情報と情報技術を活用して問題を発見・解決する方法を身につけるために、新聞記事で取り上げられた情報社会や情報に関する記事を読み、ワープロソフトウェアに入力する取り組みをおこなった。本校の授業は１コマ４５分の授業を２コマ続けて行われる。授業開始の１０分程度を活用して入力をしている。例えば、「デジタルデバイド」について学んだあとには、デジタルデバイドを解消するために道内の地方自治体と情報通信業事業者が連携協定を結んだ新聞記事の長文入力を行った。生徒の様子から「デジタルデバイド」という用語が、行政や企業でも使われ、その解消に向けた取り組みが世の中の流れにあることを知り、情報に関する感度、興味・関心が高まり、学ぶ意欲の向上につながっているように思う。

②新聞記事の長文入力を振り返って

授業の中に入力練習を取り入れたきっかけは、過去に情報Ⅰを履修した生徒の中に自分の名前を変換することが上手くできない生徒がいた。また、情報Ⅰではプログラミングの内容が含まれているが、プログラミングを学習する上で、タイピングの技術があまりにも低いとプログラミングの学習にも支障をきたす。このような課題を解決するためにも、長文練習を取り入れた。正しく入力するためには新聞記事を正しく読み取る力が必要である。さらに、教科書で学んだ用語を新聞記事で目にすることにより、学んだ事が社会とどのようにつながり、世の中で活用されているか知る機会となっている。



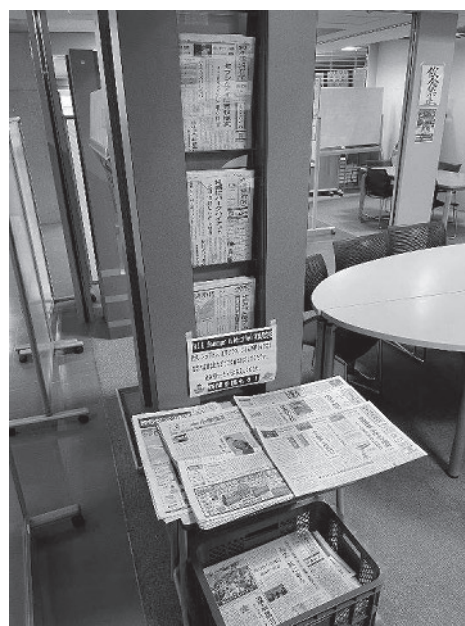
長文入力をしている様子

③新聞記事の長文入力による生徒の変容

生徒はとても興味深く新聞記事を読み、長文を入力している様子が見られる。以前にも新聞記事を授業の中で紹介する機会があったが、その時よりも生徒の関心が高いように見取っている。

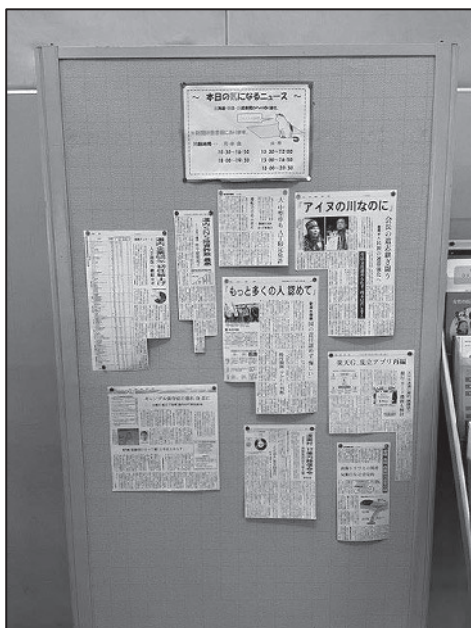
（３）新聞が自由に手に取れる取組

本校では新聞を図書室と進路スペース（他校の進路相談室に該当し、本校では壁のないオープンなスペースとなっている）で自由に新聞を閲覧することができる。



進路スペースに保管している新聞は各教科、国際クラス（渡日帰国生徒が在籍するクラス）、総合的な探究の時間、生徒の進路活動に利用されている。

また、廊下に置かれている掲示板には、毎日その日の高校生に読んでもらいたい記事を切り抜いて掲示している。



4. 成果と課題

（１）成果

各実践内容の成果については、3. 実践内容中に記載させていただいた。2. 生徒の様子にも記載したが、日常の生活の中で新聞を手にする機会が少ない生徒にとって、気軽に新聞を手にとることが出来る環境は望ましい。生徒は日常生活の中でスマートフォンから情報を得ることが多いため、取得している情報が偏っていたり、必ずしも正しい情報ではない可能性もある。新聞から得られる情報は信憑性が高く、幅広い分野について掲載されているため、新聞から情報を得ることは生徒の情報リテラシーの向上につながったと考えている。

（２）課題

課題として3点あげる。

1点目は、新聞を手にする生徒の数を増やしたい。卒業を控え、進路活動が盛んな生徒は新聞を手にする機会が比較的多いが、新聞を手にする機会が多いとは言えない。進路相談スペースに行けば新聞があることを生徒に周知し、新聞が置かれていることの認知度を高めていきたい。

2点目は、新聞を活用する機会を増やすためにも教職員に新聞の活用を進めていきたい。授業や特別活動、進路相談など様々な場面で新聞を活用してもらい、生徒とともに指導する教員側も新聞を活用する場面を増やしていきたい。

5. おわりに

NIE 実践指定校として一年間活動させていただき、夏に開催されたNIE 北海道セミナーや研究協議会、実践報告書により各校の取組を知ることが出来た。特にNIE 北海道セミナーでは、小中高大学と様々な校種の教職員や他県の先生方との情報交換は新鮮で実りの多い時間であった。これらの活動から学んだことを本校のNIEの実践に役立てていきたい。

今後は課題に記載した内容を改善していきけるように実践を進め、より充実した取り組みとしていきたい。



新聞を通して社会と文学と自分を考える

北海道札幌白陵高等学校 教諭 土永 敬子

1. はじめに

本校は、平成8年に10間口の全日制普通科高校として開校し、平成23年に単位制を導入した。その後の生徒数の減少に伴い、今年度より学年制を導入している。現在、1, 2年2間口、3年3間口と当初よりずいぶん規模は縮小した。

このような中、今年度初めてNIE実践校となり、3年次の選択教科において実施した。

2. 生徒の様子

どちらかと言えば人懐っこい、素直な生徒が多い。自分が面白いと思ったこと、できるといったことにはとことん向き合う様子が随所でみられる。

2, 3年は単位制で、自分の好きな科目を選ぶことができる。また、昨今の少子化による生徒減少もあいまって全体に少人数の科目も多い。このため、生徒の学力に見合った授業展開もしやすい。

今回のNIE実践には学校設定科目の「文学講読」で行った。文字を読むのは嫌いではない、どちらかと言えば国語の好きな生徒が選択したようでもあった。ただし、本屋で本を買う、新聞を読むなどは日常ほぼ行わず、情報はもっぱらスマートフォンから得ている、というのが開講初日の生徒の言であった。

3. 実践の内容

① 「新聞切り抜きコンクール」に向けて

社会の動きが文学に及ぼす影響についてを「原爆」や「震災」などを例に理解させ、社会の動きが身の回りにも及ぼすことなどを考えさせた。

その上で社会の動きを知るためのツールの一つとして新聞を位置づけし、前任校でNIE実践を行った経験から、「新聞切り抜きコンクール」への全員参加を当面の目標とした。

まずA3用紙に各自、自分の気になったテーマの新聞切り抜きを作成した。その際、「自分と相手と社会に意義のある内容」になっているかを常に考えて作成するよう指示した。自分の気になったテーマというどうしても独りよがりになりがちで、内容も薄くなってしまう傾向があるので、他者からの視点を意識するよう指導した。



できあがった作品は全員で共有し、それぞれ良いところなどを付箋で作品に貼り本人に還元した。



説明を含めて50分という短時間での作成ではあったが、意外に楽しんでた。



この時、以前の切り抜きではなかなか記事の探せなかった生徒も広告や写真などを使い、楽しく参加していた。

このため、記事に限らず新聞を利用する方法を探ることとした。



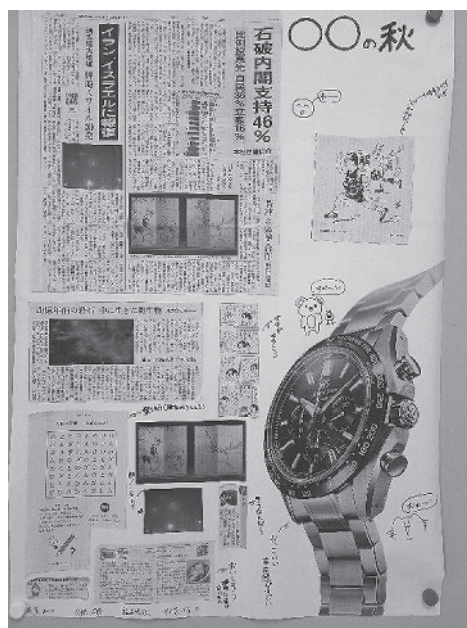
ただ、自分なりのテーマが見つからず苦労する生徒もいた。興味関心のあることは自分なりに持っている生徒ではあるが、それが、新聞記事から見いだすことまで落とし込めなかったようでもあった。

とりあえず、このような実践を経て「新聞切り抜きコンクール」に参加はした。

② まわし読み新聞

8月に北海道新聞社で行われたまわし読み新聞に実践者が参加した。

その経験から、同日の新聞を2部ずつ用意し、まわし読み新聞を授業でも体験させた。



③ 広告を読み解く

記事から興味を引くものを見つけられなかった生徒も広告なら、ということで、よくある広告の構造や売り文句などを読み解くことをまず行った。



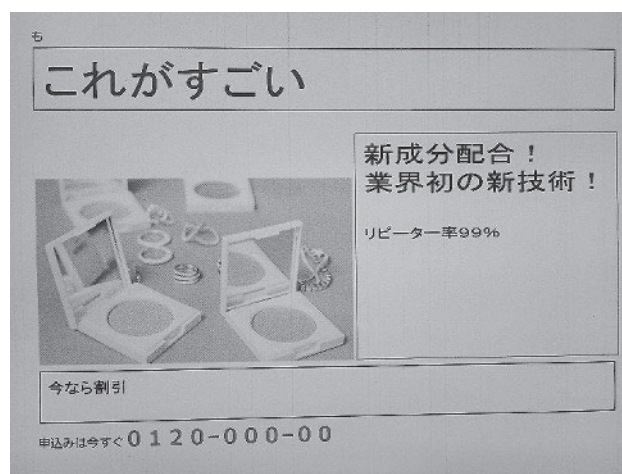
それぞれが違和感を持った広告を、どの点でどのような違和感だったか、を全員が発表し、それぞれ点数をつけた。



次に、そのような広告を実際に作ってみることをした。

基本的構造をテンプレートにして Google

classroom で配布し、それぞれが違和感を持たれる広告を作成した。

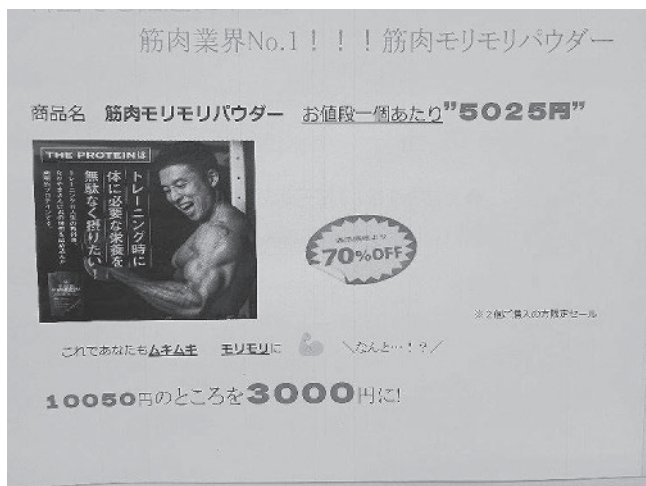


(配布したテンプレート)

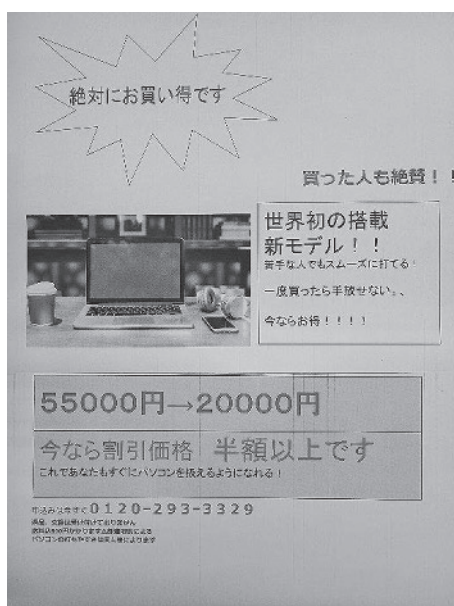
違和感をもつ広告にはいくつかの共通点があり、それらを読み解くには容易で取り組みやすかった。

また、そのような広告の作成も、いろいろな形で見かけているのと googleclassroom 上でテンプレートを利用することで、作成が容易であつたらしく、非常に取り組み状況がよかった。





これらの作品は classroom 上で共有した。
この後、4人1組となって架空の会社を作り、今度は4人で練り上げて広告を作っているところである。



4. 成果と課題

(1) 成果

前任校で1度 NIE 実践の経験はあったが、地域や生徒の違いなどもあり、同じように物事が進まないのを痛感した。

① 考えることの大切さ

広告における違和感は容易に読み解けた。しかしながら、世の中には似たような広告が流布し、多くの人がそれに違和感を抱かない。

生徒の口から何度も「スマホでちょっと検索すればわかること」をわかってほしい。自分の頭でちょっと考えてみる体験、ができたことが大きかった、と思う。

やりながら、「闇バイトのサイトに似てる」という言葉が何度か生徒の間で交わされたことも大きな成果だった。

② 手に取れるところに新聞

授業は特別教室で行うため他の授業を取っている生徒も手に取れるところに新聞があった。授業で NIE を行っていない生徒も新聞の見出しを見て、普段見聞きする情報と結びつけたり、進路をかけた面接を前に情報収集したりする姿があった。

そのような場を提供できたことはこのたび、実践をしたことの副産物としても大きい。

(2) 課題

① 前任校では NIE 実践の前から図書館前に地域のことが載っている新聞記事を展示していた。そのため、現勤務校よりも生徒は新聞を身近に感じていたかもしれない。そのような働きかけが必要かもしれない。

② 自分の興味関心を新聞記事にまで落とし込めなかった生徒もいた。このことについてもう少し試行錯誤しながら、考えていく必要がある。

5. おわりに

今年度、久しぶりに国語の科目も担当することとなり、その一助としての NIE 実践となった。また来年、どの科目を持つことになるかわからないが、そのどれかで続けていきたい。校舎4階の端にある教室だが、そこからでも発信していけるようにしていきたい。

2024年度 NIE 実践報告

新聞を読む、活かす（4年目の取組）

北海道富良野高等学校 教諭 北村 智裕（地理歴史・公民科）
教諭 清野 俊也（国語科、2年次担任）
教諭 浅野 浩（国語科、3年次主任）

1. はじめに

本校は、全校生徒数が364名（1,3年次各4学級、2年次3学級）の創立99年目を迎える全日制普通科単位制高校である。令和7年度に、富良野緑峰高校と統合することになっており、普通科3学級、園芸観光デザイン科1学級、電気情報システム科1学級の合計5学級となる。

今年度、NIE実践4年目となり、1年目からのテーマ「新聞を読む、活かす」を継続、発展させ、さまざまな取組を実践した。

その中で、次の実践を紹介する。

◎朝学習（小論文対策、時事問題対策）

◎「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募

◎地歴公民科：北海道学（学校設定科目）での授業実践

2. 実践の内容

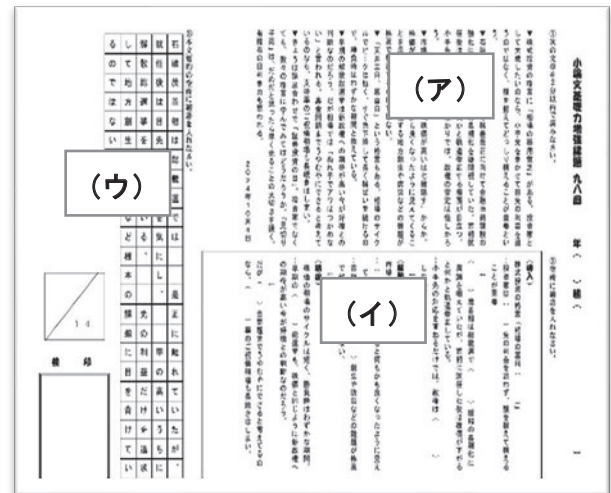
(1) 学校全体での取組

①朝学習（小論文対策、時事問題対策）

《実践者：清野》

本校では、朝のSHRの時間を使って朝学習を実施している。各年次で曜日ごとに実施教科を決めており、その中の一つとして、全年次で新聞を活用した朝学習がある。国語科教諭が担当し、小論文対策や時事問題対策を行っている。

以下、今年度の1,2年次が共通で実施しているワークシートである。



《北海道新聞 2024 年 10 月 4 日「卓上四季」を引用》

(ア)のねらい

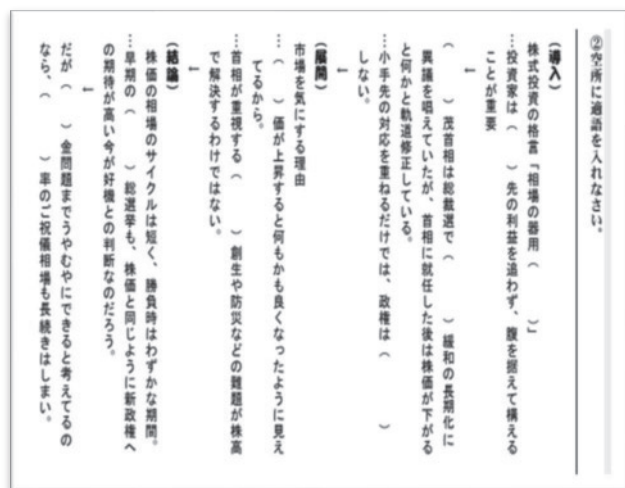


(ア)は今話題になっているニュースを知ることが第一の目的。SNSによる情報収集が主で、新聞を読む習慣を持つ高校生は少ない。それでは面接や小論文に対応できないので、まずは自分に興味のない話題でも、せめて概

要を知ることが大切と考える。毎週ニュースを選択して作るのは手間がかかるが、一週間に一回でも時事的な問題を活字で読ませたい。

第二の目的としては、手早く読む力を身につけること。年々、活字で文章を読むスピードが下がっており、小論文や入試問題でも、そもそも問題文を読むのが遅い。2分以内で概要を読み取らせることを繰り返すことで、国語が苦手な生徒も明らかに作業は早くなっている。

(イ)のねらい



(イ)は小論文における「序論」「本論」「結論」を可視化して、生徒に意識させることを目的としている。5分間の時間制限で文章を読むのが2分間以内のため、生徒が(イ)(ウ)を記入する時間は実質3分間である。慣れてくると、本論や結論が、課題文中のどの場所に位置することが多いか、生徒も理解し、空所に埋める語句が早く見つかるようになる。単純だが、この作業の積み重ねが小論文を構成するための基礎であると考ええる。

(ウ)のねらい

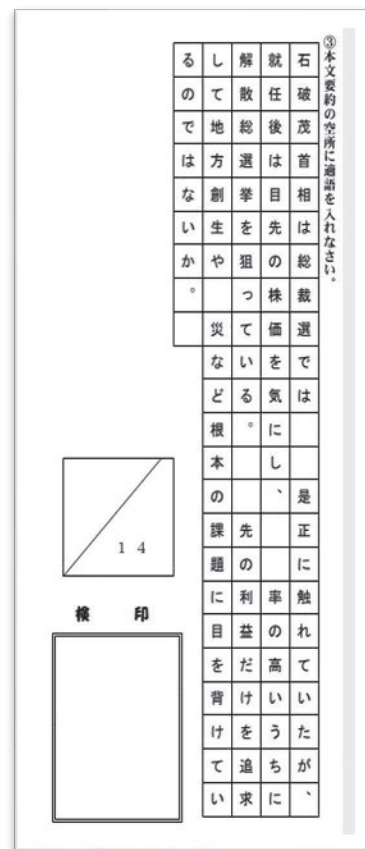
(ウ)については小論文の問題で頻出する「本文を100字程度で要約する問題」を模し

たものである。本来ならば実際に生徒達に100字要約に取り組ませたいので、小論文を個人添削する時には、(ウ)の部分空白にしたプリントを用いて生徒に取り組ませることもある。ただし、本校では朝学習として生徒全体がこのプリントに取り組むの

で、あらかじめこちらで要約した文章で穴埋めさせている。(イ)と(ウ)でほとんど内容は変わらないが、(イ)が出来ても、(ウ)まで完全正答出来ない生徒が意外という。同じ文章を(イ)と(ウ)に分解し、伝えたい内容が同じものであることを理解させ、短時間でそれを探し出す力を育成するために(イ)と(ウ)は両方必要だと考える。

【今後の課題】

(ウ)でも述べたが、本来は最後の100字要約は生徒に取り組ませたい。また、こちらで一方向的に問題に取り組ませるだけでなく、生徒が同じ形で問題を作成し、生徒同士で解き合わせる機会を設ければ、文章のどの部分を削り、どの部分を残しておくのか体得でき、小論文の基礎力は大きく伸長すると考える。もちろん、朝学習の5分間ではそこまで展開できないので、今後は「現代の国語」や「論理国語」などで、段階的な導入をはかりたい。



(1) 学校全体での取組

②「第 15 回いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）応募 《実践者 浅野、清野、北村》

5 年目の取組となった今年度は、全校生徒を対象にして夏休みの課題とした。初年度は、1 年次だけの取組だったが、昨年度は 1, 2 年次と 3 年次の一部生徒で取り組み、今年度は学校全体で取り組むことができ、全校生徒で応募した。

このコンクールでは、自分の興味・関心を持った新聞記事を読み、感想・意見などを書く。さらに、周囲の人に同じ記事を読んでもらい、意見を聞き、より深く考える機会を得ることができる。

次年度以降も、このコンクールを通して、学校全体で「主体的・対話的で深い学び」を実践していきたい。



☆今回のコンクールで、1 年次生の 1 名が「全国奨励賞」を受賞した。

『病と闘い 希望の音色 クラリネットとピアノ 札幌の二田さん』（北海道新聞 2024 年 8 月 13 日付）の記事を読み、兄と話し合い、自分の考えをまとめた。

また、全校レベルでの取組が評価され、2 年連続の全国優秀学校賞を受賞した。

(2) 北海道学(学校設定科目)での取組

《実践者 北村》

北海道学は、地歴公民科の学校設定科目である。3 年次対象の選択科目で、毎年 40 名程度の履修者がいる。履修者の進路希望は、公務員や就職、専門学校進学などで、多くの生徒が北海道(近隣市町村)に残る生徒である。

この授業のねらいの一つとして、「北海道(近隣市町村)を知り、将来、自分が住む地域

の諸課題を解決する力の育成」がある。その力の育成をするためにも新聞は有効な一つのツールだと考える。

新聞を活用した授業のおおまかな流れは次のとおりである。

“新聞授業”の流れ

確認：時事問題（特に地域の問題）
⇒知る：新聞から“地域の課題”を提示
⇒学ぶ：内容理解、調べる
⇒考える：作問する《主》
⇒振り返る：考查で既習の知識の確認《知》
⇒思考判断：考查で初見の新聞記事から出題
《思/判》
※《知》⇒知識・技能、《思/判》⇒思考・判断・表現
《主》⇒主体的に学習に取り組む態度

以下は、今年度 3 回実施した定期考查までの授業内容である。

I 前期中間考查(6 月上旬)までの授業

①「上川管内の市町村」を知る。

☆北海道新聞デジタル版(地域:旭川上川)で情報を収集し、時事的なニュースを知り、地域の現状や課題を把握。

②「自分の住んでいる町」を知る。

☆各市町村の「広報誌(4 月号)」を活用する。年度初めの広報誌には、各市町村の「新年度予算概要」、「まちづくり」が掲載されている。

③「富良野の観光」を知る、考える。

☆毎年 5 月に、北海道新聞上川版に富良野市における前年の観光客数の記事が出る。地元の基幹産業である観光の現状を知り、課題を把握し、解決策を考える。



《北海道新聞 2024 年 5 月 29 日》

④ 考查で①～③に関する出題をする。

II 前期期末考査(9月上旬)までの授業

①「空き不動産活用コンテスト(明海大学不動産学部主催)」応募 ※取組1年目

☆空き不動産に関する新聞記事を参考に、各自のアイデアをまとめ、応募する。



《北海道新聞 2024年6月22日》

②「北海道遺産」について学ぶ。

☆興味・関心をもったものについてレポートを作成し、発表する。

③「ふらの百景(北海道新聞富良野版)」への応募、掲載 ※取組2年目

☆北海道新聞富良野版に「ふらの百景」が連載されている。(2023年8月から)

☆「富良野市博物館」と「半農半画家のイマイカツミさん(本校の美術講師)」が、歴史の跡や人々の営みを水彩画で紹介している。

☆市民が考える名所「ふらの百景」を募集しており、これに応募するための授業を行う。

☆授業の展開

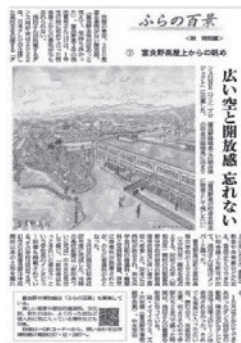
- ・1 時間目⇒新聞連載を読み、歴史や文化、自然や環境等を理解する。
- ・2 時間目⇒各自の「ふらの百景」を選び、歴史や文化、自然環境等を調べる。
- ・3 時間目⇒新聞連載記事を参考に、新聞記事風にレポートを作成。

☆生徒が応募した「ふらの百景」の中からいくつかが採用となり、北海道新聞富良野支局の記者から取材を受けた後、新聞に掲載される。

☆今年度は、「ワインの泉(富良野駅前の噴水)」、「ニングルテラス」、「富良野高

校屋上からの眺め」が本校生徒の“推し”として、ふらの百景〈秋 特別編〉に掲載された。

④ 考査で①～③に関する出題をする。



《北海道新聞 2024年10月8日》

III 後期中間考査(11月下旬)までの授業

①「北海道新聞 新聞切り抜き作品コンテスト」応募 ※取組6年目

☆今年度は、「自然災害と防災」をテーマとした1名が佳作に選出された。



②世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」を知る。

☆世界遺産登録当時の新聞記事を活用

③「北海道総合計画」出前講座(北海道総合政策部主催) ※取組2年目

☆一年間の授業のまとめとなる授業。

☆はじめに「北海道総合計画」について講義を受け、その後「北海道をよくするために取り組むべきこと」についてグループワークを行う。

④ 考査で①～③に関する出題をする。

3. まとめ

NIE 実践校としての4年目は、学校全体での取組をいくつか実施することができた。次年度以降も、生徒の「生きる力」を育むための一つとして新聞を活用し、「新聞を読む、活かす」を実践、継続していきます。

「新聞を活用した学びの実践」

～朝のSHRでの新聞記事の活用と修学旅行における「平和学習」に向けての取り組み～
北海道科学大学高等学校 教頭 山下 卓

1. はじめに

本校は系列に北海道科学大学（工学部・保健医療学部・薬学部・未来デザイン学部）を有する私立高校である。2年前の2023年4月から大学所在地である手稲前田キャンパスへ移転し、大学と同じキャンパスの強みを活かし、日常的に大学教育や大学生に出会うことができる「高大大体教育」がスタートした。2年目の今年から、系列校推薦で系列大学に進学する生徒は3年後期で大学の授業を先取りする「コンカレントプログラム」がスタートした

今年度はNIE実践校5年目となり、昨年度に引き続き、全学年の朝のSHRにおける新聞活用を実践した。また、2年生の修学旅行前の平和学習において、平和講演の他に、約1ヶ月に渡り、各種新聞を活用し、戦争に関する記事を配信し、感想や率直な気持ち、思いをレポートにまとめ、事前指導として活用した。今回の報告では全学年の朝のSHRにおける新聞活用の実践と2年生の平和学習における新聞の活用実践を紹介する。

2. 朝のSHRにおける新聞活用実践

※生徒は全員、学校指定 iPad 保有

(1) 内容

朝の授業前の時間（8:30～8:45）に教員が選んだ新聞記事を生徒に配信している。朝のスタートに際し、新聞記事に触れることにより、落ち着いた雰囲気の中で1時間目に入れることも魅力である。本校では2年次に1年間を通じた探

究活動を行っており、その探究テーマのヒントや手助けになる記事もセレクトしている。

生徒の iPad に毎朝配信



(2) 目的

主な目的は①読む力の向上 ②新聞を通し世の中の動きについて知り、様々な立場からの物の見方について考える。③1年間を通して行っている探究活動のヒントを見つける。この3点である。また、生徒によっては、何気ない記事をきっかけに、更にその記事を掘り下げて、探究活動に還元したり、進路選択のきっかけになった記事に出会ったりという様々なプラスの面が見られている。

(3) 生徒の様子・効果など

入学後から継続的にこの取り組みを始めているが「新聞を読む」ことに多くの生徒が慣れ、学校で新聞記事を読むことがあたり前となっ

ている生徒が増えている。また、(2)でも触れているが、記事をきっかけに単純に「知らないことを知ることができた」から一歩踏み込み、「このニュースの背景を知りたい」「この出来事の将来への影響を考えたい」というレベルで新聞記事を読むことができる生徒も出てきている。学校が読むことを押し付けるのではなく、新聞記事に触れる「時間」や「場」を提供することにより、自然と読むことがあたり前になり、この場だけの機会に限らず、自宅等でも興味を持って新聞記事に注目してほしいと考えている。今後も、情報を入手する媒体として、真偽不明なインターネットやSNSからの情報だけに頼るのではなく、新聞を含めた様々な媒体から情報を入手し、正しく知り、正しい判断につなげていくことが重要だと考える。

(朝新聞一例)

以下のような新聞切り抜きを担当者が毎日2〜3枚程度配信している。生徒は印象に残った記事を選び、感想やコメントを毎日提出している。担任は簡単なコメントや感想を個別に返信している。

※アプリ(ロイロノート)で配信

1 学年事例①

北海道新聞 2024年8月23日

(配信切り抜き一部抜粋)



生徒からの感想・コメント (一部抜粋)

「美容整形や医療の施術を受ける人が増加する一方でトラブルが増加しているというニュースをよく見ます。美容医療などは施術を受けてからではないと効果がわからないですし、専門の人にしかわからない技術があると思います。嘘の情報などに安易に流されず、トラブルに巻き込まれないように信頼できる情報源からしっかりと調べる必要があると思いました。」

「道内の宿泊者数が伸び、コロナの影響から脱却したことは何となくわかっていましたが、観光客の増えすぎによる新たな観光公害(オーバーツーリズム)の問題が今後心配です。」

1 学年事例②

北海道新聞 2024年12月10日

(配信切り抜き一部抜粋)



生徒からの感想・コメント (一部抜粋)

「物の値段が上がっており、生活に非常にお金がかかる中で、学校給食の無償化や教育費の無償化など、私たちが親になるときまでにはしっかりと実現して欲しい。」

「長期ヤングケアラーの精神不調リスクが高まるという問題は中学時代の身近な友人の事を思い出した。大人たちが早く気づき、そのような人たちの負担が少しでも減るような支援を早急に実現してもらいたい。」

3. 2年生の平和学習における新聞の活用実践

2年生は10月28日～11月1日の4泊5日の日程で修学旅行を実施している。関西では自主研修、沖縄では平和学習に取り組んでおり、ひめゆり平和祈念資料館や旧海軍司令部壕などを見学している。今年度は沖縄の平和学習の事前学習として、9月中旬から2週間、戦争に関する記事をピックアップし配信し、各自でコラムを書き、意見交換を行うという取り組みを実施した。以下に配信した記事と生徒のコラムを紹介する。

読売新聞 2024年8月25日

→ 2024年9月18日に配信



生徒のコラム（一部抜粋）

「年月が経っても遺族の悲しみや痛みは変わらない。戦争の残酷さを風化させずにしっかりと語り継いでいくべきだと思う。このような悲劇を繰り返さないために、今世界で起きてい

ることを知るために。」

「戦争のせいで自分の趣味や子どもの成長を見届ける時間が奪われ、大切な人の死も戦死公報で伝えられる世の中は絶対にあってはならない。昔、日本の平和を願って戦い、死んだ人のためにも、二度と戦争を起こしてはいけない。」

毎日新聞 2024年8月16日

→ 2024年9月25日に配信



生徒のコラム（一部抜粋）

「今までも原爆や特攻など戦争についての様々な被害や惨状について聞いたことはあったが、それはほんの一部分であり、実際には様々な知られていない数多くの悲劇があることがわかった。」

「マラリア感染が予想される中で、強制的に移動させられるほど大変な状況であった戦争の悲惨さと、その状況の中での懸命に生きようとした当時の人たちの強さに感動した。」

読売新聞 2024 年 8 月 16 日

→ 2024 年 9 月 26 日に配信



生徒のコラム（一部抜粋）

「父の記憶がなく、母親もいなくなってしまった石橋さんの苦しさに胸が痛くなった。しかし、父が残した手紙を支えに幸せな人生を歩んだことが素敵だと思った。どんなものであっても、想いのこもった何かは人の支えになる事を知った。」

「今はいつでも簡単にスマホでやりとりができるが戦争のせいで、人生が狂わされ、様々な悲惨な経験をした石橋さんが手紙を支えに人生を歩み、『今が一番幸せ』と言えることに感動した。」

配信した新聞記事に繋がる、平和学習講演を実施（2024 年 9 月 27 日）



4 終わりに

本校では主体的な学びに積極的に取り組んでおり、ICT や新聞など様々なツールを活用することにより、様々な学びの可能性があることを感じることができた。今後も学校として、生徒の主体的な学びを促す活動の場づくりを継続的・計画的に行っていきたい。また、毎日の朝新聞の配信を通し、真偽不明な様々な情報が溢れる SNS 時代において、これから社会人として巣立つ高校生においては、正しい情報から正しい行動につなげる入り口として「新聞」は欠かせないものであることを実感した。今後も生徒の成長を促す大切なツールとして、新聞を活用した教育活動を模索していきたい。

「日常的・継続的」な新聞活用の取組の実践

北海道札幌手稲高等学校 教諭 嶋崎俊樹（倉部英利子 福田 浩）

1 はじめに

本校は1～3年次各8学級（計24学級）、全校生徒946名の全日制普通科単位制高校である。本校のほとんどの生徒は大学進学を目指している。そのため、進路実現のための講習が放課後や休日、長期休業中に実施されている。また、キャリア教育にも力を入れており、1年次では60を超える事業所へ訪問するインターンシップミッション、2年次では各大学から講師を招き10を超える講座を4週にわたりひらく「学び探究ゼミ」が行われている。さらに、部活動も活発で加入率は8割を超え、これまでに全国大会出場の経験がある部活動も数多くある。このように授業以外での活動も盛んな学校の中で、生徒は忙しくも充実した毎日を過ごしている。

2 実践の経緯

本校は10年前からNIEの実践指定を受け、当初は「情報」担当の教諭が単独で新聞を活用した授業実践を行っていた。実践指定2年目からは社会科（本校では地理歴史科と公民科が社会科として教科を運営）も加わり、社会科では9年目の取り組みとなる。

新聞を活用するねらいとしては、①新聞に触れる機会を提供して社会の出来事への関心を高め、これから生きてく社会に対するイメージを持たせること、②新聞記事を題材とした言語活動を通して、資料活用の技能や思考力・判断力・表現力を身につけさせることである。

このねらいを実現する上で最も心がけていることは、今回の実践報告の表題にもなっている「日常的・継続的」な新聞活用という視点で

ある。本校ではこれを可能とするために、日ごろからできるだけ時間や労力をかけずに、無理せず実施できる内容で実践を行っている。従って、報告する実践は例年とほぼ同じ内容であり、取組としては不十分な点もあろうかと思うが、小さな変化もあるため、その点を中心に記載したい。

3 実践の概要

（１）「3分間スピーチ」

「3分間スピーチ」は、①あらかじめ生徒全員にワークシートを配布しておく、②生徒は各自、気になった新聞記事を一つ選びワークシートの各項目に記入する、③ワークシートのウラ面に選んだ新聞記事を切り抜いて貼る、④クラスメートの前で発表する、という手順で行われている。

ワークシートに記入する内容は「新聞記事のテーマ（見出し）」「記事の要約」「読んで理解できたこと」「読んでわからない言葉」（調べた結果を書き込む）「自分の意見、感想」であり、生徒はこれらを、読み上げる形で発表する。

取り上げる記事は政治、経済、社会問題から選ぶように伝え、芸能やスポーツの記事は避けることとしている。新聞を購読していない家庭の場合にはコンビニエンスストアなどで買うか、担当教師の下、学校で購入している新聞、あるいはインターネットで配信される記事などを利用することとしている。インターネットの記事を利用する場合は新聞社や通信社で発信している信用度の高いものを利用するよう指導している。

授業者は、生徒の発表が終わると簡単な解説

やコメントを加える。授業者のコメントを含めて授業のはじめの10分程度を使い、その後、通常の授業に入っていく。

本校の教育課程では1年次において公民科の授業が無いため、今年度は2年次の必履修科目「公共」において実践している。

[illegible]

最近では新聞を購読している家庭が減り、新聞を手にする機会が少なくなった。しかし、そのために、むしろ質の高い記事を選ぶようになり、発表までの取り組みが丁寧になったように思われる。言うまでも無く、「3分間スピーチ」はスピーチやワークシートの記入を通して探究的な活動が行われることで、読解力や表現力を養うことができる。さらに、他の生徒や教師の意見を聞くことで思考を深めることができ、本校の新聞活用を中心となる大切な取り組みであると言える。

（２）「新聞コンクール」への応募

1年次での新聞活用の機会を得るため、日本新聞協会主催の「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募を行っている。地理歴史科の授業の中で、今年度も1年次の夏休みの宿題として参加させた。1年次の生徒全員による応募が4年目となり、今年も日本新聞協会から奨励賞を受賞する生徒がおり、本校としても学校奨励賞をいただいた。日常の学習の取り組みが外部に評価されることは、生徒にとって学習への大きな励みとなっている。

「新聞コンクール」の特徴は、家族や友達に記事の意見を聞いて記入する欄があることである。それは、家族や友人とのコミュニケーションの場面や、新聞に触れる機会を増やすことができるだけでなく、多様な意見を知り、思考を多面的に広げる機会をもたらしている。家族や友達という親しい相手が議論をする相手であり、記載する文章量もさほど多くないことから、生徒には取り組みやすい企画である。



(3) 授業実践

今年度は、2年次「公共」において、倉部教諭による新聞を活用した授業が行われた。

授業では、目標を「新聞記事の情報を適切に読み取り、得られた情報をもとに他者と協働しながら、社会的な見方・考え方を働かせ、実際の法律について考察する力を身につける」とした。そして、「実際の法律に幸福・正義・公正の視点はどのように反映されているだろうか」という問いを設定し、グループワーク、端末を利用した調べ学習、ワークシート活用などの方

法を用いて実践された。

1 時間目は実際に成立した法律について、一人 1 紙を担当して利点や課題を調べ、それらをグループ内において発表し、2 時間目は、それぞれの立場から、その法律についてどう考えるか話し合った。3 時間目は学習した「幸福」「正義」「公正」の視点が法律にどう反映されているかをまとめ、各グループが発表した。

生徒の感想に、「新聞の特徴である情報を皆に伝えるということが、各記事によって方法が異なっており、情報を見比べる事は、より確かな情報を手に入れるためには大切なことであるように感じました。また、情報を比較しグループで話し合うことで、話題に対しての考えが最初に比べてとても深まり楽しかったです。」という記述があり、今回の授業の成果が表現されている。

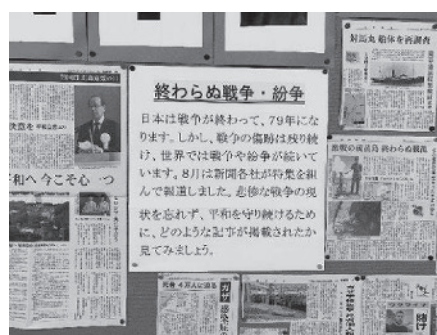
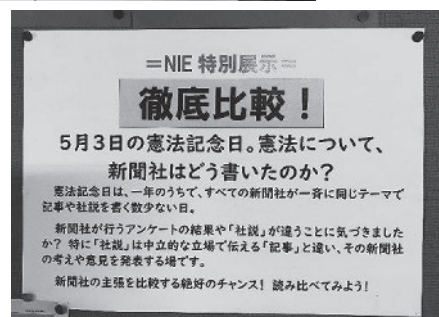


(4) 「NIEコーナー」

新聞そのものに触れる機会を日常的に提供するため、例年どおり 1 年次の階の水飲み場に「NIEコーナー」と題して配達された新聞の閲覧スペースを設けた。毎日、複数紙の記事を比較できるように、必ず月 2 紙購読し、掲示にも「〇〇新聞と□□新聞 二紙読み比べ」とい

う言葉を入れて情報を比較検討するリテラシーを意識させている。

今年度も引き続き憲法記念日の社説や世論調査を比較する特別展示も実施した。また、終戦の日には、新聞各社の特集とともに現在でも続く戦争や紛争の実際を取材した記事を掲示し、日本の戦争に対する意識と世界の現実を対比できるように工夫した。



(5) その他の新聞の活用

国語科が 1・2 年次の朝学習の一環として、社説やコラムを両面に印刷したプリントを作成し、生徒に配布している。読解力が一層重視される大学受験においてもその力が試されることが多く、授業に部分的に新聞を取り入れる場面も見られる。

4 成果と課題

(1) 日常的・継続的な活動と授業実践

本校公民科でのN I Eの実践は、年間を通して無理なく取り組める内容のものを意識して実施してきた。新教育課程になり、本校の教育課程表の関係上、社会科の1科目を数人で担当することが多くなったが、「3分間スピーチ」「新聞コンクール」については、教員間の合意と協力により継続して実施することができた。

また、今年度の授業実践は、新聞活用を中心にした主体的で対話的な学びの素晴らしい実践であり、前述の生徒の感想にあるように、本校の新聞活用のねらいが十分に達成されたと思われる。

(2) 課題

①社会参加のための継続的な新聞活用

「3分間スピーチ」や「新聞コンクール」などは、一時的な機会に過ぎない。「N I Eコーナー」に毎日その日の新聞を並べているが、残念ながら開かれた形跡のない日もある。

新聞の持つ情報の信頼性や多様性、継続性を利用して、まもなく成人する高校生に、新聞を通して幅広く社会に関心を持ち続け、社会を形成する個人として、いかに情報を得続けようとする意志を定着させるかがこれからも課題となる。

②メディア情報リテラシー教育のあり方

S N Sの発達による情報の氾濫や、むきだしの個人の意見表出が世論の形成や人間関係の構築に大きな影響を及ぼし、市民社会のあり方に変革をもたらしている。これらは、身近な国内の選挙結果への影響や、国際紛争や戦争にも関係していることは、今日明らかである。

これからの社会を形成する生徒たちに、単なる情報獲得技術やモラルとしての情報教育だけではなく、情報の信頼性の見極めや、どのように情報を活用して自身の生活や社会を向上させていくかを、具体的に教育することが重要となる。そのために、既存のメディアの一つで

ある新聞の利点をいかに活用していくかが、今後の課題といえる。

5 おわりに

本校は今年度、創立50年目を迎え、盛大な式典が行われた。式典では多くの卒業生や関係者が参加し、祝辞が述べられた。生徒たちはあらためて学校の歴史の重みをかみしめるとともに、校訓の「継続は力なり」の伝統を受け継ぎ、「文武両道」の学校生活に邁進し、これから進む実社会の現実に立ち向かう意識を新たにした。



本校におけるN I Eの実践は、日常的・継続的な取り組みであることを基本としてきた。これからも課題に取り組んで工夫を続けていきたいが、その際にも本校教員や生徒の現状をよく理解して、どの教員や生徒にとっても継続できる実践であることが重要だと考える。「継続は力なり」の言葉通り、新聞活用のねらいや目的を振り返り、持続可能で生徒にも有効な活用方法を今後も探していきたい。

新聞記事を利用した授業づくり

星槎国際高等学校帯広学習センター 教諭 高橋知行

1. はじめに

本校は、広域通信制、単位制の普通科高等学校であり、帯広学習センターは全国30か所の学習拠点の1つとして2010年に帯広経済センタービル内に開設、2016年に現在地に移転した。

今年度、選択授業の科学（1、2、3年生混成）の時間で「新聞記事を利用した学習」に取り組んだ。



2. 生徒の様子

生徒は帯広市内のほか十勝管内町村や日高、釧根地域、道外からも入学し、約300名が在籍している。

登校型の通信制として「街全体が学びの場」を掲げて、生徒たちは帯広神社祭や重要文化財施設の活用、街おこし活動、各種イベントなど、地域のさまざまな場面にそれぞれの関心や特技を活かして参加している。

また、生徒の興味関心に応じたカリキュラムとして選択授業（ゼミ）を設定しており、本実践を行ったのは「科学」を選択した生徒を対象に、幅広い学習を行っているクラスである。

3. 実践の内容

（1）学習のテーマ AIとどう向き合うか

（2）学習のねらい ノーベル賞に関する新聞記事を手がかりに、科学研究におけるAIの活用や社会生活との関わりを考える。

（3）学習時間 50分、2コマ

1時限目 ①新聞記事を読んでそれぞれの研究におけるAIを考える。

2時限目 ①SFに描かれたAI、②AIと

ヒトの関わり。

（4）学習展開 ①ノーベル物理学賞、化学賞両部門でAIに関連する研究が受賞したが、どのような研究が行われ、評価されたのかを調べる。

②今後の科学研究ではAIがどのように活用されるかを考える。

③SF小説や映画には知能をもつロボットや人工頭脳などが登場する作品がある。多くの場合、感情はないものと描かれているが、将来、AIの能力が向上して広く利用されるようになると社会にはどのような影響があるか考える。

4. 成果と課題

（1）成果 機械学習、深層学習の歴史を調べてスマートフォンを使った検索など、日常、身近で何気なく使っている科学技術の流れを概観することができた。

ChatGPTなど身近にAIを利用できる環境にある生徒たちにとって、SFで描かれた人工知能と比較してみることで、利便性を謳っているAIの二面性を考える機会となった。

生徒たちからは、

- ・A Iのロボットが感情をもつようになると「不死の存在」と寿命のある人間との関係が難しいのではないかな。
- ・A Iが自分で判断するようになると人間の意思とは違う行動（操作）をする可能性があるのではないかな。
- ・人間に寿命があることを考えると最終的に

はA Iが社会を動かすようになるのではないかな。それが人間にとっていいかどうかかわからない。

- ・研究には便利かもしれないが、それが生活の場まで出てくるとちょっと不安。
- ・A Iはツールなのでそれなりに使えばいい。などの感想が寄せられた。



日本経済新聞 2024 年 10 月 9 日

ノーベル賞の対象となったA Iの基盤研究（物理学）と応用研究（化学）に関する記事を入力に、それぞれの研究概要を調べ、現状、今後の展望を考えてみることで日常的に利用している情報技術の背景、利便性と危険性などを身近なものとして捉えるきっかけになった。

（2）課題 ノーベル賞の記事のほかいくつかのS F作品に登場した知能をもつ（A I）ロボットを取り上げてA Iと科学技術の関

わりの現状と将来を考える時間として設定したが、2コマでは消化不良の感があった。

やはりノーベル賞の内容について調べた後、複雑な化合物の構造解析や構造予測、新薬開発の方法などの調べ学習の時間を多めにとったほうが現状の理解がもっとできたと考えられる。

また、科学技術の二面性は正解のない問いかけとも言え、折に触れて自問自答することが求められるので、もう少し深めていきたい。



十勝毎日新聞 2024年10月9日

5. まとめ

科学研究の倫理的側面を考えるきっかけのひとつとしてノーベル物理学賞、化学賞を取り上げた。過去に情報科学分野の研究が受賞対象になったことはなく、しかも複数分野で関連する研究が対象になったこともなかったので注目された受賞であった。

物理学賞では、数多く行われてきた人間の脳の仕組みを解明しようという研究のなかでも脳の働きを人工的なニューロンネット



北海道新聞 2024年10月10日

ワークで表現しようとしたAIの基礎があり、後に機械学習、深層学習へと発展した研究が対象となった。

化学賞では長い時間をかけて膨大な実験データを解析する必要のあった複雑な化合物の構造予測にAIの高度な処理能力を活用してタンパク質の立体構造予測や設計を行った研究が対象になった。

いずれも今後ますます科学研究の現場で重用されると考えられる。しかし、受賞者の一人がその前途について懸念を示しているように「人間の側の関わり方」、科学技術に対する倫理的な思索、行動が一層求められる時代になっていることを、もっと伝えられるような媒体としての新聞の意義、価値を再認識させられるような取り組みに発展させたい。

【WSJ】ノーベル賞受賞「AIの父」、人類への脅威に警鐘鳴らす

2024/10/11 18:00

ジェフリー・ヒントンは今回の受賞で警告の信ぴょう性が増すことに期待

今年のノーベル物理学賞を受賞したジェフリー・ヒントン氏（76）は、自らが技術の基礎を作った人工知能（AI）システムについて次のようなメッセージを発している。安全性への取り組みを本格化しなければ、人類を危険にさらす可能性がある、と。

「歴史的分岐点にいると思う。今後数年でこの脅威にどう対処するかを見極める必要がある」。8日に行われたノーベル賞関係者とのインタビューでヒントンはこう語った。インタビューは、自身の功績に対する誇りとAIがもたらす危険性の両方への警告が入り交じった内容だった。

ヒントンは昨年、グーグルを退社した。それはAIシステムが人間の制御を回避し、軍事に影響を与えたり、危険なロボットを動かしたりする可能性についてより自由に発言するためでもあった。他の経験豊富なAI研究者と共に、オープンAIやメタ・プラットフォームズ、アルファベット傘下のグーグルのような企業に対し、開発競争を繰り広げる高度なシステムの安全性にもっと多くのリソースを割くべきだと呼びかけている。

ヒントンの受賞は、同氏の警告に新たな発信の場をもたらす一方、それを引き起こすAI技術の進展に同氏が果たした決定的な役割を称賛するものでもある。ヒントンは高度なAIシステムは自身の作り出したものを管理する能力が十分あると主張している。これは研究者の間でも論議を醸成している論点だ。

同氏はノーベル賞受賞について「驚くのは、AIシステムが本当に自分たちの言っていることを理解できるという私の主張の信ぴょう性が高まってほしい」と語った。

ヒントンの発言は、AI研究者の一部との対立を引き起こしている。悲観的シナリオにこだわれれば、不必要に技術の進歩が遅れたり、より差し迫った被害、例えばマイノリティ（社会的少数派）に対する差別などへの注意がそろそろなったりする、と考える研究者がいるのだ。

ヒントンは8日、シリコンバレーにあるグーグル本社を訪れ、非公式な祝賀会に出席した。また同社のAI担当幹部らがソーシャルメディアで祝福の言葉を述べた。

9日には、AIを専門とする他の著名なグーグル関係者がノーベル化学賞を受賞した。グーグルのAI開発部門、グーグルディープマインドのデニス・ハサビス最高経営責任者（CEO）とAI研究責任者ジョン・M・ジャンパー氏など3人が、タンパク質の構造予測に関する研究で化学賞を授与された。

人間のように考える

ヒントンは人間の脳をヒントに情報処理を行うニューラルネットワークの研究で、プリンストン大学のジョン・ホップフィールド氏と共にノーベル物理学賞を受賞した。この研究は、チャットGPTの人間そっくりの会話やグーグルフォトの撮影された人物を認識する能力など、今日使われるAI技術の多くの基礎となっている。

ヒントンは2012年、トロント大学の教え子であるイリヤ・サツキバー氏ら2人の大学後生と共に、

写真の画像認識をプログラムされた「アレックスネット」というニューラルネットワークの研究に取り組んだ。コンピュータのアルゴリズムはそれまで犬の写真を、猫や車と識別できない場合が多かった。

同年の画像認識技術コンテストでアレックスネットが圧倒し、ニューラルネットワークの実力を証明した。これは現代のAIブームの扉を開く重要な転機だった。

ヒントンは教え子2人と共同で会社を立ち上げ、グーグルが2013年にこの会社を買収した。ヒントンはトロント大学とグーグルを行き来するようになり、グーグルでニューラルネットワークの研究を続けた。

ヒントンは、オープンAIの共同創業者で今春退社してセーフ・スーパーインテリジェンスという会社を設立したサツキバー氏をはじめ、一流のAI現役研究者からメンターとして尊敬を集めている。

2018年、ヒントンは同じくAI研究者のヨシュア・ベンジオ氏、ヤン・ルカン氏と共に、コンピュータ科学の最高峰の賞であるチューリング賞を受賞した。この3人は現代の「AIの父」と呼ばれることが多い。

災厄を懸念

2023年までに、ヒントンはさらに強力なAIの構築がもたらす結果に警鐘を鳴らすようになった。AIシステムがその開発者の制御を回避し、人類に壊滅的な害を引き起こす可能性について語り始めた。そうすることでAI技術の実用化のリスクに懸念の声を上げる人たちの運動に同調した。

「われわれは大半の人々が想像もつかない状況にいる。デジタル知能は人間よりもはるかに賢くなり、何かをやり逃げたい時には主権を握ろうとするだろう」。ヒントンは昨年のインタビューでこう語った。

ヒントンは2023年春にグーグルを退社すると発表した。その後の数カ月間、同氏は政策立案者やイーロン・マスク氏などのテック企業幹部に対し、AIのリスクを減らすために多くの時間を費やした。

「政府ができることの一つは、大企業が今より多くのリソースを安全性の研究に費やすように強制することだ。例えば、オープンAIのような企業が安全性の研究を後回しにしないように」。ヒントンはノーベル賞のインタビューでこう述べた。

オープンAIの広報担当者は、同社としては安全性への取り組みを誇りに思っていると述べた。

ヒント氏が最近、行動主義を強めていることで、他の尊敬される研究者たちとの対立も招いている。そうした研究者はAIがまだ深刻な害を引き起こす能力を持つには至っておらず、ヒント氏の警告は空想の域にあると考えている。（2024年10月11日付、BY MILES KRUPPA AND D EEP A SEETHARAMAN） WALL STREET JOURNAL（十勝毎日新聞電子版）

十勝毎日新聞 2024.10.11 電子版 (Wall Street Journal)



十勝毎日新聞 2024年10月12日

NIE ワークシートを活用した 時事問題意見文作成

札幌新陽高等学校 教諭 櫻庭 彩寧

1. はじめに

本校は札幌市南区にある私立学校である。現在、全校生徒は 664 名。2022 年度より学年の区分がない単位制に移行し、これまでのコース制「特進コース」「進学コース」「総合コース」「探究コース」の学びの良さを生かした「コンパス制度」を導入した。

それぞれのコンパスの授業の中では、演習に力を入れたり、知識の定着を目指したり、探究的に学びに向かったりなど、それぞれで学習の場が設定されている。

単位制に移行すると同時に、「縦割り」が意識された「ハウス制度」も導入された。全校生徒が「Blue・Green・Red・Yellow」の 4 ハウスに分かれ、学校祭や体育祭はハウスごとに競い合う。日常の HR も、混合で行われる瞬間があり、3 年生の進路活動の様子を下級生が聞いていたり、1 年生の初めての学校行事に上級生がアドバイスしたり、思い出を語ったりなど、学年を超えた交流の場がある。また、2・3 年次の一部授業は学年をまたいで合同で行われているため、相互で学び合う瞬間がある。他にも、学校行事ではハウス内の他学年・他年齢と交流することがある。それらを通じ、多様な人との出会いを経験させるねらいがある。

新陽高校は 2030 ビジョン「人物多様性」を掲げ、多様な生徒一人ひとりに合った「学び方」を選択できるようになり、それを実現できるような環境の整備を図った。

2. コンパス制について

2022 年 4 月から単位制は始まり、自身の学び方を示す「コンパス制度」を導入した。

「アカデミア（アドバンス/ジェネリック）：大学の授業や研究などで高度な専門性の高い学習に必要な能力が身に付く学び方 ※アドバンスがより高度」

「クエスト：探究的な活動を通して新しい価値を創造する力が身に付く学び方」

「パイオニア：基礎学力の定着を目指すとともに自分の得意分野が見つかる学び方」の 3 つのコンパスを設定。

本校入学時に決めたコンパスで 1 年間学び、2 年次以降は自身で自由に時間割を設計することが可能となっている。

今回の授業実践については、1 年生「現代の国語」、2・3 年生「国語表現」、受験対策希望者の 3 年生で行った。

3. 実践の背景

2022年度より新教育課程となり、共通テストの出題については現代文が一つ追加されることが示されていた。受験対策で言えば、知識と日常を繋げる仕掛けが必要となり、また、受験突破の技術として時間配分や解き方の指導が必要となる。

共通テストで追加された現代文の問題について、「実用的な文章」が加わったことで図表の読み取りが今回課せられていた。試作問題や、今年度の共通テストからも、最近の時事問題に関連するテーマの題材が出てきている。「文章」を読むだけでなく、様々な情報に関連させて思考することが必要となる。

そしてその礎となる基礎学力の定着や、「考えること（思考すること）」「書くこと」への抵抗感を減らすために、ワークでの学習を検討した。

本校は定期テストを廃止し、単元ごとのテストの実施や小テストを行って知識の定着を確認しているが、意図的に教員が記述問題、その解き方を指導しなければ、解くこと自体を諦めてしまう生徒がいることも事実である。

そのような、学びを諦めてしまった生徒、諦めそうな生徒を支援しながらも、受験や進学を考えている生徒たちの成長をも促したいと考えた。

4. 対象生徒

先にも述べたように、今回の授業実践については、1年生「現代の国語」、2・3年生「国語表現」、受験対策希望者の3年生へ行っ

た。1年生「現代の国語」については、アカデミアコンパスを選択している20名を対象に実施。このクラスの生徒は、中学生の時から国語が得意で、日本漢字能力検定の準2級に1年生前期で合格するもの、3級を有しているものが教室の1/4を占める割合で存在している一方で、様々な要因で中学校に通えなかった経験から、国語へ苦手感を抱えている生徒が1/4、中間層が1/2と、一人ひとりの国語への向き合い方や学力に差があるクラスである。他のクラスと比較すると、人数については少なく、全体で見ると基礎学力は他よりも定着していることから、学びに向き合う体力もあり、発展的な問題に対しても、国語が得意な生徒が周囲を引っ張り、クラス全員で意欲的に取り組む姿勢が見られる。

2・3年生「国語表現」については、一つのクラスに2・3年生が混在している。（※前年度に個人で授業選択を行なっているため、国語表現を履修しているものは希望者のみ）この授業クラスは2年生8名、3年生15名の合計23名で行われている。2年生については、科目選択の際に、「文学国語」「論理国語」

「古典探究」「国語表現」からそれぞれを受講するか否かを選択している。2年生の場合、受験に向けて選択しているものや、論理国語や文学国語を履修しない代わりに選択しているものが多い。3年生については総合型選抜や推薦入試（公募・指定校）に向けて志望理由書や自己推薦文、面接の対策を行いたいと目的が明確な生徒が受講選択を行なっていた。先のクラスと同様に、国語の学力に差があることはもちろんのこと、加えて学習に

向き合う意欲が多様となり、動機づけが必要な生徒も所属していた。

3年生の希望者については、授業を除いた放課後等に自学自習できるような取り組めるワークが欲しいという要望に応える形で実施。添削をメインに使用することを想定した。

5. 実践内容

ワークについては、北海道新聞社が提供している「道新でワークシート」を活用しながら、そこから発展させて生徒たちに取り組む課題を提供した。

「道新でワークシート」は、北海道新聞で掲載された記事を元に作成されており、10分間程度で取り組ませることができる。また、記事に関連する問題が設けられている。模範解答も準備されているため、それと自身の回答を照らし合わせることで、正しく読めているかの確認を行うことができる。

その学習を行った後に、独自で設定した学習に取り掛かった。

その内容としては

- ①記事の語句を抜き出し、語句の意味調べ
- ②記事で書かれているテーマや出来事、社会問題などについて取り上げ、それらについて調べてまとめる
- ③記事の要約、または読んでみて考えたこと・感じたこと・疑問に思ったことの記述（180字以上）である。（添付画像参照）

（classroomを通じて、document等の文書アプリで記入する場合には、入力のカラムのみを準備。紙に印刷したものに記載

させ場合には、マス目のものを使用した。）

★新聞記事を読み、①問題を解く②情報収集 を行いましょう

【以下、情報を調査・集約・まとめを行いましょう】

①記事の語句を抜き出し、その意味を調べて書きましょう

語句	意味

②記事で書かれているテーマや出来事、社会問題などについて取り上げ、それらについて調べてまとめましょう。

取り上げるもの：

③記事の要約、または読んでみて考えたこと・感じたこと・疑問に思ったことを書きましょう。（180字以上）

【以下、情報を調査・集約・まとめを行いましょう】

①記事の語句を抜き出し、その意味を調べて書きましょう

語句	意味

②記事で書かれているテーマや出来事、社会問題などについて取り上げ、それらについて調べてまとめましょう。

取り上げるもの：

③記事の要約、または読んでみて考えたこと・感じたこと・疑問に思ったことを書きましょう。（180字以上）

▲画像 「道新でワークシート」と共に配布し、取り組ませた。

上：データ配信用（classroomで使用）

下：印刷・配布用

①「意味調べ」については、本校で生徒たちが使用している Chromebook を用いて意味調べを行う。（場合によってはスマートフォンの使用も許可する）本文に載っている語句から意味を調べ、本文の理解を助けると共に、語彙の定着を目標としている。

②「記事で描かれているテーマや出来事、社会問題などについて取り上げ、それらについて調べてまとめる」については、記事の内容から発展させ、関連させる記事や、社会問題について調べてまとめる。

1年生については、関連したものを調べて視野を広げるために活用しているものが多かったが、受験を視野に入れている生徒については社会問題に関連した情報を集めていた印象がある。

③「記事の要約、または読んでみて考えたこと・感じたこと・疑問に思ったことの記述」については、文章を書くことへの抵抗感を無くすることが一番の狙いである。原稿用紙の半分の量を書くことから始め、発展させられれば、400文字程度の意見文作成、小論文の型で文章を書き上げることに繋げられる可能性を感じた。

まずは本文の内容を引用しながら感想を書くことから始め、「国語表現」の授業の中では「要約」の練習題材として活用をした。

受験を考えている生徒については、解決策や意見文の作成に向け、「主張」と「根拠・例示」を一つ取り上げる練習を行なった。

それぞれ、各クラスの状況や目標に応じて記述の仕方を変えていたが、あらかじめ記述の欄については複数の型を準備し、適宜どれを使用するか判断することで目標を明確にできる。今後取り組む際には、改良を行いたい。

6. 最後に

普段はインターネット（授業時は Chromebook を使用）を用いて、情報の収集やレポートの作成を行っている生徒たちだが、今回の学習で自身で情報を読み、整理し、表現することができた。既知の情報と結びつけながら、新しい情報を得て、視野を広げるきっかけにできる。

また、これを基礎として、小論文や長文の意見文の作成に繋げることができる可能性も大いに感じた。読みの題材を、ワークシートから新聞に変更し、自身で新聞の記事の中から一つの記事を取り上げ、それについて同様の取り組みを行う。その活動の中でグループでの意見交換や、新聞紹介のように自身でまとめた文章と新聞記事をセットで他者に見せ、相互に評価することも可能であると感じた。

参考

「道新でワークシート」<https://nie.hokkaido-np.co.jp/worksheet/>

北海道旭川聾学校における新聞を活用した授業実践

北海道旭川聾学校 教諭 福士 文也

1. はじめに

本校は幼稚部、小学部、中学部が併設され
たろう学校である。現在、幼児児童生徒は 20
名在籍している。幼児児童生徒数は減少傾向
にあるため、同年代の集団の形成には課題が
あり、子ども同士が関わる機会が少なく、以
前のように時事や流行について話をする様
子が見られなくなっている。

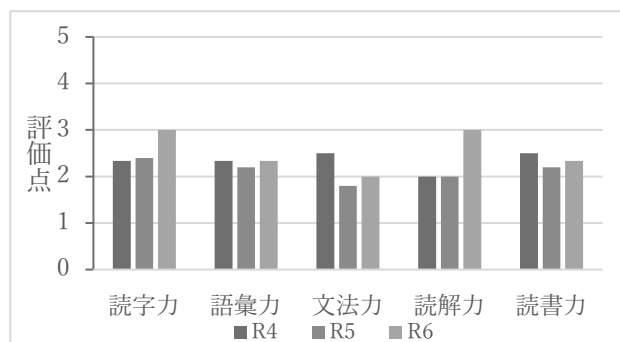
また、聴覚障がい児の課題として言語力の
発達が一番に挙げられることが多いが、耳か
らの情報量が限られるため、情報の獲得も大
きな課題であると言われている。近年ではテ
レビでも字幕や手話通訳の表示が増えてき
ているものの、テレビ等の動画ニュースは
次々と情報が流れていき耳に残りにくいた
め、情報を漏らしてしまったり、聞き間違っ
てしまったりすることが想定される。以前か
ら、ろう学校においては新聞を教材に用いた
自立活動が進められているところであるが、
新聞は情報をつかむための手段として扱わ
れることがほとんどである。

以上の背景を踏まえ、旭川聾学校中学部で
は、今年度、①日本語力の向上を目指した新
聞の効果的な活用、②障がい理解を深めるた
めの活用について焦点を当てた実践に取り
組むこととした。

2. 生徒の様子

本校では毎年、日本語理解力や読字力、語
彙力、文法力、読解力に関する検査を実施し
ており、それら諸検査の結果から本校の児童
生徒は学年相応の日本語力が不足している

という課題が明らかとなっている。



読書力診断テスト結果

つまり、「文は読めるが正確な意味を読み
取ることが難しい」、「自分の考えや感想を構
文したり、表現したりすることが苦手である」
といった生徒が多いと言える。

また、情報の獲得については、YouTube 等
の SNS を使用することが多く、知識が偏って
いたり、情報を誤って受け止めていたりする
こともある。

このような課題を受け、昨年度から新聞を
活用した日本語の指導を進めることとした。
新聞は精査された情報が簡潔かつ整った日
本語で掲載されているため読み取りやすく、
文章力・構文力・表現力等の望ましい日本語
力の獲得や語彙の拡充にとって有効な教材
であると考えられる。

しかし、活字への苦手意識や、家庭での新
聞の購読率が減少していることから、実際に
生徒が授業以外で新聞に触れることはほと
んど見られないのが現状である。生徒が新聞
に親しみ、情報収集の手段として新聞を活用
できる力を身に付けさせたい。

3. 実践の内容

(1) 新聞クイズ

本校では、これまで図書室内に新聞を掲示したり、廊下に新聞記事の切り抜きを掲示したりするなど新聞に触れられる環境作りを進めてきた。

しかし、自主的に新聞を手取る生徒は少なく、家庭で新聞を読んでいる生徒も興味のある欄を読むに留まっていた。

そこで、新聞にはどのようなことが書かれているのか知り、新聞に親しむことを主なねらいとし、「新聞クイズ」を行うこととした。

① 授業時間における全体活動

新聞に書かれている内容を知るため、新聞1部を丸ごと使い、その中から得られる様々な情報を元にクイズを作成した。クイズの実施にあたり、まずは新聞に触れさせる機会をつくった。授業では、新聞1部を生徒たちに渡し、担当する面を決めさせて新聞クイズに取り組ませることとした。

新聞から解答を見つけた生徒は全体に情報を共有しながら、新聞クイズを進めることができていた。



時間内にクイズの解答を全て見つけることはできなかったため、指導者がクイズ後に答え合わせをしながら、新聞の内容を確認させた。

[新聞クイズ (一例)]

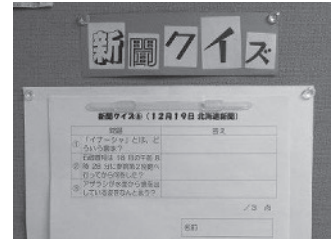
- ・新聞 (朝刊) の定価は1部いくら？
- ・今日の東京の予想最高気温は？
- ・JA 全農の、Lサイズの卵の平均価格は？
- ・明日の旭川市の日の出時刻は？

その他、紙面の記事から全20問を作成

② 授業時間外における個人活動

全体での活動後に新聞クイズを毎日3問ずつ廊下に掲示することとした。

クイズへの取り組みは任意であり、あくまで生徒の主体的な活動を目的として行った。



また、生徒の意欲につなげるために、クイズ正答数の積み上げが分かるグラフを毎日更新して掲示することとした。

取り組みは任意であったが、登校後や休み時間に新聞と向き合う生徒が増え、意欲的に新聞クイズに取り組む姿が見られた。

また、クイズの難度が上がると、友達と協力して新聞クイズに取り組む様子も見られるようになった。



(2) 新聞記事から意見文を書く

昨年度は、聴覚障がいについての知識を広げるため、「まな bell」を活用して調べ学習を行った。新聞を用いた学習を通して聴覚障がいや地域の動きに対する知見を広げることには効果が見られたが、「記事の内容把握に時間がかかる」、「文章の要約に止まり、内容の理解が不十分」といった2点が反省として挙げた。

2点の反省を受け、今年度は全員で同じ記事を扱い、記事の内容に対して話し合う時間を確保することで内容理解を深められるようにした。また、要約だけでは内容の理解が不十分であったため、意見文を作成することを目的として活動を計画した。また、意見文の作成に当たっては、言語力に配慮して国語科と横断的に扱うこととした。

① 新聞記事の内容理解

今回は、聴覚障がい者とも関係している「旧優生保護法」について書かれた記事を扱った。記事には本校生徒も関わりのあるろうあ協会の方からのコメントもあり、関心をもって取り組むことができる記事だと考えた。



北海道新聞 2024年12月11日
本テーマは、文章が難しく、聞き慣れない言葉が多いだけでなく、イメージをもつことも難しい内容であった。

しかし、生徒全員で記事の内容を話し合うことで、「旧優生保護法」や「優生思想」、「不妊」や「人工中絶」といった言葉で躓いていることを自覚し、言葉の意味を調べながら内容を確認していくことができた。

それでも、当事者の思いが文字情報だけでは伝わりにくい面もあったため、当事者が語っている動画を活用することとした。

② 意見文の作成

まずは、記事から得た内容を元に、意見文の構想メモを作成した。構想メモは、記事の言葉を引用して意見文が作成できるように項立てをした。

〈構想メモ〉	
①印象に残った言葉・文 = 書き出し	自分はこの記事を読んで、障害を理由に人工中絶を強いられるという言葉が印象に残った。
②意見・「自分は・・・と思っていた(・・・でした)」 = 本文	自分は人工中絶を強いられるという時代に生まれていたら、大変なことになると思っていた。 差別がある。
③感想・学んだこと・主張したいこと = まとめ	障害者を差別しているけど、逆の立場になっていたら、どうなっているのかなと思った。 障害者の立場になるのはいい。

構成メモを見ると、記事について全体で話し合った際の内容を踏まえて自分の意見を述べている生徒も見られた。

次に構想メモから、意見文を作成した。意見文は書きやすさを意識して3段構成にすることとした。構成メモの項目はそれぞれの段落に対応させており、作文に苦手意識のある生徒でも取り組むことができた。

「新聞を見て思ったこと」	自分はこの記事を読んで、障害を理由に人工中絶を強いられるという言葉が印象に残った。
「自分は・・・と思っていた(・・・でした)」	自分は人工中絶を強いられるという時代に生まれていたら、大変なことになると思っていた。 差別がある。
「感想・学んだこと・主張したいこと」	障害者を差別しているけど、逆の立場になっていたら、どうなっているのかなと思った。 障害者の立場になるのはいい。

4. 成果と課題

(1) 成果

①新聞クイズ

昨年度まで記事の切り抜きから新聞クイズを出していたが、今回は新聞1部をまるごと使ってクイズを実施した。はじめは「そんなこと新聞に載ってないよ」と疑っていた生徒も、クイズに取り組む中で「新聞には色々な情報が載っているんだね」と新聞がもつ情報量の多さに気付くことができた。

また、取り組みを継続することで、生徒たちはクイズの解答を紙面から探し出すまでの時間が短くなっていった。毎日新聞に触れることで、新聞の構成を理解していったためだと考えられる。これは、情報収集の手段として新聞を用いるために必要なスキルである。

これまで、特定の記事を限定的に扱うことがほとんどであったが、新聞に関心をもたせるためには新聞まるごとに触れさせる経験が必要であることが分かった。

②新聞記事から意見文を書く

生徒たちに新聞記事を元に意見文を書かせたことで、日頃使用することのない言葉を用いながら作文することができた。記事を見直しながら作文できるところが他のメディアと比べた新聞の大きな利点の一つである。

また、新聞に書かれた文章を読む（インプット）だけでなく、新聞の言葉を用いて文を書く（アウトプットする）場面を作ることによって、作文スキルの定着や語彙の拡充につながった。

さらに、生徒たちに、新聞記事の内容について全体で話し合わせたことで、障がいへの理解が深まった。生徒の意見文からも、「障がい」や「差別」と向き合おうとする意見が多く述べられていた。

〔生徒の意見（一例）〕

- ・昔の人のおかげで、障害者も暮らしやすい世の中になってきた。
- ・差別された経験がないため、実感がなかったが記事を読んで差別意識というものがあった。
- ・差別意識を持つ人には、まず障害者の立場に立って考えてほしい。
- ・障害者差別の法律はなくなったが、差別意識もなくなる時代が来てほしい。

新聞がもつ信頼性や保存性は聴覚障がい児にとって社会的な課題と向き合わせる上で非常に有効であるといえる。また、新聞では関連する内容が続けて掲載されることが多いため、必要に応じて活用していくことで障がいへの知見を広げていくことも可能である。

北海道新聞 2024年12月28日



（２）課題

①新聞クイズ

今回は新聞1部を全体で共有しながらクイズに取り組んだが、読みたいときに読めないという状況が見られた。

新聞に親しむためには、日頃から新聞に触れることが大切である。従来であれば家庭から新聞を持ってきてもらうことも可能であったが、最近は新聞を購読している家庭も少なくなっている。

そのため、新聞を用いた学習を進めるための十分な環境を設定していく必要がある。

②新聞記事から意見文を書く

これまでも、関心のある記事を選んで感想を発表するなど、新聞を用いた学習を進めてきた。今回は「障がい理解」をテーマに新聞記事を選んで意見文を書くこととしたが、生徒の言語力や関心に合わせて記事を選ぶことの重要性が感じられた。

やはり、活字に対する苦手意識が強く、文量によっては読むことにも抵抗感を示す場合がある。特に関心のない記事に対しては顕著であった。

しかし、中学生であれば社会問題や時事問題にも目を向けさせたい。新聞をより一層活用していくためには、指導者が新聞と向き合い、生徒たちに必要な新聞記事を蓄積していくことが大切になる。

5. おわりに

ろう学校において、生徒が社会に関心を持ち、自分を見つめ、それを表現していく力を身に付けさせていくことが課題となる。新聞は、自分と社会、自分と他者との関わりについて考えを深めるうえでよい教材となる。今後も新聞を効果的に活用した授業の在り方を探していきたい。

編集を終えて

2024 年 12 月初旬、道東の別海町野付中学校で、野付学区学校運営協議会主催の野付小 5 年生・野付中 2 年生合同「まわしよみ新聞」の授業が公開されました。この授業のねらいは、小中の異学年グループでの「まわしよみ新聞」活動を通して、①情報リテラシー ②思考力・判断力・表現力 ③中学生のリーダー性の育成や、小中学生の「ギャップ」の軽減を目指しています。最初は互いに遠慮気味ですが、次第に中学生のリーダーシップの元、小学生が自分の選んだ記事を自分の言葉で説明したり、中学生がグループの仲間の話をしっかりと受け止めたりする姿が見られるようになります。さらに、1 枚の壁新聞として完成していく過程で仲間意識も高まっていきます。別海町では、毎月最終週の月曜日に町内全児童・生徒に新聞が配布される「別海町新聞の日」が実施されており、この下地がしっかりと活かされた「まわしよみ新聞」の活動となっていました。非常にアナログな新聞活用ではありますが、本来の新聞記事の良さを活かした素晴らしい授業提案でありました。

2024 年度の各地の地区セミナーでは、ICT を有効に活用した授業が多く見られました。ICT を活用することで、多くの情報を子どもたちの端末に瞬時に提供したり、ボードを活用し互いの意見を交流し合ったりすることが短時間で実現していました。しかし、一つの記事にしっかりと向き合って自分の考えをもち、交流し合う時間も大切にしていかなければなりません。今後、デジタルと紙をどのように融合した単元構成を工夫していくのか、子どもたちの実態や単元のねらいからしっかりと考えていかなければならないと思います。

さて、2024 年度 N I E 実践報告書では、上記のような ICT 活用による記事データベースの活用事例が多く紹介されています。また、最近全道でも多くなっている義務教育学校での実践も掲載され、校種間連携の意味からも大変参考になる実践記録となっています。

本編が有効活用され、各学校でねらう子どもの姿の育成に、この実践が活かされることを願っております。

北海道 NIE 推進協議会

NIE コーディネーター 上村 尚生

2024 年度 NIE 実践報告書

2025 年 5 月発行

北海道 NIE 推進協議会 編

事務局 北海道新聞社みらい教育推進室

〒060-8711 札幌市中央区大通東 4 丁目 1

TEL 011-210-5802

e-mail nie@hokkaido-np.co.jp